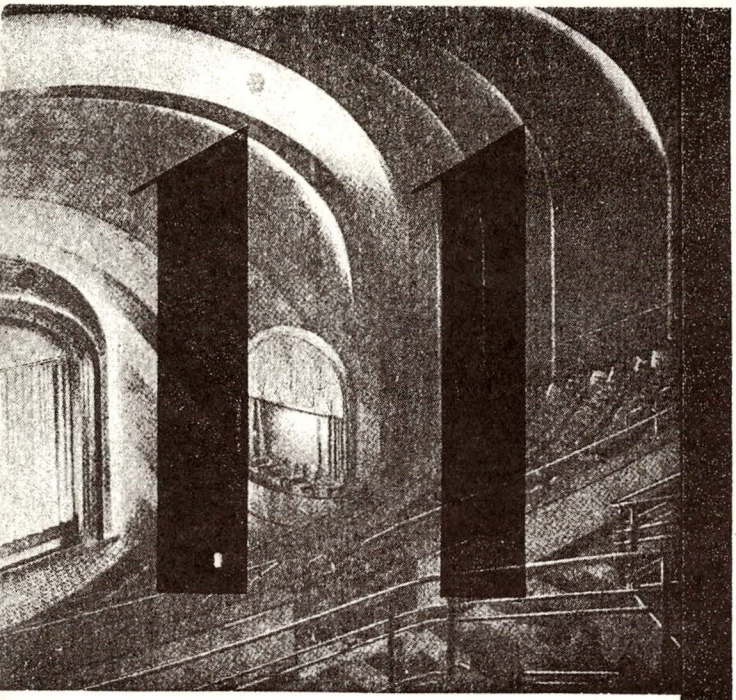
大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
昭和六年十月廿七日印刷納本
昭和六年十一月一日發行（毎月一回一日發行）（第拾四輯第十一號）

建築と社會



特輯記事

映畫館

第十四輯第十一號
昭和六年十一月一日
日本建築協會

世界最新建築圖集

日本建築協會編

1929～1930 年版

人は常に新しいものを欲求してゐるが、これは精神の糧として洵に當然なことで、殊に建築家が新しい建築に關心を有つて、これが研究消化に努むることも亦極めて當然であつて、それ故にその使命が完璧さるゝのである。

1929~1930 兩年度に亘りて歐米諸國で建築された多くの事務所、銀行、官衙、學校、公會堂、圖書館、教會堂、住宅、工場等の中で尖端的な最新建築を紹介したのが本書である。大體に於て建築の最近潮流、傾向なりが本書に據つて一目瞭然たるわけである。向學の學生諸君、建築家及一般同好者諸氏にこつて絶好の參考書なりと信じます。

● 體裁 四六版 100頁
上質全アート紙
寫眞版500餘

定價 50錢 〒10錢 ●

社團法人 日本建築協會發行
大阪·西區·大同ビル720
振替口座大阪39975
賣捌 丸善本支店
柳々堂書店

商標登錄 OHNO SHUTTER PATENTED

特許第七九三五號 延長許可(外十數件併用)

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式自働防火鎧戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉
應用特殊機械類
特許不二式サッシ受托販賣

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)七三三七・七三三八番

大阪市此花區上福島二中・電話福島(45)八八五番・所員出張取付

『建築と社會』表紙圖案懸賞募集

本會發行の雜誌『建築と社會』昭和七年度用の表紙圖案を左記の規定によりまして懸賞募集致します

昭和六年十一月

社團法人 日本建築協會

一、題號　『建築と社會　第十五輯　第　號　日本建築協會　昭和七年一月一日』と適當に配置し『建築と社會』の題字は成るべく上部に左書きのこと

一、寸法　四六倍版(竪二六糎、横一九糎)

一、着色　二色(紙色の外)

一、圖面　原圖紙を用ひ現寸とす

一、意匠　隨意なるも本誌の特質を表現するに足るもの、但し他人の意匠を剽竊せるものと認めたるときは審査せず

一、賞金　入選　一人　賞金五拾圓

佳作　若干　賞金拾圓宛

一、締切　昭和六年十二月一日締切、但し郵送のものは當日の消印あるものに限り審査開始まで受付く

一、版權　入選圖案の版權は本會の所有とす、入選圖案は修正して用ふることあるべし

一、審査　審査は本會依囑の審査員と編輯常務之に當る、入選は合議に依つて決定す

一、暗號　圖面には暗號を附し、別用紙に暗號、住所及氏名を記入したるものを別封書として差出すこと

一、發表　『建築と社會』第十五輯第一號誌上にて發表す

一、圖案　應募圖案は一切返却せず

社團法人 日本建築協會々報

生活改善健康住宅展覽會後援經過

今回生活改善健康住宅展覽會主催當協會後援の下に神戸鈴蘭臺に於て（自九月十日至十月十一日）間住宅展覽會を開催したり其の經過左の如し。

三月九日

生活改善健康住宅展覽會總裁黑瀨弘志氏の名義を以て會長宛書面にて神有電車沿線鈴蘭臺に於て生活改善健康住宅展覽會開催するに付後援方依頼の正式申込ありたり

同　九日

開會の常務會に於て後援をなすや否に付協議の結果古宇田副會長に於て尙先方と直接後援程度其他に付交涉することに決定

四月八日

開會の常務會に於て愈々後援することに決し左の通審査委員及準備委員を依囑す

審査委員長　會　長　片岡　安氏
審査委員　副會長　古宇田　實氏
同　同　日高　胖氏
同　住宅委員會委員長　葛野壯一郎氏
同　京都帝國大學教授　藤井　厚二氏
準備委員淺野　金藏氏　岡部　顯則氏
瀧澤　眞弓氏　本間　乙彥氏　松本　儀八氏
南　信氏

四月九日　展覽會總裁に對し會長より後援承諾の旨回答書を發す

同二十二日

神戸オリエンタルホテルに於て展覽會役員初回の會合をなし總裁黑瀨弘志氏會長進藤信義氏其他副會長理事等の役員出席本協會より片岡審査委員長外八名出席展覽會開催に付諸事打合をなす

同二十七日

第一回準備委員會を開き後援としての準備に取り掛る

同　二十八日

展覽會場現地調査の爲審査委員、準備委員八名神戸に出張し展覽會側直木顧問、加藤副會長、伊藤理事其他と共に鈴蘭臺に至り現地を踏査したり

同　三十日

淸交社に於て愈々實行準備會を開き本協會より古宇田副會長外六名展覽會側より加藤副會長外二名出席ありて左の件に付申合せをなし覺書を交換したり

一、協會が展覽會の爲に要する諸經費は展覽會より支出することゝし金七百圓提供するの件
一、協會出品物の運搬費等は展覽會より支出するの件
一、實物住宅出品勸誘に關する件
一、建築材料出品勸誘に關する件

五月十二日

開會の常務會に於て準備委員の增員を必要と認め左記諸氏に依囑することを議決し夫々囑託をしたり

小川　陽吉氏　小川安一郎氏
大原　芳知氏　阪井　米吉氏
末澤　周次氏　村野　藤吾氏
森本　藤吉氏

尙委員淺野金藏氏は香里園改善住宅展覽會準備委員を願ふことに變更せり

五月二十日

第二回準備委員會をライオン食堂に於て開き委員長の互選をなし左の通決定

委員長　岡部　顯則氏

尙左の件に付協議したり

一、小住宅設計圖案懸賞募集規程の件
一、實物住宅出品勸誘分擔の件
一、展覽會場に於ける住宅建設地の地割模型作成の件

六月五日

第三回準備委員會を開き左の件を議す

一、實物住宅出品勸誘の件
一、懸賞募集の懸賞金及締切期日の件
一、準備委員の展覽會現地踏査の件

同十一日

展覽會場現地踏査の爲本協會より古宇田副會長、岡部委員長外五名は展覽會側加藤副會長外二名と共に鈴蘭臺に至り調査の後協議會を開く

同二十日

第四回準備委員會を開き實物住宅出品勸誘結果甚だ面白からざるに付凝議の上特殊出品として請負出品案を採用し契約書等を作成し展覽會に諮り同意を得て再度勸誘を試みたり、尙委員增員を認め岩尾保衛氏に委員を依囑することに決す

七月三日

第五回準備委員會を開き特殊出品の勸誘狀況に付各委員報告の結果展覽會側とも協議し地所の關係もあり結局住宅出品勸誘は今日にて打切り建築材料出品勸誘に努力することに決す

同二十一日

第六回準備委員會を開き左の件を議す

一、建築材料其他の出品場所の件
一、同出品規程の件
一、同出品勸誘分擔の件
一、其他

八月七日

第七回準備委員會を開き左の諸件を決定す

一、本協會出品物の陳列計畫の件
一、建築材料其他の陳列計畫の件
尙委員增員の必要を認め會長に要求して左の諸氏に依囑することに決す

白石登喜男氏　谷　隆夫氏
中島　智喜氏　平野　彌助氏
山中　茂一氏

同十一日

準備委員會新委員及委員長の會合をなし委員長より今日迄の經過報告等あり

同十五日

第八回準備委員會を開き建築材料其他

の出品勸誘狀況に付話し合ひ出品者打合會を開催することに決す

八月二十日

清交社に於て片岡審査委員長外四審査委員其他會合し懸賞圖案第一回の審査會を開き應募圖案百九十通の審査を開始す

同二十四日

第二回懸賞圖案審査會を開き當選者を決定す

同二十九日

純清倶樂部大廣間に於て建築材料其他出品者打合會を開き出品に關し諸事の打合をなす

九月二日

鈴蘭臺新興土地建物會社に於て第九回準備委員會を開き左の諸件を決定す

一、出品場所割の件

一、開期中委員の出場日割の件

同十日

出品名	出品者名(次第不同)
住宅模型及建築參考圖表 八十點	日本建築協會 一戸
萬年風呂	合資會社萬年商會 一戸
照明器具明取硝子	島田硝子製造所 一戸
塗料及びサンプル	塗料會館代表者亀谷開作 一戸
フローリングブロック	小笠木材工業株式會社 一戸
A大陶特種タイル B大陶特種タイル	大阪陶業株式會社 一戸
ドアーチエック	日本ドアーチエック製作所 一戸
衛生陶器	東洋陶器株式會社大阪出張所 一戸
衛生陶器	須賀商會神戸支店 一戸
疊	三熊製疊所 一戸
日本瓦	高松菊治郎 一戸
金屬天井	鈴蘭臺に於て生活改善健康住宅展覽會開會す
浴槽其他	同日
衛生器具	本協會會議室に於て片岡會長、日高副會長其他役員列席の上小住宅設計圖案當選者に賞金及賞牌の授與式を行ひたり
リノリユーム	十月八日
建材用藥掛タイル	片岡審査委員長外審査委員展覽會場に於て出品住宅の審査を行ひ名譽賞當選住宅を決定す
金屬天井外六ケ	十月十一日
ペイントワニス類	生活改善健康住宅展覽會は豫期以上の効果を得て盛會裡に本日閉會す
日進式スチールスタツトタイル	住宅出品者及建築材料其他の出品者左の如し
アスベスタスモルタイト	株式會社大林組 三戸
實用ストーブ外三種	新興土地建物株式會社 三戸
スチールサツシ	神戸高等工業學校 一戸
日本トラバーチン	金森工務店 一戸
スレート葺住宅模型一ケ	
特許井上式文化自動排便機	
靴類	
ST式鎧型通風日除	
壁紙及カーテン	
應接用家具セット	
庭園	
タイルテラコツタ	
煙筒臺	
ベンチレーター建具金物	
チヨーホー風呂	
瓦	
食堂用机椅子	
ベニヤ板	
ステントグラス	
電氣器具	
衛生陶器及タイル	
大理石	
佐渡島西店	
勝田製作所	
西原衛生工業所大阪支店	
東洋リノリユーム株式會社營業所	
淡陶株式會社大阪支店	
田村商會	
日本ペイント株式會社	
奥村重兵衛商店	
平田常次郎	
日本モルタイト株式會社大阪營業所	
ピツチコークス株式會社	
汎建製作所	
金王石工所	
東洋スレート株式會社	
井上組工業所	
九州屋靴店 西島三藏	
信誠社	
龜井商店	
笹岡家具裝飾店	
金岡養樹園庭園工務部	
伊奈製陶株式會社大阪出張所	
竹内商會製作所	
西孫南店建築金物部	
平田商會	
西彦製瓦株式會社	
寺井洋家具部	
ベニヤ商會	
ベニス工房	
みよし組電氣工業所	
名古屋製陶所大阪營業所	
道下房吉	

フランス洋瓦其他合計十九個
古元式チェンジコート
敷物　カーテン
セメント製品
ヒコーキ印ルーフキング他四個
石材　標本
硝子製品
家根瓦
家具裝飾.

法制委員會總會

時　九月二十三日午後六時―同九時三十分
所　森永キャンデーストーアー二階
出席者　委員長　池田　實
第一分科　池田、島田
第二分科　小川、久保田、佐藤(松)、作間、酒井、武田
第三分科　久保田(筆)、楠瀬
記事　一、食後委員長開會を宣し直ちに例に依り各分科の經過報告に移る
一、各分科の經過報告終り質問應答ありし後委員長種々意見を述べ、各員も互に意見の交換をなし懇談を重ね後閉會す

住宅委員會第一分科會

時　九月二十八日午後五時三十分―同九時三十分
所　本協會事務室
出席者　幹事　淺野
委員　小山、佐々木、赤松
記事　一、豫て協議の結果作成したる設計概要書に付今一度最初より逐條的に審議をなせり

災害强度委員會

時　九月三十日午後五時三十分―同九時
所　ライオン食堂
出席者　委員長　增田　幹事　大野、古川
委員　佐野、堀田、大西、黑田、篠原　中島、三浦、渡部
記事　一、鐵矢板に關し實地見學に付ては目下大野幹事より知人に聞合せ中なる旨同幹事より報告ありたり
一、鎔接に關し實地見學は先づ試驗方法を研究したる上實地試驗を試むることゝなり大西委員に依頼して次回委員會に標準的試驗方法の參考資料を蒐集して持參を願ひ研究することに決定し大西委員承諾ありたり
一、昨年當委員會より報告したるボーリング表は當委員會に研究必要の爲常務會より一時借り入ることに決定
一、中島委員より朝日ビル建築に付詳細なる說明あり後散會す

日本洋瓦株式會社
大阪出張所
古元工業所
船木商店
田中タイリング商會
建盛商會
熊取谷熊次郎
岩城硝子製造所
松本合名會社
野末商店

敎化委員會

時　十月五日午後五時三十分―八時
所　本協會事務室
出席者　委員長　小笠原　幹事　池田谷、姬野
委員　岡田、芝田、山本
記事　一、委員長より曩に開催せし市及兩協議會の協議會の結果を報告し講師及時間割等を協議決定す

法制委員會第一分科會

時　十月六日午後五時三十分―同七時三十分
所　本協會事務室
出席者　幹事　今林
委員　池田(唯)、加藤、佐藤(正)、島田
記事　一、下水道改良の件
大阪市長に建議することに決定
右參考として大阪市内に冷房裝置をなすべき建築物を今林幹事に調査方を依頼せり
一、地域に關する件
各府縣の回答に依り考ふるに總て大阪府の取扱と同一なるものと認めらるるを以て建議せざることに決定
一、乙種耐火構造建築物に關する件
次回更に研究すること

住宅委員會第一第二分科會

時　十月十二日午後五時三十分―同九時
所　住友俱樂部三階小集會室

第一分科

出席者　幹事　淺野　主査　富士岡
委員　佐々木、赤松、渡邊
記事　一、前回に引續き設計概要書を逐條的に審議をなし一通り完了す
一、來る二十六日臨時に分科會を開催し協議を進めることを申合す

第二分科

出席者　主査　酒井
委員　岩尾、丹藤、小林
記事　一、從來より調査を續けおれる氣象に關し別紙の方法に依り具體的に調査することを決定せり
一、其の資料として中央氣象臺年表五冊購入することに決す
一、氣象調査個所は從來調査せるものを更に地圖に配置し追加をなし全部四十一ケ所とせり

常務會

時　十月十二日午後五時三十分―同八時
所　本協會事務室
出席者　會長　片岡
主記　小川陽、小川安、松本、森本
主計　大原、德政
編輯　高橋、本間、村野
報告　一、九月分會計報告
一、香里園住宅展經過報告
一、鈴蘭臺住宅展經過報告
一、敎化委員會より職工講習會開催報告
議事　一、秋季大會に關する件
一、役員改選に關し臨時總會及評議員

會開催日取決定の件

一、小倉市に於て建築文化材料共進會開催に付物品貸與及建築材料業者に出品勸誘方の件

一、會員詮衡

一、會誌寄贈の件

一、其他

九月例會

時　十月十三日午後三時

見學　朝日ビル

出席者　二〇七名

當日は近來稀に見る猛颶風にて特に集合時前後は風雨一入烈しかりしに拘らず熱心なる會員は續々參集し一先づ朝日新聞社本館三階に少憩、竹中工務店より茶菓の饗應を受けたる後二三十名づゝを各班に分ち同工務店職員諸氏の懇切なる說明を聞きつゝ全階隈なく見學をなし順次解散せり時に午後五時

災害强度委員會

時　十月十九日午後五時三十分―同九時

所　ライオン食堂

出席者　委員長　增田　幹事　大野、古川

委員　堀田、黑田、三浦、渡部

記事　一、前回委員會の申合せに依り黑田委員より電弧熔接現場檢査法設計大要書を提出せられたるに依り之を各員に配布せり

一、右に關し質問並に說明あり其の他種々意見の交換をなし後散會す

住宅委員會第三分科會

時　十月十九日午後五時三十分―同九時

所　ライオン食堂

出席者　主査　末澤　委員　魚田、山田

記事　一、當分科に於て先に決定せる第一、二、三案の臺所設計圖に對する說明書を山田委員より提出さる

一、更に浴室設備に關し別紙の通協議を進めたり（別紙略）

轉勤轉居

◆會　員

長瀨　幸一君　住吉區山阪町三ノ一八

橋本　政一君　港區八雲町二ノ三二

北野　常一君　府下中河內郡八尾町大信寺新田中通五九

森本　藤吉君　住吉區平野莊園

渡邊　義三君　尼崎市難波中通七ノ四八

戶松　茂君　住吉區田邊東ノ町四ノ五

藤井　茂美君　西區北堀江通一ノ二四堀江ビル藤井組工務店內

大森一太郎君　天王寺區眞法院町三二

◆會　員（地方在住）

矢部　芳夫君　東京府下入新井町不入斗五三八

◆普通贊助員

弓馬　重美君　神戶市須磨區太田町四ノ五二

吉田光太郎君　東京市下谷區下根岸町五七

高濱　利道君　名古屋市東區今池一〇ノ五

野田　義雄君　府下北河內郡三鄕村西橋波

友淵　義延君　京都市下京區坊城通七條下ル

高木市太郎君　松山市眞砂町七〇

坂本　佳明君　東成區森小路町八ノ三

小川　政德君　住吉區田邊本町四ノ二六

大倉　荒吉君　長崎市出來大工町一〇ノ四大林組長崎出張所

押川　忠夫君　廣島縣豐田郡忠海町

有田　啓三君　神戶市須磨區庄山町一ノ九三

上野　達郎君　東京市牛込區原町一ノ七二

大槻　貞夫君　千葉市千葉醫科大學構內千葉醫大附屬病院建築場

大林組千葉出張所

石田　直行君　西區北堀江通一ノ二四、堀江ビル藤井組工務店內

◆改　姓

普通贊助員　山縣鶴夫君（舊池田鶴夫）

入退會

入會者

◆會　員

宮地　米三君　浪速區芦原町一一八五、池田建築事務所

此花區上福島北四ノ二三

池田建築事務所

天王寺區生玉前町九四、

遠藤　司君　池田建築事務所

金田　三郎君　南區難波驛前鴻池ビル

池田建築事務所

福知　秀夫君　東區南新町二ノ三三、大阪市電氣局高速鐵道部建設科

長谷川俊弘君　此花區茶園町九八

河合　三郎君　京都市上京區出雲路內河原町八、大倉土木株式會社建築部

伊東　恒治君　京都市上京區大宮竹殿町四〇

◆會　員（地方在住）

岩井　勘二君　東京市牛込區余丁町五六

三菱合資會社地所部

高橋　孝二君　東京府荏原郡荏原町下蛇窪三二一文部省大臣官房

伊藤　谷藏君　東京市神田區猿樂町二ノ三

大森　茂君　東京府立實科工業學校

東京市麹町區永田町二ノ一、大森茂建築事務所

平林　金吾君　東京市外青山穩田一七三

高山　憲三君　東京復興助成會社

森田　茂三君　東京市本鄕區駒込千駄木町五六、土木建築請負業

濱田日出穗君　東京市本鄕區湯島六ノ一〇

吉田　全三君　福山市西町鈴木工務所內

東京市麹町區飯田町六ノ一二

茂手木秀夫君　東京市本鄕區動坂町一〇七、島藤本店

織本道三郎君　東京市下谷區下根岸五八

織本建築計算事務所

坂本　省吾君　東京府荏原郡大井町一一九三、白鳳社建築工務所

前田　峰次君　東京市外千住町三ノ五〇

白鳳社建築工務所

渡苅　雄君　東京府下西巢鴨町宮仲一九八二白鳳社建築工務所

◆普通賛助員

佐原　忠雄君　東區廣小路町一四、南滿鐵業株式會社大阪出張所

吉田　太郎君　廣島縣安藝郡戸坂村、建築請負業

古川　東一君　京都府綾部町川糸、郡是製糸株式會社建設課

岩村　熊雄君　西區薩摩堀南ノ町一、阪本商會大阪出張所、岩元商店建材部

退會者

會員　榎利夫君、神谷新一君、角田吉章君

特別賛助員　角岡庄太郎君

普通賛助員　淺野登君、川上賢三君、妹尾虎一君、高木一雄君、八木武雄君

寄贈雜誌

建築雜誌　每號　建築學會

日本建築士　每號　其　社

建築世界　每號　其　社

建築新潮　每號　洪　洋　社

建築學研究　每號　其　會

建築畫報　每號　其　社

住宅　每號　住宅改良會

インターナショナル建築　每號　其　會

滿洲建築協會雜誌　每號　其　協　會

新建築　每號　其　社

朝鮮と建築　每號　朝鮮建築會

都市人　每號　其　社

土木建築工學　每號　東京工學社

東京工業會誌　每月　其　社

大阪工業俱樂部　每號　其　社

家具指物新聞　每月　其　社

大阪土木建築業組合報　每號　其　組　合

庭園と風景　每號　日本庭園協會

日刊工業新聞　每號　其　社

東洋建材時報　每號　其　會

名古屋工業會々報　每號　其　社

木材新聞　每號　關西木材商報社

工業評論　每號　其　社

工業要錄　每號　其　發行所

大阪　每號　大阪都市協會

都市問題　每號　東京市政調査會

學士會月報　每號　學士會

工政　每號　其　會

國立公園　每號　其　社

關西園藝　每號　其　社

塗料　每號　日本ペイント株式會社

塗工の魁　每號　其　社

鍛工　每號　其　會

電氣學會雜誌　每號　其　會

電氣評論　每號　其　社

帝國鐵道協會報　每號　其　會

朝鮮鐵道協會會誌　每號　其　協　會

セメント界彙報　每號　日本ポートランドセメント同業會

エンヂニヤリング　每號　其　社

經濟資料　每號　東亞經濟調査局

通俗衛生　每號　大阪府衛生會

產業　每號　其　會

日本美術協會報告　每號　其　社

國際建築　每號　其　社

土木建築　每號　其　社

セメント工業　每號　其　社

土木建築工事畫報　每號　其　社

臺灣建築會誌　每號　其　社

白然科學と博物館　每月　東京科學博物館

日立機械評論　每號　其　社

日本土木建築時報　每號　其　社

建築業協會々報　每號　其　協　會

東京土木建築業組合報　其　組　合

香里園改善住宅展覽會會期延期に就いて御通知

十月一日より開催の京阪沿線香里に於ける本協會後援の香里園改善住宅展覽會（實物住宅二十五戸建設）は目下開催中にて盛況を呈して居りますので會期も十一月十日迄延期致しましたから會員諸彦に於ても知人御勸誘の上御觀覽下され度く尚他へも御吹聽を願ひます

昭和六年十一月

社團法人日本建築協會

役員

會長　理事　評議員　片岡安
副會長　理事　評議員　古宇田實
副會長　理事　評議員　日高胖
監事　波江悌夫
監事　光安梶之助
常務（主記）評議員　小川陽吉
常務（主記）評議員　小川安一郎
常務（主記）評議員　阪井米吉
常務（主記）評議員　松本儀八
常務　主記）評議員　森本藤吉
常務（主計）評議員　大原芳知
常務（主計）評議員　岡部顯則
常務（主計）評議員　徳政金吾
常務（編輯）評議員　小西一良
常務（編輯）評議員　高橋榮治
常務（編輯）評議員　本間乙彦
常務（編輯）評議員　村野藤吾
評議員　池田實
評議員　伊東宗太郎
評議員　岩尾保衛
評議員　小笠原鈅
評議員　岡本新次郎
評議員　加藤誠二
評議員　木村寛一
評議員　久保田筆雄
評議員　小寺彌一
評議員　酒井勇三郎
評議員　白石登喜男
評議員　芝田知重
評議員　篠原太郎
評議員　須川廉太郎
評議員　須藤隼人
評議員　武田經一
評議員　高田利一郎
評議員　永田三次郎
評議員　原科準平
評議員　前内文二郎
評議員　三木來三
評議員　村上徹一
評議員　八木幸次郎
評議員　山田砥平
評議員　山田初次
評議員　山中茂一
評議員　渡部圭吾

委員

注制委員會

委員長　池田實
幹事　今林彦太郎
幹事　古塚正治
幹事　和田貞治郎

第一分科（都市計畫に關する事項）

主査　鳥井信
委員　池田唯一
委員　加藤善吉
委員　北垣熊之介
委員　佐藤正次郎
委員　島田良馨
委員　椎原兵市
委員　野呂長四郎
委員　永山三次郎
委員　吉田信武
委員　山田砥平

第二科分科（建築法規に關する事項）

主査　工藤榮治郎
主査　玉置豐治郎
委員　石川寛三
委員　浦英之助
委員　小川久市
委員　梶垣寛
委員　佐藤松太郎
委員　久保田雁
委員　酒井藤一郎
委員　作間日出生
委員　高木眞太郎
委員　武田經一
委員　毛利泰三
委員　矢木英夫
委員　杜貞雄

第三分科（時事問題に關する事項）

主査　津田敏雄
委員　楠瀨澈
委員　竹中景一
委員　篠原清孝
委員　高田利一郎
委員　牧野忠
委員　樋口辰太郎
委員　松久保敬三
委員　松井清之助
委員　八木幸次郎

教化委員會

委員長　小笠原鈅
幹事　池田谷久委
幹事　姫野武
委員　岡田初太郎
委員　芝田知重
委員　藤枝良一

資料委員會

委員長　野村一郎
幹事　須川廉太郎
幹事　三木來三

第一分科（石材、セメント、防水布類其他）

委員　白石登喜男

第二分科（木材、人造板材、疊其他）

委員　山田初次

第三分科（ペイント類、硝子、鐵其他）

委員　三木來三

第四分科（衛生器具類、煖房其他）

委員　山中茂一

災害强度委員會

委員長　増田清
幹事　大野直平
幹事　古川豐

第一分科（强度計算に關する事項）

委員　落藤藤吉
委員　佐野俊三
委員　谷田實
委員　堀田猷次郎
委員　水原大造
委員　山本久吉

第二分科（災害に關する事項）

委員　秋田喜代治
委員　青柳貞世
委員　川口一二
委員　黒田茂
委員　篠原太郎
委員　中島智喜
委員　三浦尙史

住宅委員會

委員長　葛野壯一郎
幹事　淺野金藏
幹事　南信

第一分科（平面、外觀、構造、材料等に關する事項、實行の促進に關する事項）

委員　淺野金藏
委員　伊藤正文
委員　小林武夫
委員　早良俊夫
委員　中山榮太郎
委員　樋口辰太郎
委員　渡邊金藏

第二分科（採光、通風、煖房、衛生等に關する事項）

委員　岩尾保衛
委員　小林三造
委員　中村源太郎
委員　南信

第三分科（設備、裝飾等に關する事項）

委員　魚田常治
委員　末澤周次
委員　増山新平
委員　大西良一
委員　黒田茂
委員　篠原太郎
委員　古川豐
委員　渡部圭吾
委員　赤松修
委員　小山源次郎
委員　佐々木莊一
委員　篠崎兼二
委員　富士岡重一
委員　山脇友三郎
委員　木野山照雄
委員　鈴木總作
委員　山田昭



大阪・中の島風景

建築と社會

昭和六年十一月發行　第十四輯第十號

目次

巻頭挿畫・（大阪中の島風景）……（一）
四つの劇場と舞臺の提案……川喜田煉七郎…（三）
映畫館及劇場建築の様式……黒田鵬心…（一七）
最近映畫劇場建築の動向に就いて……城戸久…（一九）
映畫館建築へ―その方法論的序論―……酒井清一…（二三）
映畫劇場に於ける映寫室の設計について……ウイリアム・ダブリユー・ウイルスン…（二八）
發聲映畫館内の音響……山本和夫…（三六）
建築工事の計劃と實施…(4)……渡邊圭吾…（四三）
大阪都市計畫地域一部變更（第二回）に就いて……加藤善吉…（四五）
大阪城天主閣再建と豐公……德政金吾…（四七）
復興大阪城天主閣に就いて……富士岡重一…（五一）
國際新建築集……（附　五七）
京阪神新建築集……（附　四九）
「建築と社會」表紙圖案懸賞募集規定……（會告）

四つの劇場と舞臺の提案

川喜田煉七郎

一九二七年から一九三〇年迄の間、自分が提案して來た色々な劇場建築と舞台の設計のうちから主要な四つの提案をえらんで比較して見る。紙數が制限されて居るのでくはしい事は述べられない。單な挿圖の説明の程度でお許しをこふ。

このうちには自分の所謂「幻想時代」をふくむ恥しいものもあるが、要するにその外容となつて居る「觀念」のヴエールをとつて、内容である劇場と舞台に關するメカニズムをひろつていただければ幸である。

◇

Ⅰはある民衆娯樂地の中心に立つものとして設計した約千人を收め得る劇場である。舞台の方の機能を見るため、それに必要なプラン(Ⅰの**イ**)とセクション(Ⅰの**ロ**)をあげる。(一九二六年—一九二七年の作)この提案の最も特徴とするところは、舞台から繪畫的な平面的な裝置(かきわりや置き物の類)を拒絶して、舞台そのもの(といふより建築の一部)を動かして、色々な空間を形づくり、光りと音の効果と相俟つて、例へば山とも、谷とも、城塞とも、海岸の場合にも短時間のうちに變轉出來ることである。

大體舞台は三段にわかたれて居る。

(1)はプロセニアムの内部の本舞台で、ここには殆んどその面積の大半を占めて、直徑三七尺の廻轉舞台(REVOLVING STAGE)がある。

(2)がこの本舞台の前にはり出した一種の花道をかねた前舞台(PRO-STAGE)で、その兩端に俳優の登場口がある。

(3)は(1)と(2)との間にある大きな穴(ピット)で、これを丁度上から見おろすと(Ⅰの**ハ**)圖の様に、中央に圓形のオーケストラボツクスを置いてその兩側は前舞台へ登るゆるい階段になつてゐる。

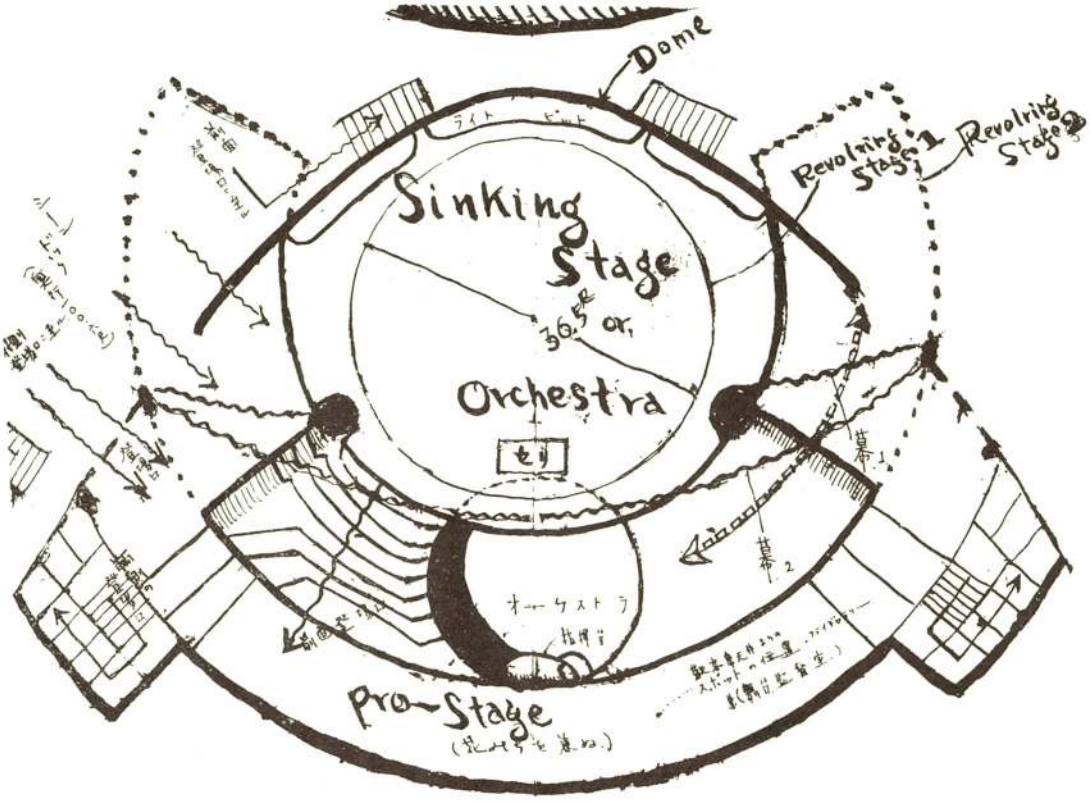
觀客席の方から、この段を登つて前舞台に出てくる俳優を見ると、頭から胸、足と次第に全身が現はれる。群集が一度にこゝから登場する時などことに面白い。さらにこの穴の上には何時でも任意に蓋が出來る。即ち、プラン(Ⅰの**イ**)の様に兩方から、圓弧狀の廻り舞台が出て來る。これは(1)と(2)の舞台の上にその兩端を支へられて滑車によつて容易にすべり出せる。(Ⅰの**ニ**)はその左の半分がしまつたところで、これを利用して圖の様な演出も出來る。これが全部しまると(1)と(2)と(3)が連續した大舞台が出來上る。

尙、(1)の本舞台は水壓のシヤフトにのつて上下にうしろのクツペル・ホリツオント(舞台を一體に見せるために舞台の後にはつたドーム)と一緒に自由に沈下、上昇出來る。これが例へば岡になつたり、城壁になつたりする。

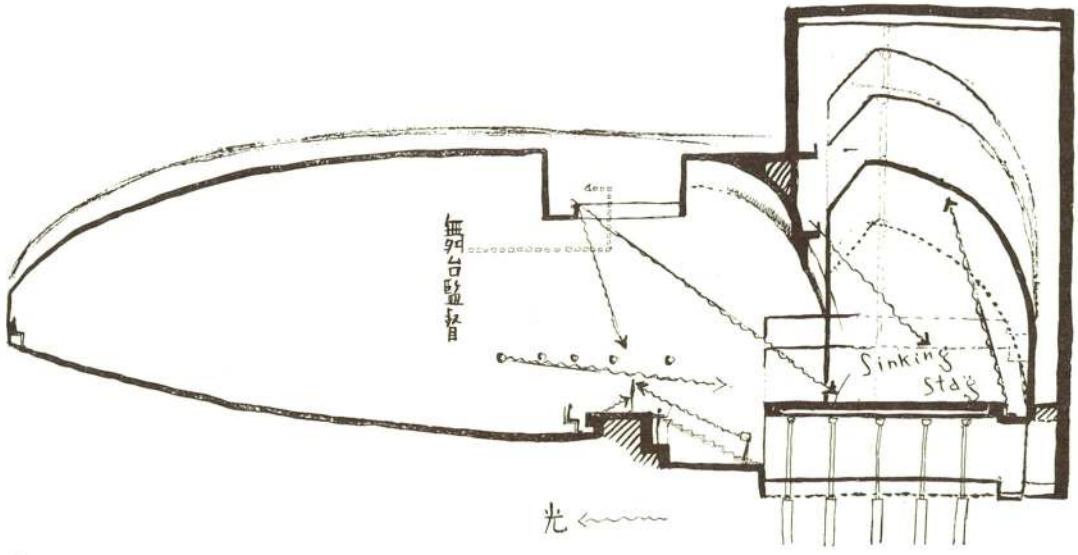
(Ⅰの**ホ**)の演出スケツチはその一例である。

この上下する浮動舞臺は舞臺の上にあらはれた二本のふとい柱によつてその支持を大いにたすけられ、またこの二本の柱は全舞臺を横に三つのパートにわけ、各部分には各々カーテンがおろせる。これによつて丁度、ペレ兄弟のパリ工藝美術博内の小劇場やバンデヴエルトの劇場の様に、色々な演出上の効果が發揮出來る。

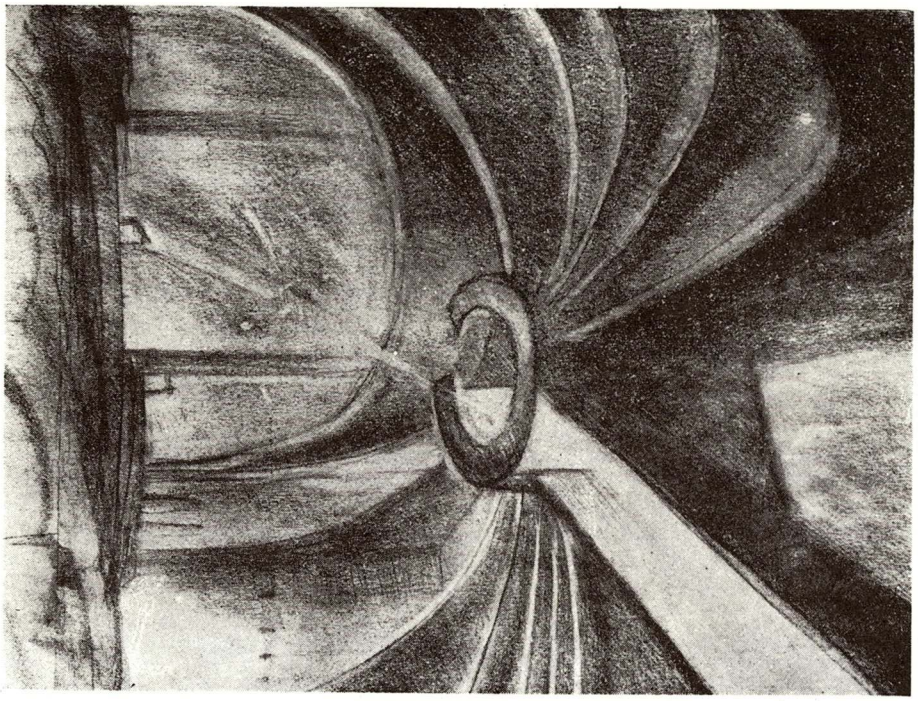
(Ⅰの**ロ**)のセクションと(Ⅰの**ヘ**)に見る様に、前舞臺の上の天井には圓形の室があつて、舞臺監督はこゝから全演出の指揮をする。各パート(照明係、音樂係等々)へはここから電話が通じてゐる。

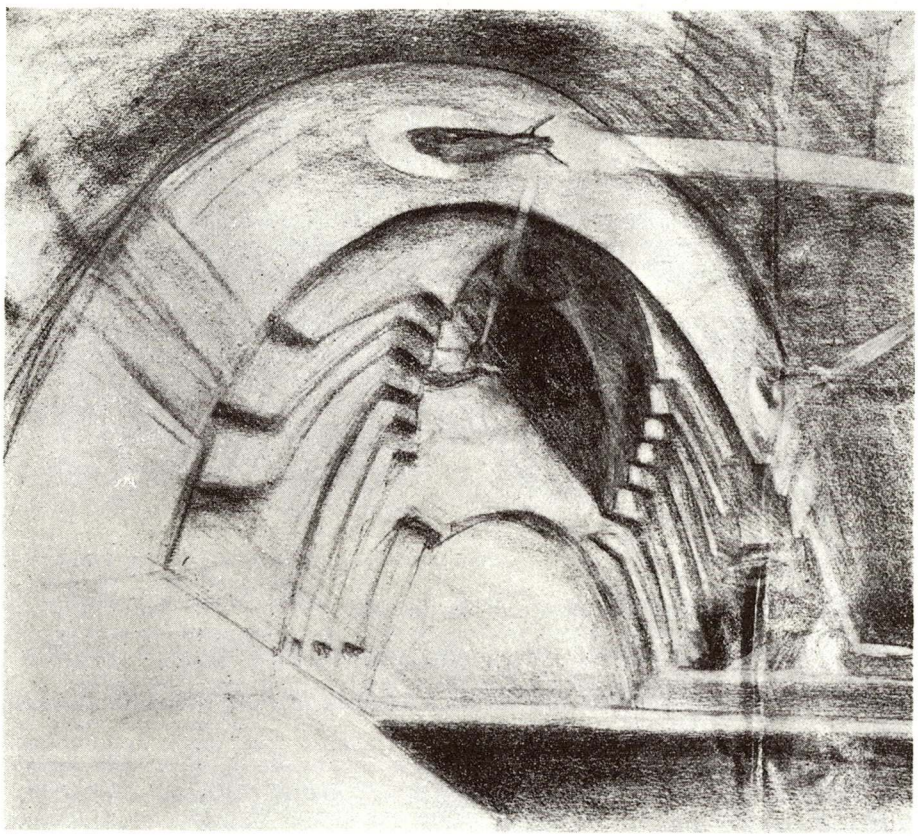

Dome
Sinking Stage
36.5尺 or,
Orchestra
Revolving Stage 1
Revolving Stage 2
Pro-Stage

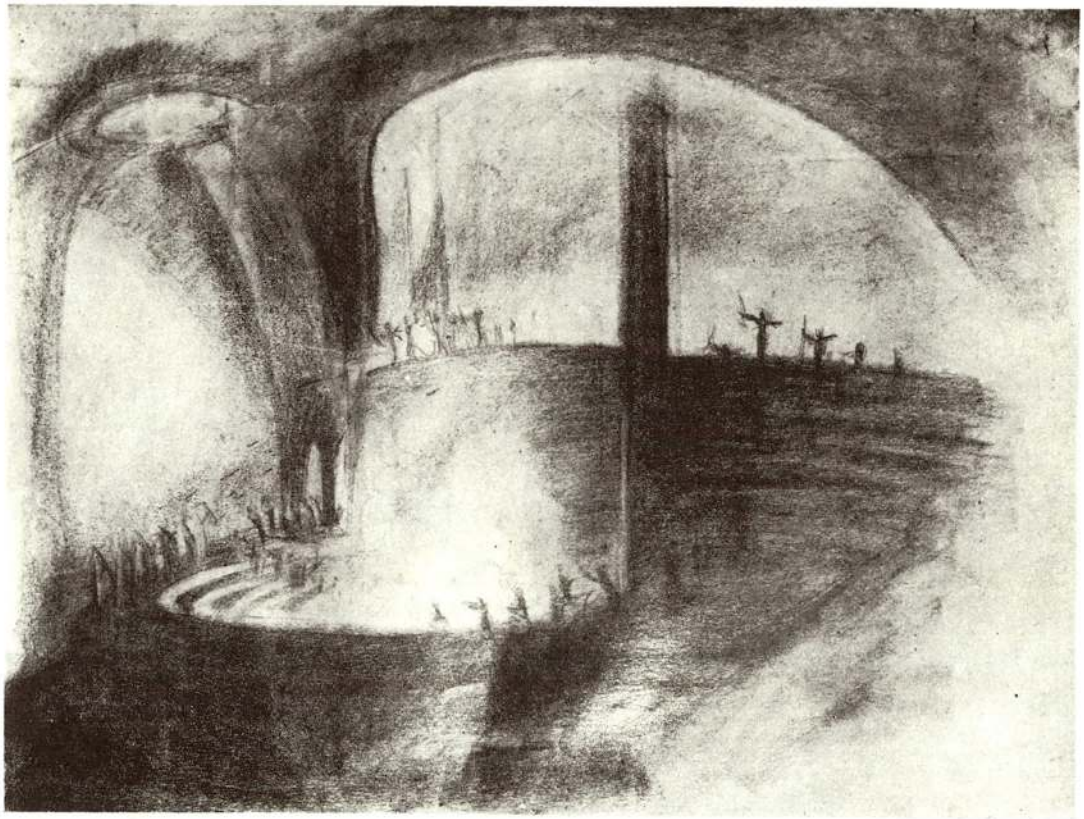
1 の イ


無線台監督
Sinking Stage
光

1 の ロ



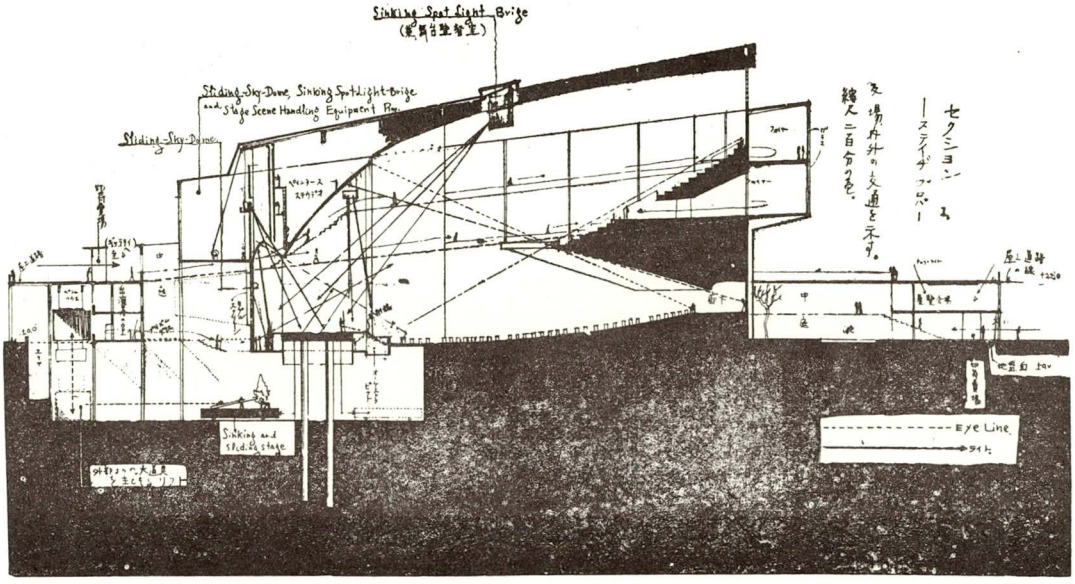




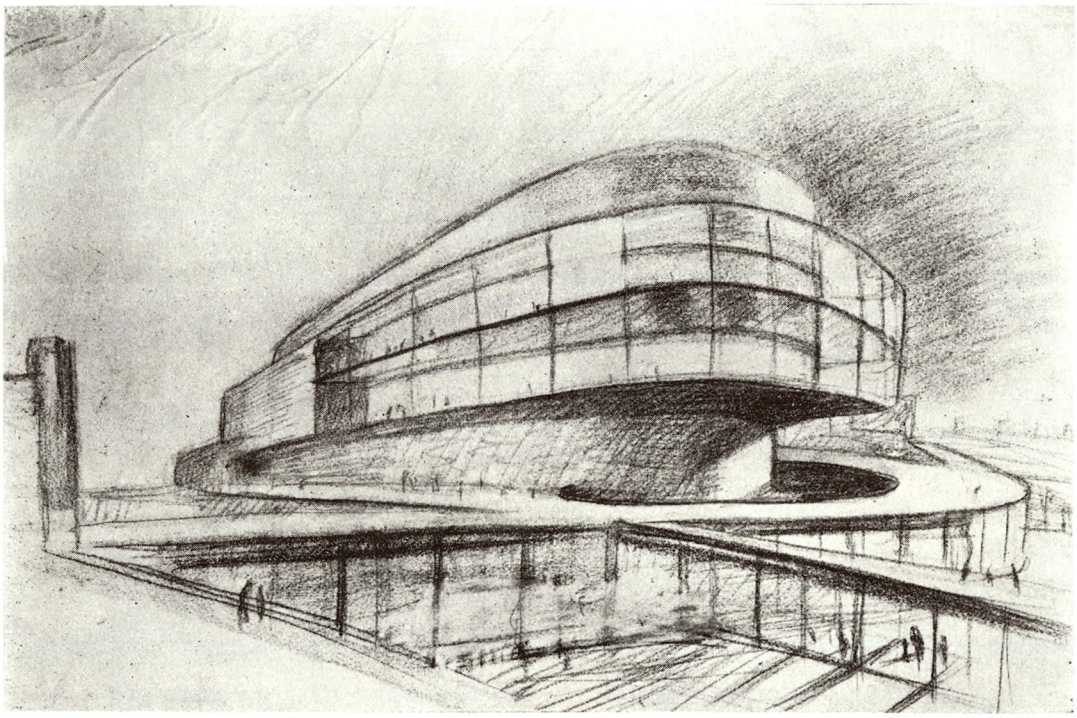
I の ホ



I の ニ

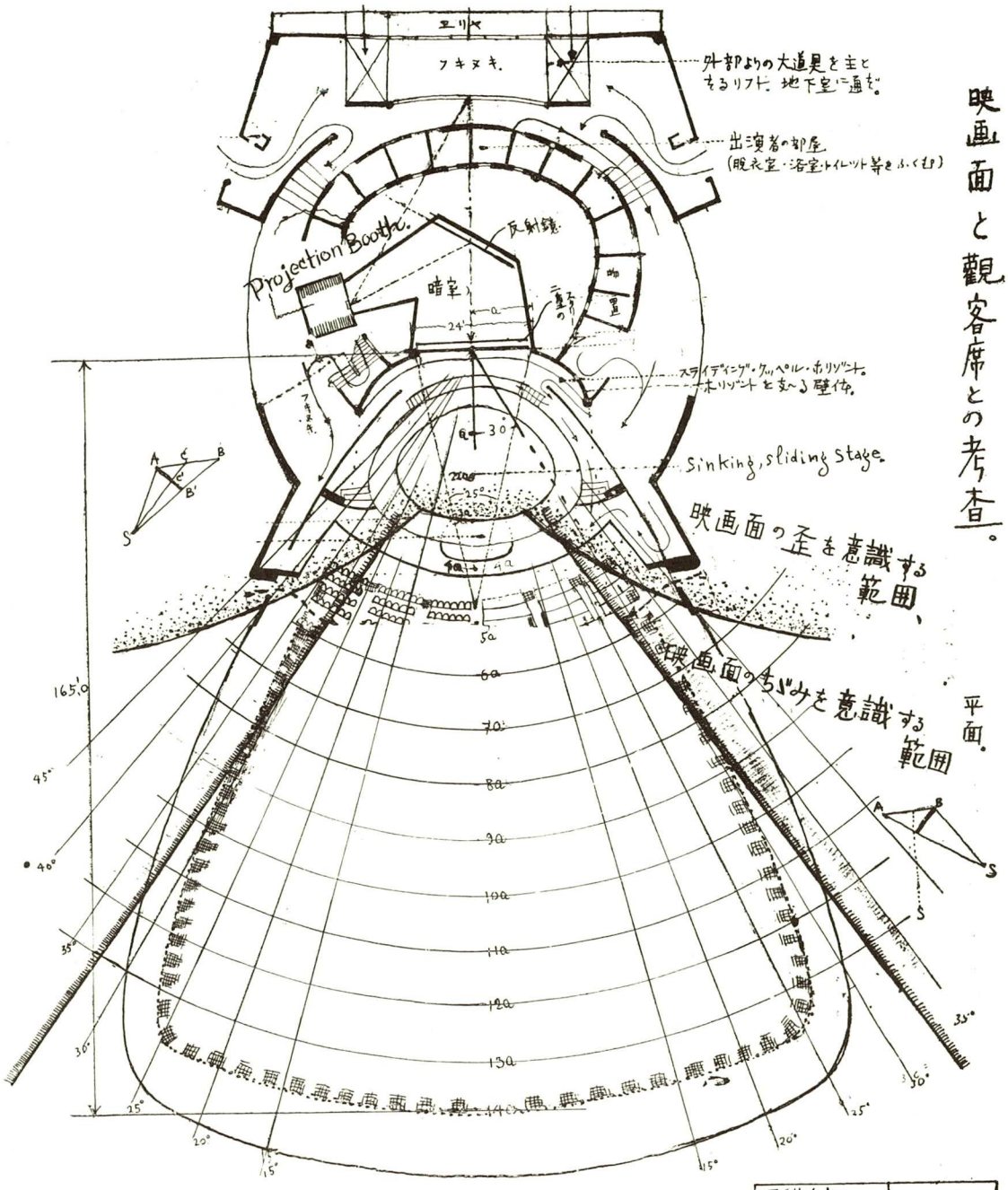


Ⅱ の イ　大衆のためのキノ・兼劇場・兼演奏場



Ⅱ の ロ

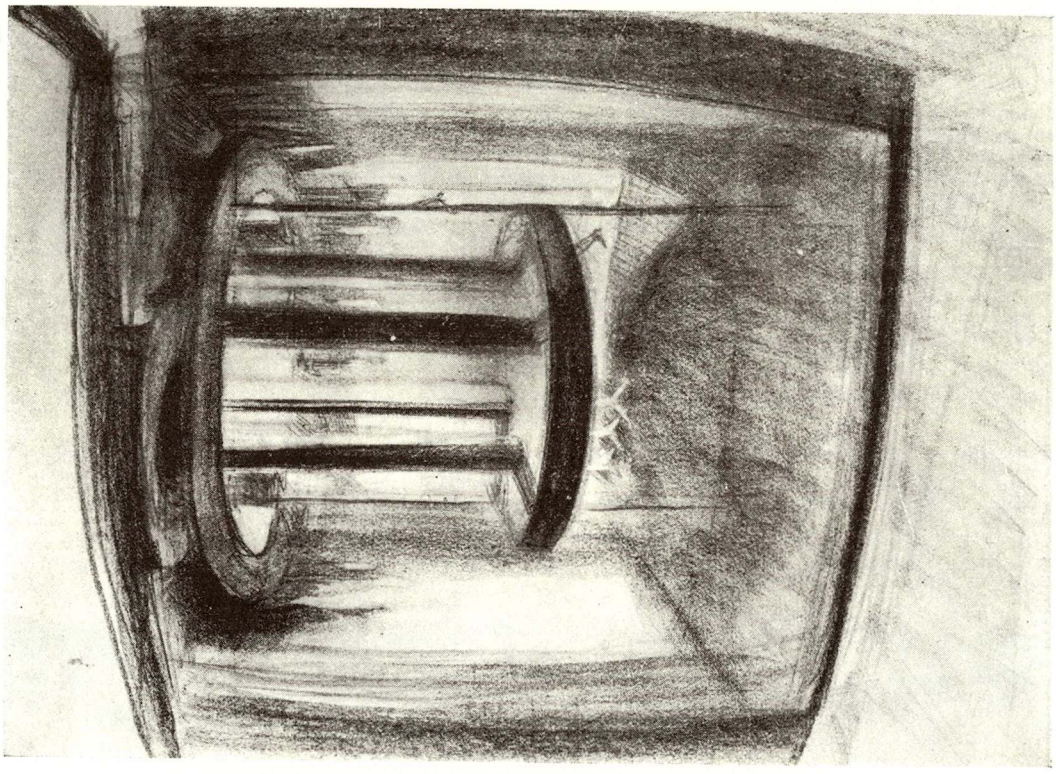
映画面と観客席との考査。



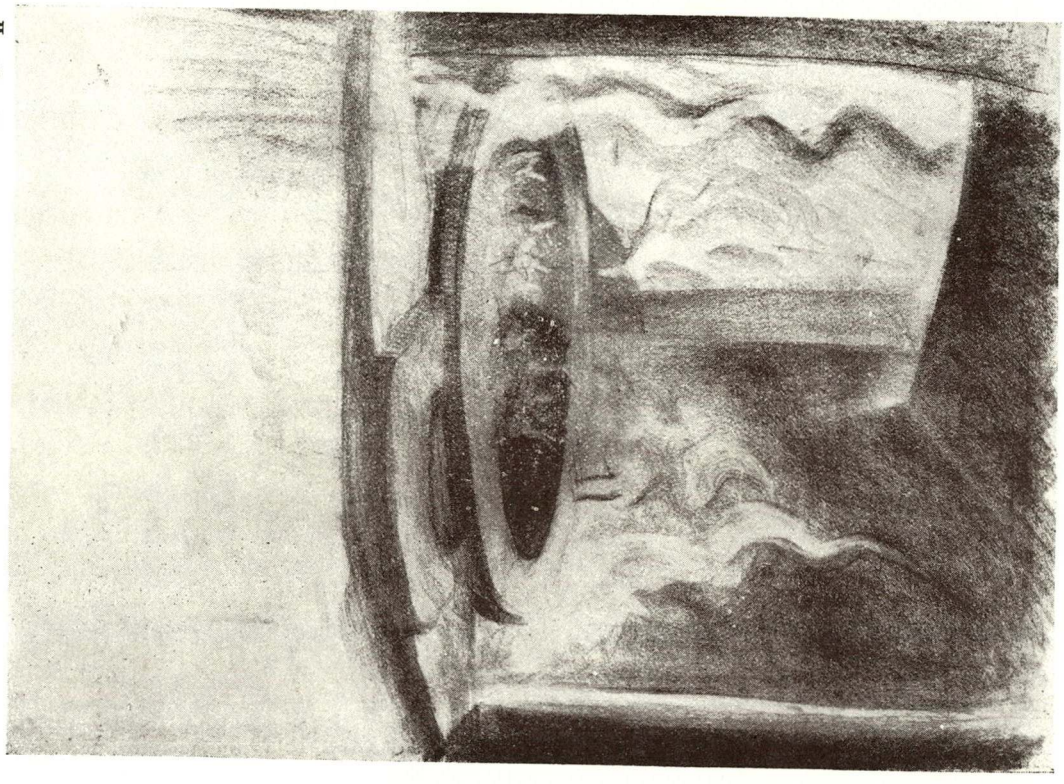
フイルムとスクリーンの距離	55'
レンズの フォウカス	2"
スクリーンの大さ	18"×24'
收容観客数	4250

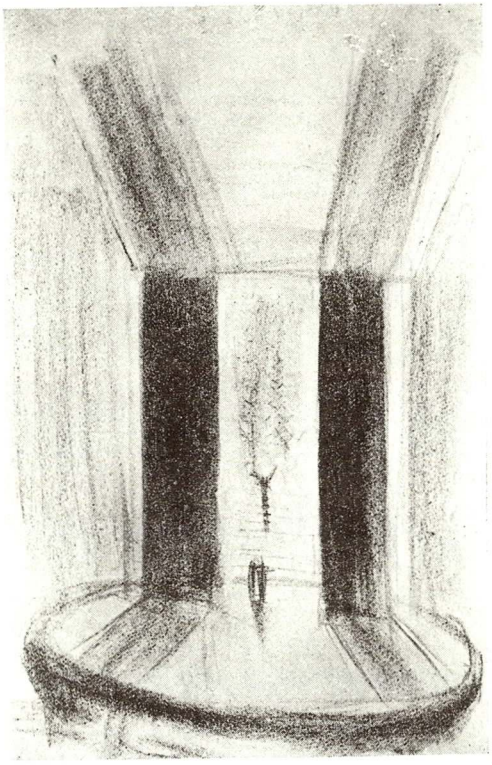
Ⅱ の ハ

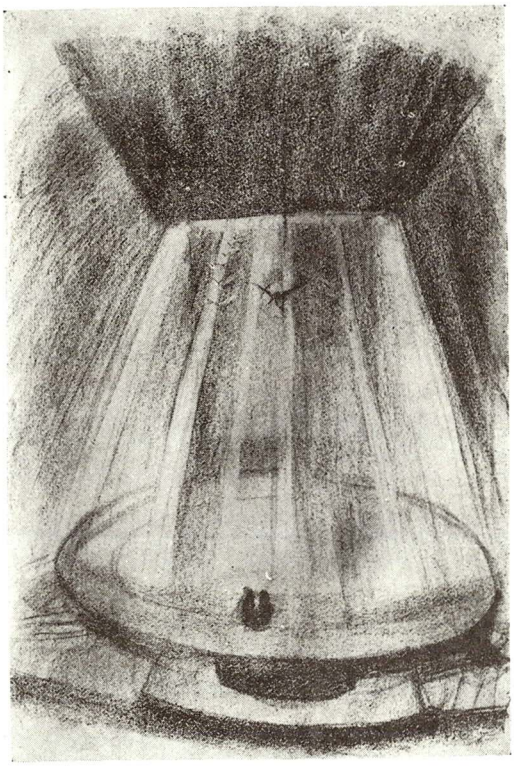
第二圖



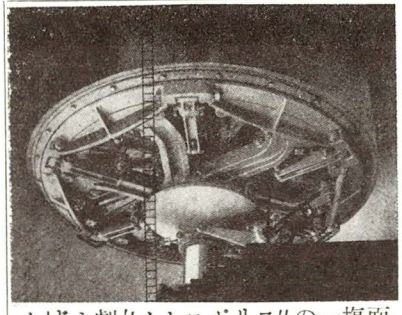
第三圖







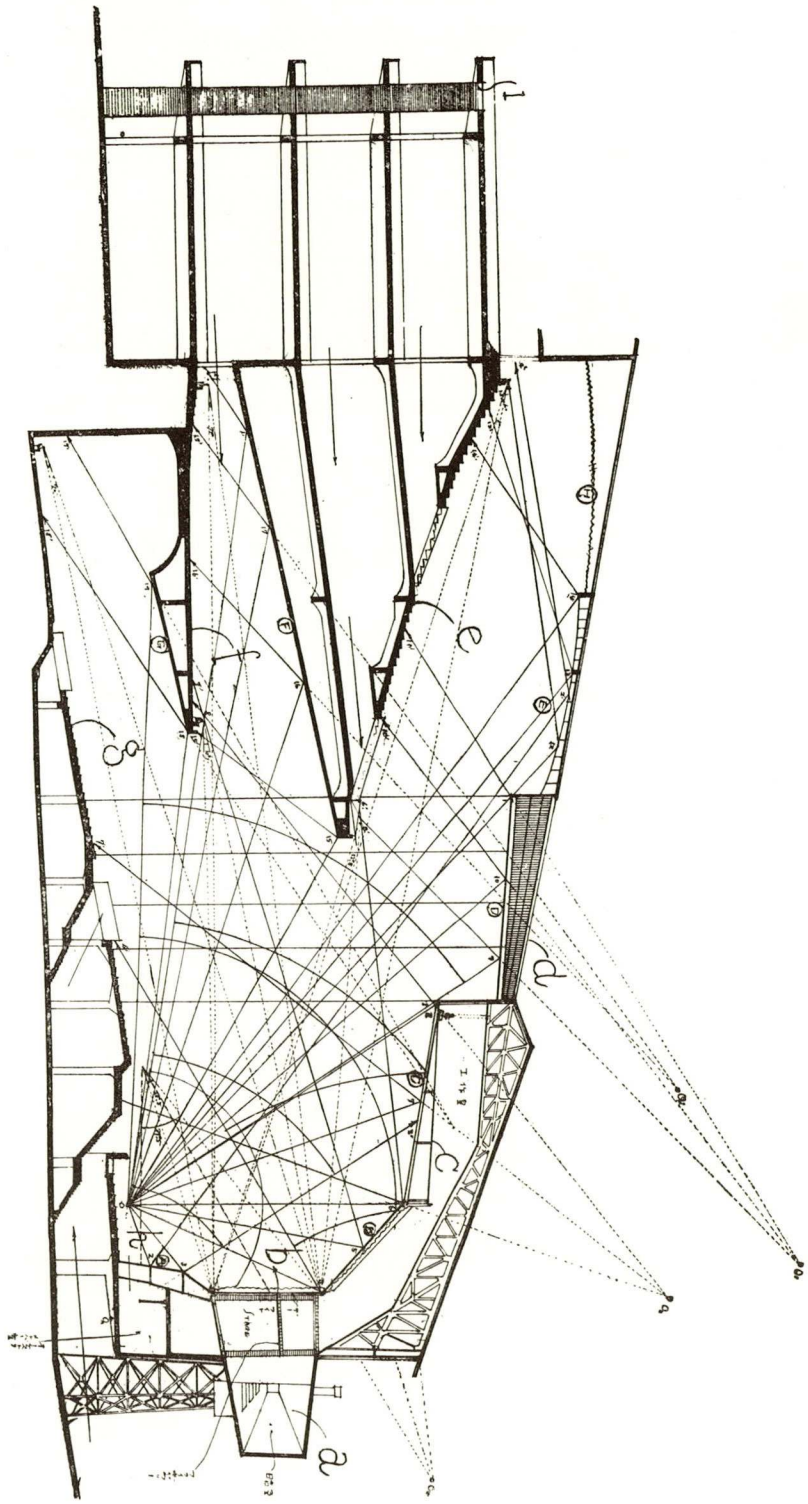
Ⅱ の ヘ

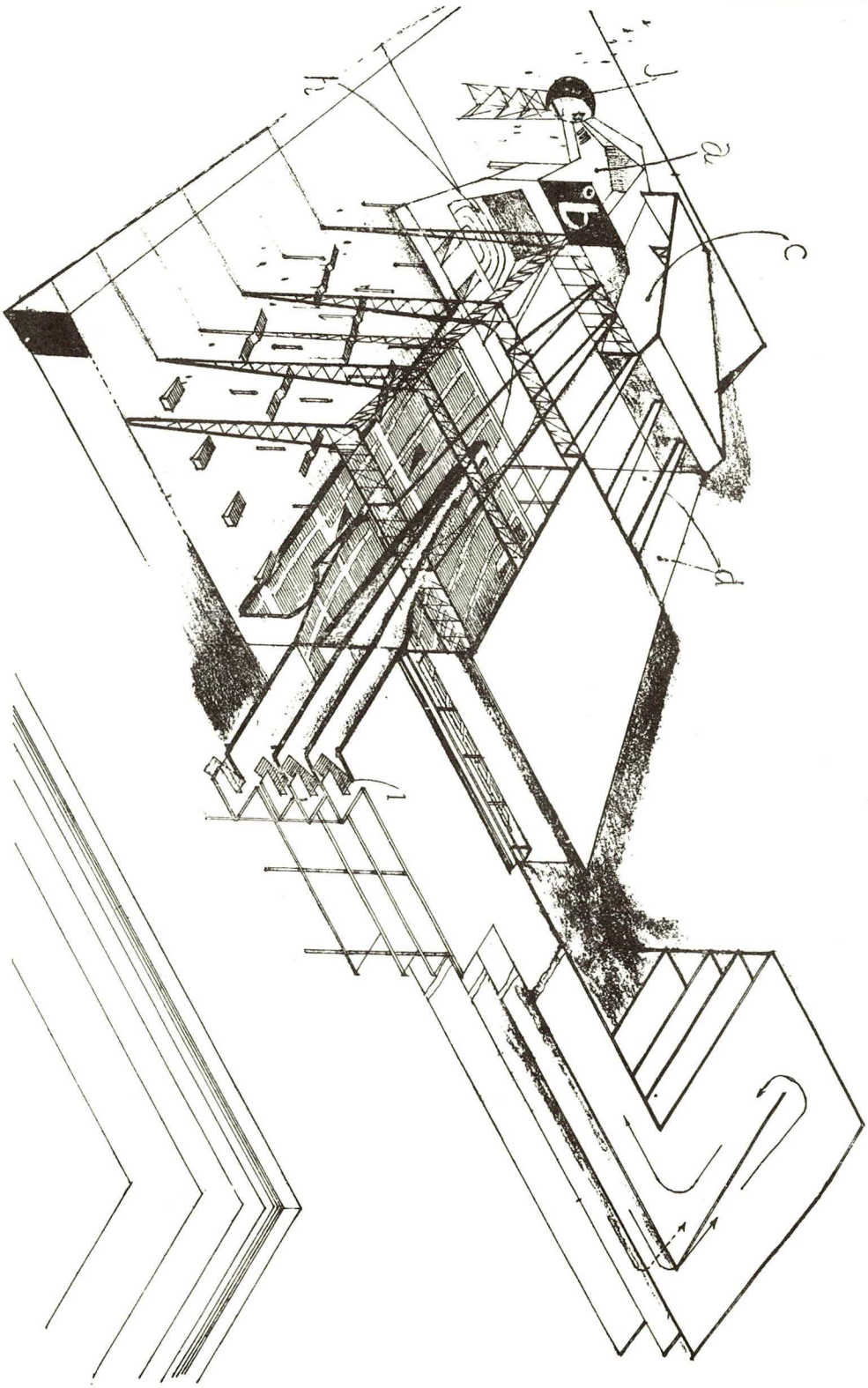


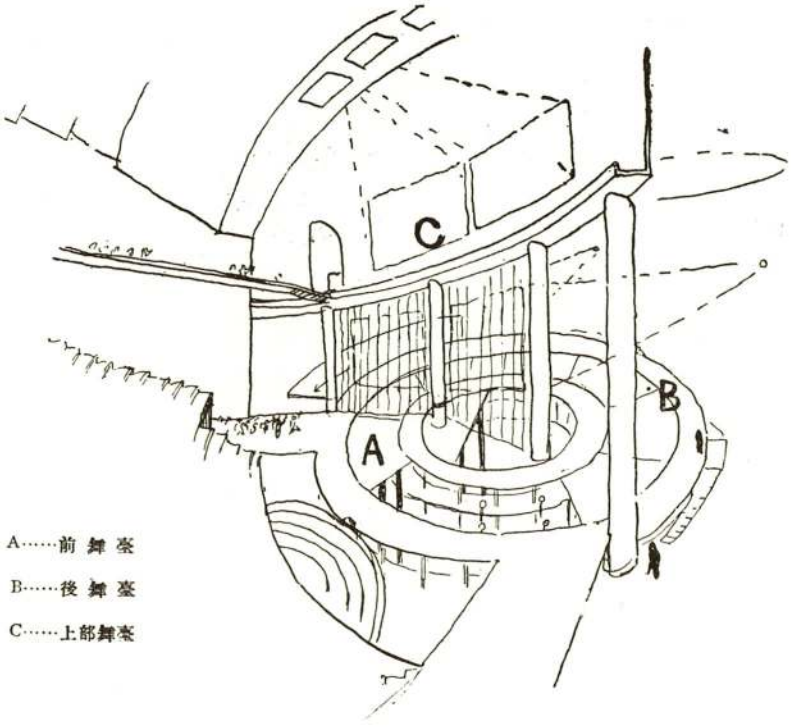
かげえ劇〝メトロポリス〟の一場面

Ⅲ の ハ

第 1 圖




h
j
a
b
c
d
l



A……前 舞 臺

B……後 舞 臺

C……上部舞臺

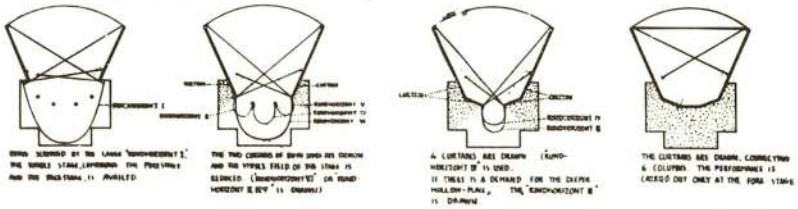
Ⅳ の イ

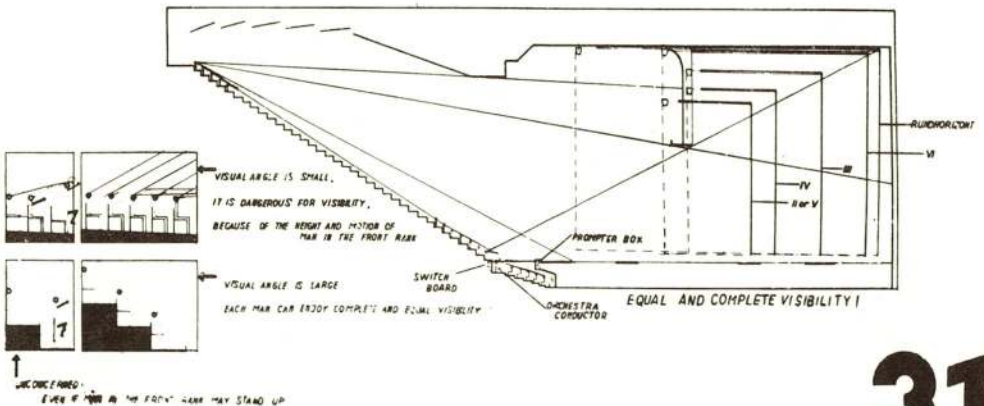
Ⅳ の ロ

SIGHT

R

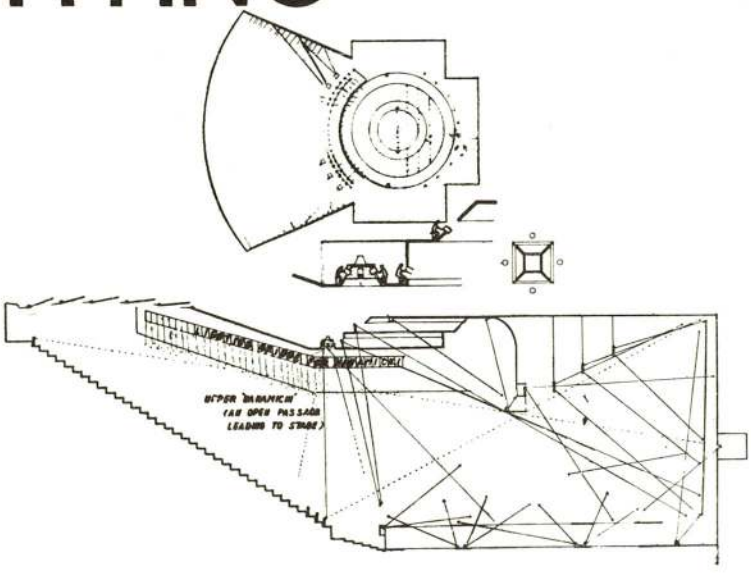
THE SPACE OF THE STAGE IS ABLE TO BE VARIED BY THE CURTAINS AND 6 "RUND HORIZONTS". IN RESPONSE TO IT THE VISUAL FIELD FROM THE SEAT IS FAVORABLY EXPANDED OR CONTRACTED.





31

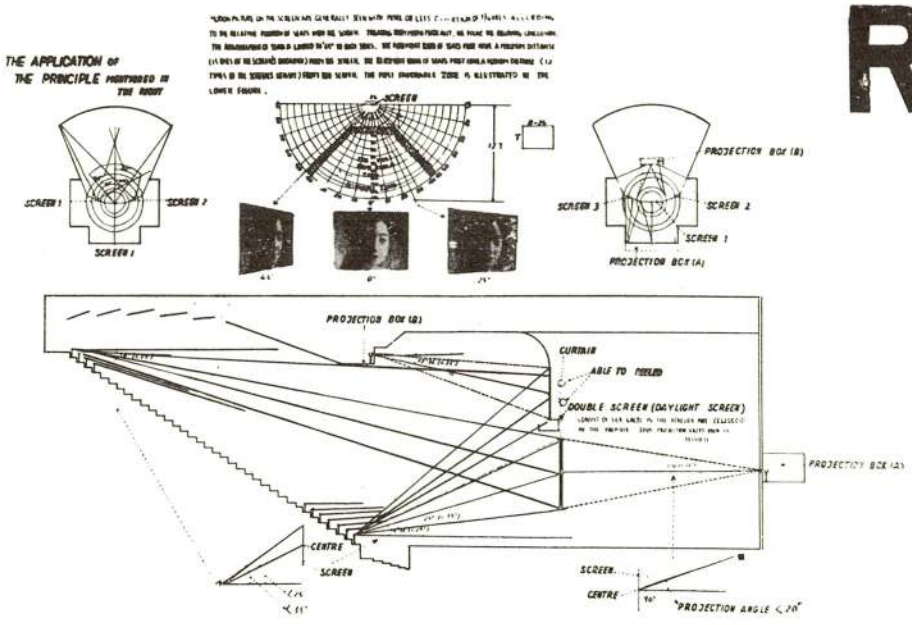
LIGHTING R



35 R

Ⅳ の ハ

Ⅳ の ニ



KINO 36

同時にここは全舞臺の重要なスポット・ライト・ブリツヂにもなつてゐる。（構造はこの室が中心のリングになつて、（Ⅰの**ヘ**）の様に四方に鐵骨のアーチが張られてゐる）又(2)の穴からは逆光線がすこぶる効果的につかへる。—例（Ⅰの**ニ**）。

◇

Ⅱの提案劇場は、同時に獨立した映畵館を兼ねたものである。收容人員500人—（自分の「淺草改造案」の一部をなすものである。）改造した淺草全體をはひ廻つてゐる廻廊式な屋根のある道（Ⅱの**ロ**を參照）に、建物の正面の入口があいてゐて、ここから一階席にはいれる。（Ⅱの**イ**）。建築の背面の上層の歩道（前記廻廊式の道の平屋根に當る）にまた觀衆の入口があつて、（Ⅱの**イ**）の様にランプ（斜面路）からギヤラリーの各席にゆける。

この劇場の特徴とするところは、映畵と演劇との綜合的な演出が可能な事である。

映畵のよいところと劇のよいところ——相方には到底のぞめない特徴（例へば、映畵の流動性、同時同存性。演劇のナマナマしい現實味、その特別な現實的印象。）をお互ひにもち合つて一つの新しい演出が出來るのである。

映畵を用ひるとすればそのプランに相當な科學的な考察を必要とする。そこで（Ⅱの**ハ**）の様な映畵面と觀衆席の配列の考査を、小原節三氏の說[註]に從つてやつた。—（この作は一九二八年六月作だから、スクリーンとオーデイトリアムに對する科學的批判のデータはきはめて少なかつた。）

（註）活動寫眞觀覽室の平面形について、小原氏建築雜誌三八輯四五六號。

で、「映畵面のちゞみを意識する範圍」内に圖の如く觀衆席の左右を制限し、スクリーンの巾の**1**/**2**を**a**として、スクリーンから**1**/**4a**内にその席の距離を制限した。（外部建物のカーブ（Ⅱの**ロ**）はこれから出て來た）映寫室を觀衆席の方へおかず、ステーヂの後において、スクリーンには理研で考案したデー・ライト・スクリーンをつかふ事にした。

それは觀衆席をあかるくし、映寫室からの危險をふせぎ、畵面の中心軸上に完全にフイルムを置く理想的な映寫を可能にするばかりでなく、前述の劇との綜合演出に際して、光が前方からスクリーンに投寫されても畵面のうすれる心配がない。

小原氏（或ひは佐藤武夫氏）の觀衆席前列迄を、スクリーンからその巾の一倍半とする制限を利用して、大きなステーヂを設けた。ステーヂは（Ⅱの**ニ**）に示す様に先づ横にひろい楕圓形のリングがあつて、その中央、及び兩側は穴（ピツト）になつてゐる。その前面に一段ひくい段があつてこゝにまたオーケストラ・ボツクスが凹んでゐる。これから兩方へ一段ひくゝ花道が兩腕を擴げた様に延びてゐる。楕圓のリングの中央の穴にそのまゝはめこめる浮動のステーヂがあつて、水壓のシヤフトにのつてならくからせり上つて來る。リングと同じレベルにあればこゝに楕圓形の大ステーヂが出來、これからさらに昇れば（Ⅱの**ホ**）の様になる。——Ⅰの提案の様に之も演出に利用出來る。ならくにはこの同じステーヂが一つ用意されてゐて、ゲツデイスの第六劇場の様に新しくセツトしたこのステーヂが、交互にせり下りせり上る。このためこのプロセニアムには幕がいらない。——Ⅱの**ニ**及**ホ**のバツクは殆んど一面のスクリーンである。映畵館としてつかふときは四方からバツクドロツプが適當に映畵面をちゞめる。即ち、このスクリーンはカメラのシヤターの様に自由にその大きさを縱橫にちゞめる事が出來るのだ。

一ばいにこれを大きくして、後の映寫室から、擴大レンズによつてヒルムなり、畵なりが投寫されゝばそのまゝ演劇のバツク（動くバツク）となる。

（Ⅱの**ヘ**）の二つの圖はその一例を示したもので、左では縱のドロツプがかるく効果的につかはれてゐる。

右はバツクのライトブリツヂから、映畵と同時にスポツトをつかつて、畵面の効果を出したもの。

——この例はいづれもかなりロマンチツクな古いものだが、例へば大衆のモブシーンなどにつかへば反對に充分現實的な効果をあげ得る。

◇

Ⅲの劇場はどちらかと云へば大衆映畫館として主につかはれる。牧容人員一萬人。

その主要な骨組と設備は、Ⅲのイ及びロによつて明らかである。符號によつて說明すると、jが映寫室（建物の外の鐵骨の上に別に設けてある。）これから暗室aがのび、この反射鏡によつて光りが屈折して、スクリーンbに映畫が投ぜられる。

このせまい箱を利用して、この映畫館が劇場として用ひられるのがこの裝置の特徵である。

即ち、ここにビスカトール達によつて利用せられた、新しいかけ繪劇が大衆のうちの素人俳優によつて何時でも上演出來る。（かげゑ劇の新しい使命は今更ここで云々する事を止めよう。）

Cはそのセツツテイングの操作室・工作室で、ボール紙でつくつた輕量な大道具が自由に上下に操作出來る。

（Ⅲのイ）のセクションを一見してわかる樣に、極めて體積の小さな空間を利用して、併も極めて自由に全體の處理が出來る。建物は殆んど映畫の專門館と同樣な大きさしか必要とせず、大劇場の樣にプロセニアムの四五倍も要する巾も奥行もこの舞臺裏にはいらない。

Ⅲのハの左はその演出の一例で、前の人物は實際の俳優で、うしろの廻轉してゐる機械は映寫室からうつしたヒルムの上に撮映された本當の機械である。Ⅲの提案がここでも又利用されてゐる。下のグラフは、暗室aの內部における俳優及び裝置の位置によつて、スクーリンの上の寫影がどう現はれるかを示したもので、左が寫影の大きさ及び方向を、右は寫影の位置と距離を示すもの。この劇場建築の建物としての特徵は、

(1) 一階席を、スクリーンを標準として、ギヤラリーと同樣な取扱ひをし、反對に後部においてその勾配を下げた事。註

(2) 各バルコニイに到る階段を個々の建築內におかず、各映畫館に共通の階段を建築の外に設けた。

（註）この提案の可能は、左の論文が證明する。建築雜誌、一九二八年七月號佐藤武夫氏映畫「館の座席制限について」

◇

最後にⅣの提案——「ウクライナ劇場コンペチションへの應募案」についてかく。

（Ⅳのイを參照）

舞臺はA、前舞臺、B、後舞臺Cの上部舞臺の三つにわかれ、四本の柱によつて五つのパートに橫にわかれて居る。この間にカーテン、及びスクリーンが下り、後部よりここに映畫を投寫すること前の提案と同樣。

オーケストラのあるピツト、兩方からの花道、リング形の舞臺、その內の浮動する12の單位ステーヂ、中央のリング內にも同樣に上下可能の舞臺がある。さらにオーケストラピツトの前へはIの提案の如く、圓弧の回轉ステーヂが兩方からすべつてきて、蓋が出來る。

——映畫と劇との綜合的演出、平面的繪畫的裝置を抹殺して、建物そのものが裝置をつくる事、かげゑ劇の利用等々。

即ち、ここで讀者は、前のⅠ、Ⅱ、Ⅲの提案が我々の時代のためにいかにそのローマンスを淸算して、新しい觀念をもりこまれたかにはつきりと氣がつかれよう。

——私のこの四つの提案を通して云ひにかつたのは只この事だけである。（終）

最後の提案における、

Ⅳのロは視角、

Ⅳのハは光り、

Ⅳのニは映畫に關する科學的批判の圖示、

映畵館及劇場建築の樣式

黑田鵬心

◇

建築の外觀が其の內容、即ち目的に應はしいものでなければならない事は云ふ迄もない。外觀は材料の表現と樣式の表現とによつて定まるが、茲では主として樣式の問題について卑見を述べ、材料の方は必要に應じて附言する事にしたい。

◇

映畵を目的とする建築、所謂活動常設館は、東京では新宿の武藏野館、帝都座、淺草の大勝館其他數館である。有樂座、松竹座の如きは始めは演劇を目的として建てられたものである。數寄屋橋內に建築中の日本劇場は映畵を目的とするものである。

◇

映畵は最近の發明で、日本では二十世紀以後のものである。即ち最も新しいものであるから、建築樣式として新しい現代式が應はしい事は當然である。たとひ其映畵が日本ものであり、チヤンバラものであつても、シネマである以上は新しい內容の建築として新しい樣式が應はしい。この意味で武藏野館などは最も適應してゐる。

◇

帝都座や大勝館は割に古い所があり、却つて淺草の小映畵館に新しいものがある。日本劇場は敷地の關係から曲線の平面を持ち、特殊の恰好をすることになるらしいが樣式としては餘り新しくはないらしい。

◇

映畵館、殊に外國ものを專門とするものに在つては、思ひ切つて新しい樣式を採つても差支ない。寧ろその方が宣傳價値も多いと思ふ。尤も日本ものを專門とする館では多少古い調子を持つてもよからう。併し日本の映畵をするからと云つて日本風にする必要は毛頭無いと思ふ。

◇

然るに日本の舊劇を主とする劇場になると其の最も適應する樣式は、日本風を加味したものであるべきである。其點で東京の歌舞伎座、京都の南座は是認さるべきものである。かの大阪の文樂や東京の寶生會の能舞臺の外觀が、純西洋風の樣式によつてゐる事は、決して應はしいと云へない。

◇

問題が少しく外れるが、日本の博物館建築なども、純然たる洋風の樣式は適應しない。日本風であるか、少くとも日本風を加味したものでありたい。私は過般行はれた東京の帝室博物館の懸賞設計募集に際して、其條件の一つに日本風をとると云ふ事を加へたのは、設計の自由を尙ぶ懸賞競技として反對であるが、日本及日本に關係ある美術品を收藏、陳列する博物館としては、日本風の樣式が適應してゐることを認め、是非日本風のものであるか、少くとも日本風を加味したものでありたいと思ふ。

◇

此點は日本の舊劇を演ずる劇場も同樣である。然らば歌舞伎座や南座に無條件で贊成するかと云ふのに必ずしも左樣云へない。元來日本建築は木造として發達した構造であり、樣式である。それを材料が全く異る鐵筋混凝土によつて踏襲することは、單に外形の模倣であつて、眞に材料、構造の必要から起つたものでない。

◇

樣式は必ずしも材料、構造のみから生じたものではなく、其國の風土、國民の趣味好尙等から生じたものであるが、材料、構造の表現は樣式を制限する。かの深く軒を出し、曲線美しき破風を作り、斗拱を用ひると云ふことは、日本の風土や日本人の趣味から生ずると同時に、木材といふ材料から來たものである。

◇

從つて鐵筋混凝土で、その在來の日本風の樣式を作ることは、單に外形の模倣に過ぎない。鐵筋混凝土といふ材料は石や木と違つて頗る自由なもので、恐らく過去の如何なる材料の建築も模倣する事が出來る重寶なものである。併し鐵筋混凝土にはまた獨特な樣式があるべき筈である。

◇

現に最近、獨逸、墺地利、和蘭、佛蘭西等に興つた新樣式は、鐵筋混凝土が生んだものであると云つて差支ないものである。それが無裝飾で、必要以外のものをつけず、プレーンなところは鐵筋混凝土材料及び共構造に適應してゐるものである。

◇

而して日本建築も亦、古來無裝飾でプレーンなものである。桃山時代や江戸時代初期に、豪華豐麗な彫刻及極彩色の裝飾をした事は、本來の特色でない。天平や藤原の佛教建築にも相當豐富な裝飾はあつたが、それらも大陸の影響であつて、これとても西洋建築の裝飾に比べては遙に及ばない、大いに貧弱たるを免れない。

◇

私は此頃『世界美術全集別卷』の『建築裝飾篇』の編輯に關係して、東西の建築裝飾を比較し、日本の建築裝飾の貧弱なのに驚いた。所詮日本建築は、其の起源を示す神明造や大社造など、中世の流造と室町以後の茶室建築の如く、裝飾のない瀟洒、淡白なものが其の本領である。

◇

然らば日本趣味の建築と鐵筋混凝土を材料とする無裝飾の現代式建築とは一脈通ずる所があるのではあるまいか。私は兩者に大に共通點があると思ふ。實際セセツシヨンを始めとし、現代歐洲の新樣式は多分に日本趣味を採り入れたものである。

◇

話が本題から離れたが、映畫館の樣式は、鐵筋混凝土建築の場合は最も新しかるべきであり、木造でも古い風を眞似る必要は毛頭ない。現在淺草の活動街を見ると、大抵新しい樣式を採つてゐるのは贊成である。

◇

劇場建築になると、これも新しい演劇を演ずる劇場ならば、鐵筋混凝土で新樣式をとる事が適當で別に問題もないが、舊劇を演ずる劇場の場合に問題が起るのである。

◇

舊劇を演ずる劇場の樣式に、歌舞伎座の如く日本風をとる事は一應尤ものやうであるが、鐵筋混凝土の日本風には前述のやうな難點がある上に、もう一つの難點がある。それは都市の美觀の上からである。

◇

大建築であつてもそれが獨立して建てられてゐる場合には、如何に變つた樣式でも差支ないが、街路に面し、建築群として都市の中に介在してゐる場合には、調子外れの樣式は都市の美觀上困るのである。

◇

歌舞伎座は一方昭和通に接し、一方は銀座、數寄屋橋を經て日比谷公園の角に至る道路に接し、東京市中でも最も目貫の位置で、しかも建築群として見られる。しかも近頃道路の幅員が非常に廣くなつたので、今では日比谷の角からあの破風造が見えるやうになつた。さうなるとあの日本風は、他の建築との調和を害し、突飛な感じがする。

◇

明治神宮の寶物殿も鐵筋混凝土で日本風をとつたものであるが、神苑の一隅に位置してゐるので、他の建築との調和、不調和は問題とならない。外苑の記念繪畫館が洋風であつても兩者は全く離れてゐるから和服で帽子をかぶつた樣な不調和は起らない。

◇

而して建築群としての不調和を避けやうと思ふと、大阪の文樂座のやうに、洋風をとらなければならぬ。さうすると樣式と內容との不適應が問題となる、何れにしても困つた問題である。先に一寸述べた上野に建てらるべき帝室博物館は、離れて一つ建てられるので、日本風にしても他の建築等との不調和問題は起らない。（尤も表慶館の建築との調和は考へる必要がある）

◇

要するに日本の舊劇を主として

演ずる劇場建築の様式如何と云ふ問題は、日本風を採入れたいと云ふ希望だけは確に持つてゐるが、如何に實現してよいか、私には考がつかない。たゞ「鐵筋混凝土といふ材料を生かした日本趣味のもの」がよい事だけは確である。これは建築家諸氏のインスピレーションに信頼する外はない。

（十月十一日於東京）

× × ×

最近映畵劇場建築の動向に就て

城戸久

1

田舎の町に育つた自分にとつて十年前お寺の御堂でガラス繪の映寫を見て、小さな幼な心を躍らして居つたのを想起して、今日の映畵界の發達をより多く感ぜざるを得ない。現代の青年子女はその日々の生活から映畵を失ふことは到底不可能な事である。かく大衆に喰ひ入り民衆娯樂機關の第一位を占めると同時に、一方藝術的、技術的にも異常な進展を見せつゝある映畵は、現在如何なる方向に進みつゝあるか、そして同時に映畵と離るべからざる關係にある映畵劇場がどうなりつゝあるかの問題に就て少しく考察して見るのも、この機會に於て決して無意味ではあるまい。

一九三〇年を一劃期として全世界の藝術界の動向を支配しつゝあるテーマ——機械の再認識とそれに依る機械と藝術との聯關性——に向つて少くとも關心を有する人達は、爭つて映畵の本質究明と同時に映畵技術と藝術との交流に向つて檢討の劍を向けて來た。時あたかも全世界の建築界が同じく過去の歷史的建築觀を清算し、建築の本質に向つて科學的究明の矛を向けんとして居つた。茲で映畵と建築の二者は、兩者の技術的、藝術的相似分子を包括する點に於て離すべからざる聯關を以つて、論者の俎上に乘りつゝ今日に到つた。香野氏に於て、板垣氏に於てなされた貴重なる研究の種々は、何れもこの二者に關聯して居つたことを想起することが出來る。

然し映畵と建築と言ふ內容的な問題でなく、映畵自身の容器である映畵劇場の形式に就いての論は今日あまり見るを得ない。自分はこの小論に於て、少しでも此の問題に觸れることが出來るならば非常に幸であると考へる。

2

我々は今日一口に映畵と言ふも到底理解し得ない幾多の內容をこの二字は持つて居る。然し幕末の時代劇で一人の英雄的人物が、人間業とも思はれない程の大奮戰を演じ、大向をうならせるとか、絶世の美女を取り卷く奇しくも美はしい愛のパラダイスを地で行くといつたやうな種類のものは、このあはたゞしい一九三一年の今日、眞面目に檢討する餘裕を持ち合はさない。人は多く映畵の定義の如何に迷はされるに相違あるまい。然し茲ではかゝる映畵はあたかも建築ならざる建築の數多きと伴に映畵ならざる映畵の下に墮ちて行くのである。

人間は二個の眼を持つて居る。然しこの眼は正確さに於ては決してあてにはならない。忌むべき錯覺がある。だが廿世紀に於ける機械の發達は遂に人類をして第三の眼を與へた。カメラの眼である。此の眼は錯覺を持たない上により多くの視野を持ち、より多くの精密さを持つて居る。ベルトフの「キノの眼」コルビシエの「見ざる眼」に依つて提案された人類の第二の視覺である。映畵は實にこの第二の視覺の連續構成に過ぎない。茲では最早ラブストーリーのロマンチツクも亂鬪劇のヒロイズムも必要ではない。第二の視覺に依るフイルムの一劃一劃の構成連續が何等かのイデオロギーを表現

しさへすればそれで滿足して良い。そして如何に組立て、如何に編輯されやうが、それは映畵技師の任意であり、茲に所謂「モンタージュ」の理論が形成せられ、映畵は演劇のカテゴリーより脫して純粹に本格的な映畵として誕生することが出來る。そして我々はフランスの前衛映畵に於て、或はソビエートの記錄映畵に於いて此れを見ることが出來た。かくて映畵は映畵ならざる映畵より本格的、藝術的映畵にまで進展しつゝ來つたのである。

3

かくの如き映畵に於ける反省と再認識は、所詮その容器であるべき映畵劇場の建築にも表はれなければならぬ筈である。新しい酒を盛るには新しい革袋が必要であるべきである。

日々各地に新裝せられつゝある幾多の映畵劇場は、何れもその形態に於て、その內容に於て映畵劇場としての最善の方法を實施せられたかの如くに見え、又宣傳せられて居る。そして又東都に於ける新裝の數館や、ニューヨークに於けるパラマウント座や、ロキシー座あたりの映畵劇場を以つて代表的最近映畵劇場なりと嘯いて居る人もないではない。然しながらはたして新興映畵はパラマウント座に於て、或は新裝東都の數館に於て、新しい革袋に盛られたであらうか。一言にして今日の映畵劇場は今なほ過去の劇場建築より一歩も出て居ないと言ひ得る。

近世資本主義の發展は映畵企業界に於ても既に一大トラストとなつて出現しつゝあり、アメリカ映畵に於ける素晴しい大企業化、最近に於てはその投資額は廿五億弗と稱せられ、茲では數百弗の衣裳をつけた數千の美女が洪水の如く亂舞せねばならないのである。そしてこの絢爛と美麗の絕頂を極めた映畵が、一時に數千の觀客を收容する數萬弗の建築費をかけた大劇場で封切されねばならぬ狀態である。そして觀客は只官能の媚態とその絢爛さに、魔術にかゝつた如くに陶醉するより致方がない。かくて多くの小市民階級は自己の社會的役割を離れ、その生氣ある思想を失ひつゝある。「ドラマは國民的であるが映畵は國際的である」との合言葉に依つて此官能の媚藥が遠く海を超え、數知れぬセルロイドの帶に乘つて、我々の都會を襲つて來た。嘗て彼地に於てパラマウント座やロキシー座が必要であつた如くに、我々の都會に於ても同じく金ピカのこけおどしの大劇場が出現せねばならなかつたのである。

はたしてかゝる狀態が永く繼續すべきものであらうか。我々はしばし今日の映畵劇場の一種の素晴しさに陶醉する前に此等の劇場の持つ內容に就て考察するならば、其處に幾多の破滅の契機と裏面に潛む危險性とを發見するに困難を感じないであらう。

―映畵は既に映畵ならざる映畵よりその本格的使命に向つて進軍しつゝある。―

建築家の社會的役割は單に社會の推移に從順に追行して行くことでは決してあり得ない。寧ろ積極的に社會の動向を把握し、その進展するべき途に向つて建築家としての一役割を遂行することにある。この意味に於て我々は過去の演劇劇場より一歩も出て居ない―投資額の大と金ピカの裝飾を除いては――近世大資本主義映畵劇場の建設に對して、幾多の檢討すべき、淸算すべき或物を持たねばならない。

4

我々はかゝる民衆をこけおどしの映畵劇場は、こけおどしの映畵の破滅と同時に、やがてその姿を消すべきであらうことを信じてやまない。何故なれば映畵の本格的發展は、既に映畵劇場の內容と形態に就いて非常なる影響を與へ、新映畵劇場運動の各地に興りつゝある事實を認めるからである。

アメリカに於ける藝術映畵はさして見るべきを持たない―映畵ならざるこけおどしの映畵に於てアメリカは如何に全世界を風靡して居るかを見よ―然し、アメリカに於ける新劇場運動は早くより劃されて來たやうである、此は甚だ矛盾したやうに一見思はれるが、この運動はアメリカ映畵の爲にではなく、寧ろヨーロッパ映畵の爲に必然的に興らねばならなかつたのである。運動の一端はサイモンゴールド氏の率ゆるインターナショナルフイルムアートギルドの出現

に端を發し、最近に於てはニューヨークの小カネギー座、フイフスアヴエニユー座、フイフテーフィフスストリートシネマ、フイルムギルトシネマ、ハリウツドに於けるフイルムアートシネマ等がこの新映畵劇場の一端であり、ヨーロツパに渡つてはロンドンのアヴエニユーバウイリオン座、ベルリンのデイーカラ、パリーのヴユーコロンビエ等が代表的のものである。中んづくニューヨークのフイルムギルドシネマはフレデリツクカスラーの設計であり、劃期的映畵劇場として新映畵劇場運動の尖端を行くものである。

此種の映畵劇場は何れもフランス、ソビエート、ドイツ等に於ける藝術的本格的映畵の上映を專門にし、ドラマチツクな映畵ならざる映畵ははるか彼方に追ひやられて居る。即ち茲では記錄映畵、藝術映畵、時としては宣傳映畵が專門的に上映され、從つて何れも總ての點に於て舊來の映畵劇場より確然と分離し、純粹映畵劇場としてあらゆる不純分子を清算し、獨自に構成計畫されて居る。その特異性としては第一に觀客の收容數が甚だしく少數であることで、小カネギー座では三五〇人、フイフスアヴエニユー座では五六〇人、フイルムギルドシネマでは四八〇人、その他何れも三〇〇人から五〇〇人を限度として居る。此れは當然封切映畵の性質種類に依るもので、茲では三階の轉び落ちそうなバルコニーを設け、半紙版に足らぬ小さな映像に依り、安價な涙を惜氣もなくすゝるやうな觀客層を必要としないからである。映畵ならざる映畵は茲では一切不必要であり、只純粹本格的映畵に依り何等かのイデオロギーを獲得せんとする分子に依り觀客層が形成せられて居り、此種の觀客層は現在に闘する限りに於て甚だ少數であり、從つて數千の座席は不必要である。第二にその建築形態が純然たる科學的檢討の下に過去の形式を脫して新形態を形成せることである。こけおどしの近代映畵劇場が、金ピカの裝飾と座席數の大にその精力を奪はれ　本來の視覺度や映寫技術にきはどい藝を演じて居るに反し、あらゆる不純物を排し、それに變はるに視覺度の檢討と、技術設備に全力を注いで居る。座席數の小數なるのも茲に一つの眞意がある。多くは二階三階のバルコニー若しくはギヤラリーを持たず、單に視覺度と音響効果に依つてのみ平面形が決定せられ、馬蹄形か梯形である。機械設備に於ても映寫設備は勿論、再生設備、換氣設備の萬遺憾なきを期して居る。本邦映畵館の外觀に於て、內裝に於て如何にきらびやかであつても、未だWE若しくはRCA等の優秀なる再生設備を持たず、いかさまトーキーで幾多觀客をまどはして居るのは何たる矛盾であらうか。

かくの如く新映畵劇場運動に依る小映畵劇場は、何れも絶對映畵劇場としての機能に立脚せるものであり、新興映畵は明に新興建築と完全に握手されたのを見ることが出來る。要するに新映畵劇場の運動は映畵自體の本質の究明と、映畵技術の再認識に依つて必然的に興らねばならない運動であり、從來の映畵劇場に對抗して進展せねばならぬ劃期的運動と稱すべきである。そして茲では資本力の嚴正なる行使と、映畵人の技術的智覺と、建築家の藝術的天分の三者の完全なる融合統一を必要とせねばならない。ニューヨークのプレーハウスは數千人を收容し得る大劇場建設の敷地に、僅か四三〇人の座席しか持たない小映畵劇場として出現した事實と、フイルムギルドシネマに於けるサイモンゴールト氏と建築家フレデリツクカスラーの協力とは何れも良く新映畵劇場運動の動向を物語つて居る。

5

かくの如く現代に於ける新興映畵劇場は舊來の映畵劇場若しくは資本主義的大劇場より脫して、幾多の不純分子の清算に依り次第に自己の形態を純化し、小劇場の形態となつて表はれたのであるが、我々はなほも永遠にかゝる形態が持續されるものとは信じ難い。映畵劇場は今やうやく小劇場としてその獨自的形態の第一段階に到達したばかりである。此れは現代に闘する限りに於て、今なほ觀客層の多くは映畵ならざる映畵の魔藥に陶醉し、本格的映畵の容器は單なる小映畵劇場で充分にその社會的使命を遂行することが出來るからであるが、映畵の觀客層は寸時

映畫館建築へ

――その方法論的序說――

酒井清一

(1)

こゝに吾々の時代の新らしい二つの藝術が興ろうとしてゐる。映畫と建築と。それらはともに、近代工業の上に築かれて居り、直接にそれぞれの技術の上に立つてゐる。技術はその根本に於て目的的なるをその特徴とする。それ故映畫と建築とは、その正しい機能（映畫に於いては事實の把握と感情の社會化、建築に於いては住居目的と世界の視覺的形成）を離れて成立する事が出來ない。吾々は現在に於けるその變歪された狀態から如何にしてこの二つの新興藝術を救ふべきであるか？

香野　雄吉

機械が今新らしい世紀を完成しつゝある。當然、藝術の世界にも、キングブルスの言葉を借りれば「機械から身をかくすところは、最早何處にもない」[1]のである。その機械的、技術的基礎の上に直接立つところの、映畫は、今や建築と[2]共に、すべての藝術中の最もラヂカルな前衛の位置に立つてゐる。今映畫館建築の考察に當つて、それが以上の二つの前衛を、コンバインドされたるものとして觀る時、そこに最も、『現代』を表象されたる、樣相を觀る事が出來る。亦中世文化史上の建設的な營みが「寺院」から生れたやうに、現代文化の創造的使命は「工場」から[3]の意味に於いて、それを代表する現代建築の最も性格的表現が、工場建築に於いて、具現されるならば、まだその半面を代表するそれは、映畫館建築に於いて、具現されるであらう。

併し、現實（日本に於ける）の映畫、映畫館―同時に建築一般も通じて―を觀察する時、それぞれの領域に於いて、その機能へのあくことなき把握、技術的基礎、形成の方法（映畫に於いては、モンタージュ理論の正しき展開、建築に於いては表現の形式等に亙つて、なほ改變、將來への開拓さるべき幾多の題目があるであらう。（吾等はこゝで、冒頭の香野氏の言葉を想起せねばならない）

かくて、この小論は、その序說として、筆を進めやう。

(1)『樣式と時代』黑田辰男氏譯

(2)直接効用の基礎の上に立つ建築を『藝術』の總稱の下にたやすくされも同一の個所を歩みつゞける筈はあり得ない。やがて此等の觀客層が大擧して映畫の本質とその社會的使命を把握する時に於て、新映畫劇場運動はその第一の段階より勇敢に更に新しい第二の段階に移らねばならないのは明である。その時に於て新しい映畫劇場は如何なる形態を以て出現すべきであらうかは我々の想像にも及ばない。然しそれは過去の大劇場でもなく又今日の小劇場でも全然あり得ないことは言ひ得る。そして茲では恐らく映畫人は建築家と完全に握手し、兩者の協力に依つて新しい社會政策家としてその新正面を開拓するに相違あるまい。

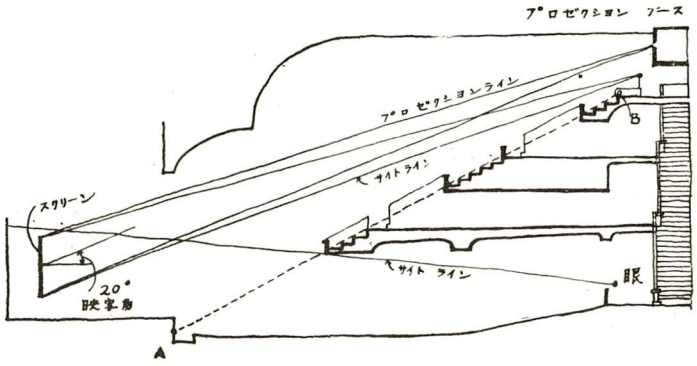
建築家の社會的役割は社會の動向を把握認識することに依つて、自己の建築家としての活動力をその社會の動向に對して實踐に移すことにある。建築家と映畫人の握手に依る新映畫劇場の運動は、この意味に於て建築家の社會的役割の一領域を形成するものではなからうか。

（本稿に於て筆者は石卷良夫氏の御教辭に負ふところ多きを附記する）

（一九三一、一〇、四）

る事を注意せねばならない。筆者に於いては推論の便宜上概括的にかく取扱う事を御斷りして置く。

(3)『寺院より工場へ』板垣鷹穗氏、思想昭和五年四月號所載。



第1圖說明　（映畵館設計の指針より）

●座席の最後の人の眼の位置（座席にゐる場合4尺立つてゐる場合5尺）をきめて、その點とスクリーンの上二、三尺の點を結ぶ、それはバルコニー下部の線を決定す

● A—B線　バルコニーの最低階段を決定する

(2)

蛇足の樣ではあるが、筆者はこゝで一應、映畵を、建築の問題と聯關の下に考察する事をゆるされたい。が勿論それは、建築計畫學の基礎的概念を形成したき意圖であつて、對象が映畵館建築の故に、映畵と相對的に、この問題を考へて見たいと云ふ、試みに外ならない。

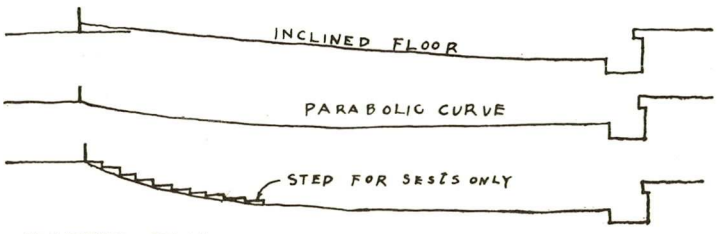
二十年前、映畵の撮影は、對象の前にカメラを据え、クランを廻すことだけによつてなされた。文字通り「活きて動く寫眞でしかやかつたその映畵が、實寫記錄の域から演劇や繪畵の平面的な模倣を經て、自らの美學的基礎を確立し得たのは、全く「組立（モンタージュ）」への反省によつてである。ではモンタージュとは何か？　吾等は此問題に對して、その全面的活動にある、ソビエート映畵にきかう。トレチヤコフは曰ふ「吾吾は、吾吾の革命映畵を、それが吾吾を起ち上らせ、力を與へる故に愛好してゐる。ブルヂョア、イデオロギイの代表者達は、吾々とは全く反對に、たゞそれが時代の流行であるが故に拍手をおくるのである。」また「又吾々とは全く反對のイデオロギイをもつ人々は、たゞ表面上の『純粹な美の構成』に喝采する。しかし、それは吾々にとつては、現實の生活のための現實的な鬪爭手段として撰ばれたものなのである。」[1]これは、ソビエート映畵の「モンタージュを、その階級的、社會的立場より切りはなして、一つの新らしい映畵の構成論として見る事は、眞にそのモンタージュを理解する所似ではない事を意味する。

ソビエートに於いては、映畵製作條件に根本的な相違があつて、國家的統制の下に、全てが、一つの組織的に計畫され、映畵監督たちに課せられたる仕事は、新らしい社會的要求に基いて、新らしいテーマを、新らしい技術をもつて、出來るだけ効果的な方法で、大衆の前に、爆發させる事である。モンタージュは、その新らしい技術である。それ故モンタージュはその細部的な新しさや表面的な外形だけでなしに、その底に機能的なる(映畵に於ける)社會的な要求と必然的に結びつけられてゐる事に、吾々は注意しなければならない。

では、これが建築に取つてどう云ふ意味があるのか？　勿論これは、建築に於ける機能と形式との問題を示唆する、そして亦建築に於ける機能（あらゆる意味に於ける生活的要求）が、映畵に於ける如く、自然發生的に投出された、生活的要求(素材)を、假借なき批判の中に解體し、變革して、再び合目的的、計畫的に、組立て一つの組織化したものにまで統一する事の示唆も受ける。

筆者は映畵考察に於いて、ソビエート映畵に偏重して、それに對立する歐米諸國の映畵の存在を忘れたかのやうであるが、勿論それらの國に於ける、秀れたる映畵の數多くを知つてゐる、その問題に對しては、香野氏[2]が「新らしい眼をもつ映畵は、新らしい藝術となることが出來る、或は「映畵監督の發見」—映畵は、監督の創造的手法にその基礎をもつ、それは、監督の藝術である、例「巴里の女性」「最後の人」—等の映畵藝術論の新らしい一變種であるに止まるだらう。映畵は映畵の「技術（インジニエリング）」の

―「映畵監督」のではない―藝術である。（筆者傍點）だがその兩者の間に橫はつてゐる根本的な差を理解しなくてはならないのである」と、明快に解答してくれる。



第2圖說明（同上）
床の勾配の三つのタイプを示す
尙其決定原理は同書において參照されたい

それ故それは亦建築にとつて、その立觀性を主張し、または、マンネリズム建築家が、正しい建築の立場から見て、新らしい一變種にあるに止まる、事を吾々に教えて呉れる。

映畵が、吾々にもたらすものは、それのみに止まらない。それは、側面から、間接的に、人間に於ける一つの新らしい感性として、また、新らしき文化をも、規定するであろう、とまで

ル、コルビュジエが「見ざる眼」を說いて、數世紀にわたる、樣式建築が、吾々の目を、傳統的な無能力に陷れてゐることを、注意してゐるとき、モホリイ、ナギイは、また、繪畵の永い歷史が、吾々の眼をすでに繪畵的にしてしまつてゐることを、それ故に、吾々は今日においては、機械的な視覺器官―寫眞機によつて「完全に異つた眼を以て世界を見なければならないことを指摘してゐる。ここに新らしい感性が生れつゝあつた。[3]

吾々はまた、映畵が日一日と一般の生活の中に喰入つてゐることを、知つてゐる。そして映畵館の數が、增加に增加を重ねて、今日ではついに、全國で千三百九十二館（內務省、警保局發表）の多くに昇つてゐる。每日吾々の中の何人かはこの映畵館で、新らしき視覺による、新らしい言葉を學んでゐる。かつて、印刷術が、讀むための言葉が、今日の「觀念的文化」をもたらしたやうに、「視覺的人間」はやがて、「視覺的文化」を作り出すことを。ひとはハンガリイの一詩人ベロ・ボラツジュとともに信ずるだらう。[4]

吾々はいま、それが建築にとつて、どんな形で直接連鎖を持ち來るかといふことは、餘りにも憶測であるとしても、やがて、その新らしい感性が、また新らしい言葉が、吾々の住居意識を、審美感を新らしく改變するであらう事を信じる。

映畵のなほ、建築への連關は、その技術的基礎に直接立つ事に依る、國際性、構成の手法に依るさまざまの類似性等を指摘出來るが、筆者は今それには觸れない事にする。

(1)『映畵のモンタージュの問題』香野雄吉氏、昭和五年二月思想
(2)前揭書
(3)『映畵と建築』
(4)前揭書

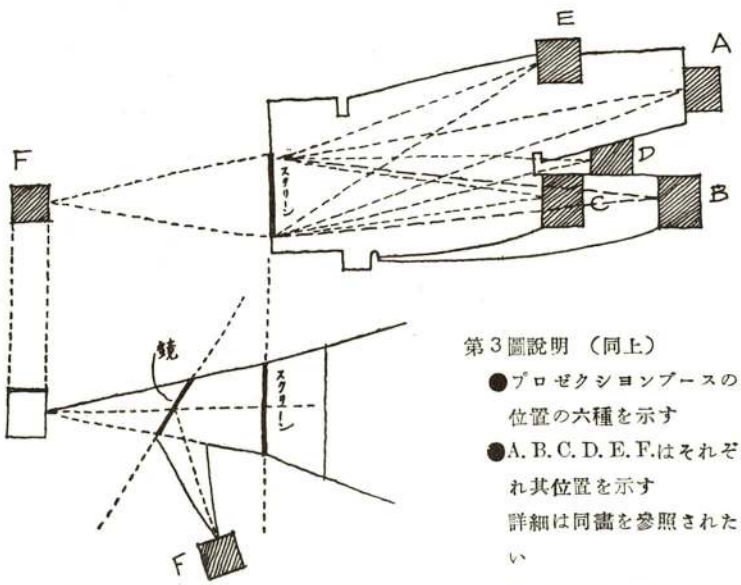
(3)

これらの示す如く、われらは、映畵を建築との照應のもとにおいて、機能と形成が必然的有機的關係に置かれなければならないと云ふことを見た。かくて問題の重點を更らに建築に移して考えて見やう。

建築されるとき、そこには先ず、機能（あらゆる意味に於ける生活的要求）が、前提條件とされる。そしてまた、建築の形態には明からに、一つの美的價値の存在する事も首肯出來る。筆者はこの形態から入つて行かう。では建築に於ける形態美とは何か。それは勿論皮相な外面のもつ、プロフイルやオーナメントの美しさではなく、「機能」を生かしきつたる、合目的合法則的な構造の內面的必然的理解に基づいてゐるものであることを知る。「フオルムは機能に從ふ。合理的なものは、眞に美しい。

このことは、今日に於いては、すでに常識的にまでなつてゐる。が茲で吾等が更に、注意しなければならない事は、形態の合目的性を、極めて槪念的に、單に用途に即したる形態として見る事である。合目的なる形態美が、更に何

故に美なのか？ それは、効用に即してゐるから、のみでは、說明し盡くされない。ひとは亦或は、それを合目的性なる故に、メカニツクなる一ツの機械美として說明するであらう。それも正しい、しかし吾等は「機械美」そのもののもつ構造を二つの對立したる見方に於いて、把握しなければならない。



第3圖說明 (同上)
●プロゼクションブースの位置の六種を示す
●A. B. C. D. E. F.はそれぞれ其位置を示す
詳細は同書を參照されたい

ギュヨウ[1]の指摘せる、機械美の生命的見方―之れをロマン的機械美といはふ。と、コルビュシエの指摘せる「精神の數學的作品」の意味する見方の二つである。前者の底にあるものは天才と獨創と唯美主義であり、後者においては規律と關係と統一とである。

建築の形態美を、單なる概念的に、合目的性といひ、ギュヨウ的なるメカニツクなる美において、それを見ることは、これをロマン的機械美論者といふ事は出來ないであろうか？ 吾等は更らに、他にその美を規定するところの、一つの秩序即叙智的計量としての普遍的なるもの、關係において見なければならない。例へば自動車は速力、載量、耐久、價格等の多くの要素の複合としての構造概念であり、一つの運搬の道具の目的をもつであらう。しかし、私達の視覺の美的感覺はその運搬の道具であるよりも前にそれがそれ等の要素の複合であるとしてそれを計量する、しかし、それが美しいのは、只關係の對象性として、數と法則が決定するのであつて、それが速く用を辨ずるがための故ではない。そしてかゝる美の規定するものは Stil ではなく Type でもなく、コルビュジエの指摘する如く標準 Standard である。[2]」

かくて 建築の形態美は、その底において、數と法則とを、また規律と關係と統一として見なければならない事を知る、形態が合目的であるためには、また、それ故に美なのは、此等の關係に依存するものである。

吾等はさらに具體的に進もう。建築において、數と法則とは、規律と關係と統一とは何を意味するのか。私の意圖した、建築計量學基礎概念はまたこゝに、その出發點を見出す。そしてまたそれは機能から組成の方法論として、立てられなければならない。グロピウスも曰ふ

「容器、椅子、家屋等が、機能的に形成されるためには、それらの存在が、先ずもつて、究明されなければならない」と、それらの究明と分析は同時に、形成の方法となつて還元されなければならない。がその形成への方法として、構造の問題が想起されるが、それは以上の方法論としては、第二義的なものであつて、一般建築の立學的考查によつて解決される問題である。グロピウスの言葉をさらに借りれば「構造は空間を構成するけれども、各部分は更に一つの高次への統一となる關係におかれなければならない」その統一のモーメントこそ、正に、この方法論にかゝつてゐる。

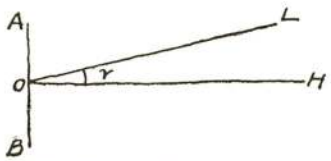
しかもこの方法論としての、計畫學は、構造法に於ける如く、數學的系統の上に組織されなければならない。建築の各種類に亙つて、それ〴〵の領域における機能を、數と法則とによつて、統一されねばならない。かくてこそ吾等は始めて、建築の機能とその形態美を正しく理解することが出來るであ

らう。

映畵において、またエイゼンシュタインは「映畵十月の製作に就いて」といふ、小論の中で「たゞ純粹に構圖の側面からのみ批判しやうとすることは大なる誤謬である。分析はこゝでは何よりも方法論に向けられなければならない。なぜなら、この映畵では、對象の構成は對象の方法論に支配されてゐるからである」と興味深い、言葉を語つてゐる。

かくて吾々は、映畵館建築への具體的なる、展關に向うべき順序になつた。筆者はこれに、以上の概念を、映畵館建築計畫學の基礎概念へ、そのまゝ適用しやう。

(1)ギュイヨー『社會學上より見たる藝術』大西克禮氏、小才康正氏譯



第4圖說明　（同上）
A—B……スクリーン
O—L……プロゼクションライン（コンビジョン）を含む水平面
O—H……スクリーンの中心を
r……投射角（推奨標準においてその最大投射角を20°と規定す）

(2)『機械美の構造』中井正一氏　昭和五年二月號思想

(4)

映畵館建築に於いては、其計畫學ともいふべき方則は可なり、科學的に研究されてゐるやうである。一般オウデイトリアムとして見るときは、既に、佐藤武夫氏の貴重なる科學的研究があり、同氏の、映畵面と觀客席との各角度において、畵面の歪み、縮みの研究によつて、好感帶と許容帶の（方則）設定がある。また、小原節三氏の『活動寫眞觀覽室の平面形に就いて』（建築雜誌第五四六號所載）に於いて、畵面の大さと、眼の位置との幾何學的關係と、畵面の光輝の度と眼との研究も忘れてはならない。なほその外に、現在設定されたるもので、スクリーンと座席に關して、系統的にまとめられた方則としては、洪洋社發行建築寫眞類集、第七期第一卷、映畵館建築附錄『映畵館設計の指針』がある。今映畵館建築計畫の外貌をうかゞうために、同書の目次を摘出して置かう。

1、斷面的考査

(a)サイトライン（座席から觀客の眼と、スクリーンとを結ぶ直線）（第一圖參照）
(b)床の勾配（第二圖參照）
(c)プロゼクション、ブースとスクリーンとの關係
(d)プロゼクション、ブースの位置（第三圖參照）
(e)映寫角（プロゼクション、アングル）（第一圖及第四圖參照）

2、平面的考査

(a)最前、最後席の制限（第五圖參照）
(b)座席配列の制限と好感帶（同）

最後に、一九二八年九月アメリカ合衆國に開催されたる、萬國照明委員會大會に、我が活動寫眞照明委員から提出した、報告書から、推奨標準として左記のものを、抜萃してある。

(a)映寫幕に於ける照度
(b)仰角
(c)横角
(d)投射角
(e)映畵幕に最も近き座席
(f)映畵幕より最も遠き座席

映畵館建築計畫方則としては、まだこれらの研究のみで、充分とはいわれない。

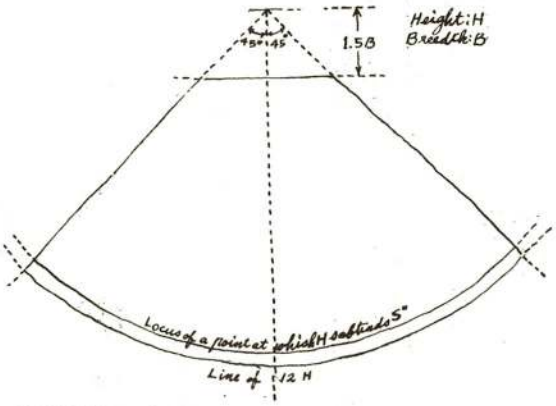
オウトリデイアムに附隨する其他のプランニングにおいて、科學的究明をなすべき事は、數多くあるであらう。尚、發生後未だ日の淺い、映畵は、その形式に益々變化を加えて行くかの様である（今その事は急速に興りつゝある）。この條件は、映畵館における中心が、スクリーンに置かれる關係上、またそれ故、スクリーンに隨伴する其他の機能に、訂正を加へねばならないのは勿論である。

(5)

現在興りつゝある其問題に對する、考察を附加する。—素材として投げ出すのである—その進展の急速なる映畵は既に吾等の前に、課題を掲げる。その一つは、S、Mエイゼンステインによつて、新らたに提案されたる、可動方形スクリーンの新提案である。

これは映畵發生以來、受繼いで來たる現在の矩形スクリーンに對する、批判、檢討の結果、それに代る、新らしき方形可動スクリーンであつて、エイゼンシュテインは、その小論の冒頭に於いて「思うに、現在は、スクリーンの繪畵的發展に於ける一つの、偉大なる

歷史的瞬間である。誤まれる音響の使用が、スクリーンの繪畫的成果を破壞しつゝある現在—しかも我々はそれが實例を幾多知るのであるが、新らしいスクーリン樣式にとつて機會を持つ巾廣スクリーンの具體化は、再び我々をして、純粹空間構成の問題に否應なく陷れた。しかも尙、過去三十年間永久不變のスクリーンの枠の不撓性の故に、頑固になつてしまつた映畫に於ける凡ゆる、繪畫的構成の美學をこゝに再批判、再檢討すべき可能性を我々に與へてゐるのである。」と述べ、更らに、此の提案に對して、反對論者である、ロイドジョーンズ、マイルス、ホーウエルバブレイ、レインウエスターベルヒ、デイートリツヒ、等が、それ〴〵、美學論、生理的關係、經濟的關係等の三つの立場より、論爭してゐるが未だいづれとも決しがたい狀態である。今其可否がいづれにあるにもせよ、エイゼンステインのこの新提案が彼等反對論者を克服し得たときは、やがて、映畫館へ直接聯關を持ち來らすであらう。それ故筆者は、之に關係する、興味ある部分を茲に摘出し置かう。



第5圖說明 (同上)
●スクリーンより最近、最遠の座席を決定する圖
最近 1.5 B
最遠 12 H
B=スクリーンの巾
H=スクリーンの高

「新らしいスクリーンの形式を適應せしめるための現在の劇場の實際的改造と整理は、モオション、ピクチュア、アカデミイの技師達の見積に依れば（所要の適用形式による藝術的價値には全く關係なしに考へて）約四千萬弗の費用を要するだらう。併し技術的天才は一つの方法を發見した。六五粍の大型のネガティヴに最初畫を撮影する方法に依つて、三十五粍のポジティヴの限界內の必要な場所に（型の小さな方のセルロイドの全領域を蔽ふてしまふのでなく、異つた場合を持たせるために）その撮影したる畫面をはめこむやうになし、そして最後に、擴大レンズに依つて、その容積を擴大し、そして、映畫劇場の壁に應じて均合を變へて、スクリーンの上に映寫する、この同じ過程が垂直的構成にも利用されるだらう。そして圖に依つて示されるやうに、それは水平線のほんの僅かの變化に依つて、垂直的なる方をも均しく規定し得るだらう。」

引用文の、後の方は、或は吾れらに取つて直接な關係はないが、可動方形スクリーンを理解するための用にもなればと、思つて附加えた、しかも、本文には「圖に示す」とあるが、揭載書には、その圖らしいものはないので、具體的な事を示されない事を遺憾に思う。

今一つ、それは、發聲映畫と映畫館建築の問題である。

現在、封切られる歐米映畫の殆んどは、發聲映畫として提供される、日本映畫にも漸く最近發聲映畫への動きがうかゞへる。發聲映畫を排擊した、ソビエート映畫に於いても、今、また彼等の武器である、モンタージュに、その新技術を取り上げやうとしてゐる、おそらく將來の映畫において、發聲裝置の度外視はゆるされないであらう。

現在その、發聲映畫を上映さるゝ常設館において、それが勿論相應する建築的設備がないのにも拘らず、其音効果に於いて、經驗的には何等の障害も感じないやうである、とはいへ吾等は此課題に對しても、嚴密なる科學的究明が必要である。然して其結果は、必ず何等かの訂正を其れに附加されねばならないであらう事を想像する。そして亦、其結果が現在儘にて、吾人の經驗を一致することが、立證されてはじめて首肯出來る事である。

前揭書において、エイゼンステインもこの問題に言及して「音効

映畵劇場に於ける映寫室の設計に就いて

——その他設備——

ウ井リアム・ダブリユー・ウイルスン

現在我國に於ける映畵劇場の映寫室設計に關して種々と詳細なる點に迄研究されつつあるが、映寫室の設計が映畵劇場建築の最も重要なる役目であり、其設計に據つて著しき効果と影響を與へて居るかが度々經驗されて且つ明確に適不適かを示さる。只此稿に於ける乏しい一片の資料に據つて、少し乍ら讀者諸賢の研究を補ひ得れば甚だ幸ひと存じます。映寫室の設計に就いて記述するに當り、其前提として、映畵劇場の勃興に就いて大體を概述する事にする。

最近に及んだ映畵劇場の發展は實に驚嘆に値するものである。勿論映畵の發展は何と云つてもアメリカ合衆國の無限の富源と、其精力、物質の凄きじいまでの繁榮を示し、從つて映畵劇場の發達もアメリカが全世界中の總べてを握つて居ると同樣に、映畵の發達はアメリカ合衆國を除いては世界に於ける映畵の成立し得ないと言ふても決して恥じない所であり、言ひ過ぎではないであらう。

○

映畵、所謂活動寫眞が生れた當時は劇場廣間を利用し、特に映畵專門のオーデイトリアムといふ樣なものも存在されなかつたのであるが、次第に映畵の進歩と民衆の觀賞が增加したので專用映畵劇場が必要となつた。映畵劇場の使用に應ずる特殊な新しい各機能が研究されて、遂に現在では立派な映畵劇場として特に一般劇場と區別せらるるところの一つのオーデイトリアム形式が完成されて來たのである。勿論此形式の最も發達した所は映畵の本場であるアメリカである。アメリカ合衆國に於ける映畵劇場の發達は、偉大なる工學の貢獻に基くものであつて、其點に於いては歐洲大陸は遙かに遲れてしまつた譯である。が然し乍ら建築樣式乃至裝飾に關して、アメリカの劇場が依然として舊套を脫し得ないで、益々其煩鎖主義を高調して居る事實は洵に反面の工學的精神と對照して不思議であらねを吾等は期待しやう。

かくてまずしきこの小論は、一般建築計畵學の一分野映畵館建築計畵學への、方法論的序說を形成する。（完）

(1)『エイゼンシュテイン』『可動方形スクリーン』杉山末氏譯　昭和六年十月（映畵藝術）
(2)前揭書

果に對する、現今の映畵劇場の現在の大きさと形の不適當さ」を指摘してゐる、勿論氏にとつても、それが果して、科學的研究に依る所論ではなく、唯常識的に述べてゐるのではあらうが（エイゼンシユテインが過去において建築技術家であつた事に注意せよ！）更らに前の新提案との聯關のもとに、「將來に於いて、音劇場は改造されなければならないであらう。そしてその新らしい形態は—視覺的聽覺的知覺作用の混合を條件とする、これらの新しく來りつゝある時代に對して「ありし日のロキシイ」「ありし日のプレイエル」の水平的、垂直的傾向を交叉することに於て—可動方形スクリーンとその感動的刺戟の垂直的、水平的表現に最も適應したものであらう。[2]」とまれ、今、トーキーと映畵館はわれ〳〵に示された、よき一つの題目たり得るであらう。そしてやがて、その研究の發表されるの

ばならない。新興建築時代である今日アメリカ建築の多くは外觀の傳統的なる故を以つて顧られないのが常の如くであるが、吾々は其皮相にたぶらかされて內容を見る事を忘れてはならない。表面の裝飾的手法を嫌ふて其工學的內面をうかがふ事を見限つてはならないのである。

最近アメリカ合衆國に於いて素晴らしく大劇場が多數建設されて居るが、種々と各劇場に關して叙述したいが、茲では省略する事にして本題の映寫室の設計に就いて簡單に概述する。

○

映畵劇場には元來三種類の事物、オーデイトリアム、スクリーン及び映寫室に分類される。總べて他の設備が如何に必要、有益であつても此等の三つの事物に對しては從屬的に研究されなければならない。映畵劇場に於ける心臟と云ふべきものである映寫室（Projection Room 又は Projection Booth 單に Booth とも云ふ）は最近一般のオーデイトリアムにも（例へば公會堂、學校講堂等にも）必要のある場合を慮つて常備せらるる事となり、從つて其設備等に就いても充分考究さるる樣になつて來た。茲では主に映畵劇場の映寫室に就いて述べ度いと思ふ。映寫室の設計は餘りにも趣の無いので、餘りに重要視されて居らなかつた。然し映寫室の設計に據つて其映畵劇場の建築の優秀さを知る根據ともなる。

映畵劇場を三種類に分類されたオーデイトリアムは、兎角單に、觀客に對して相應に安樂に觀賞される場所として計畫さる。スクリーンは只觀客に映寫を見やすく與へる可き媒介物に過ぎないのである。スクリーンに映寫する効果は、映寫師の完全なる熟練に據つて示さる。映寫室は種々の配置に據つて異なるが、何れにしても科學的設備の配置が、映寫機と適應されて安全なる且能率の考究に基かねばならないのである。

アメリカに於いても映寫室の設計に就いて種々な問題が起り、劇場內と室內の調和が破られ裝飾的事物に映寫室よりの映寫を妨げたり、種々の不成功に終つた失敗の好例であるが、茲では省略して完全なる設計に關して叙述する事にする。

——映寫室の配置——

最初に映畵劇場に於ける映寫室の設計に當り、第一に配置の選擇が最も重要なるものである。且つ映畵劇場の中心軸としてオーデイトリアムの裏に、又バルコニイーの上に、或はバルコニイーの前面に配置された種々なる映寫室の配置があるが、殆んど全體のオーデイトリアムよりも其配置に充分考慮され、現在の映畵劇場は、下記の三種類に分類され、限定されるに至る。

(1)ヴオードヴイル（音樂と舞踏を交へた小劇で殊に流行唄を歌つて一つのヴアレーの樣なのも觀賞させる）と映畵場との結合せるものでバルコニイーを一、二階に占有せるフオーム

(2)一階建劇場にして或は小さいバルコニイーを普通に占有せるフオーム

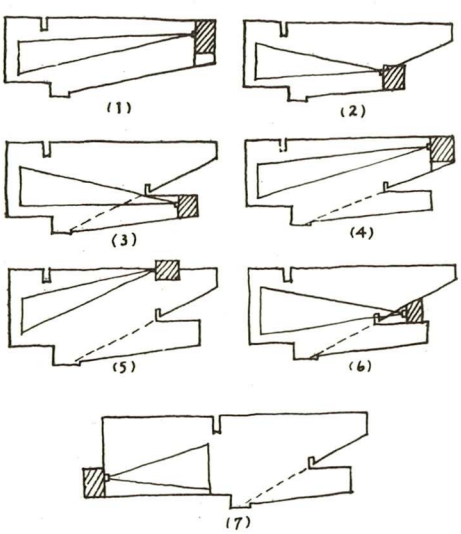
(3)大劇場で各階にバルコニイーを占有せるフオーム

一般に映寫室の配置はオーデイトリアムの裏に設計され、勿論其選擇は明白に簡易である如く、第一圖に映畵劇場內に於ける其位置の數種を示し、其等に據つて明確に知る事が出來る。

圖示に據つて概述すると、

(1)バルコニーなき映畵劇場であつて、映寫室の位置は最後部に在るのが普通である。

(2)觀客席が特にスタデイアム、タイプなる場合で、奥行が非常に深い場合に採用せられる位置であ



第一圖　映畵劇場內に於ける映寫室の位置

る。

(3)バルコニーのある一般映畫劇場で採用せられるものであつて、我國では此の例が非常に多い。

(4)アメリカ映畫劇場に採用せられて居る位置で、廣大なる觀客席では其位置が餘りに映寫幕から遠ざかるため、種々の不利益を生じ易く且つ其高さも高くなり過ぎるために、映畫の歪度を增加する缺點がある。

(5)天井より吊り下げたフォームである。(4)と同樣で其位置が高きに失するため映畫の歪度を增す不利益がある。

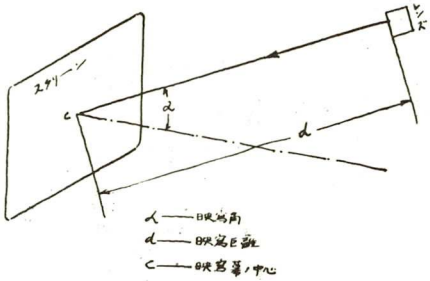
(6)此のフォームは(4)(5)等の缺點を補ふために最近に現はれた特殊な位置である。大映畫劇場にあつては此位置に據るのが最も適當である。アメリカに於ける一流大劇場に於いては此位置を採用して成功したものである。

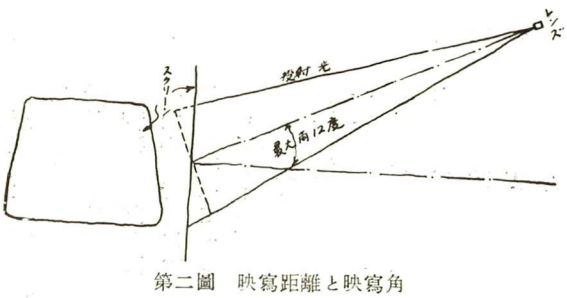
(7)此のフォームは不規則的なもので、映寫幕の裏から即ち觀客席と反對側から映畫の透きとほるスクリーンに逆に映寫する爲めの位置である。實際上不利益な點が多いのであまりに試みられないフォームである。

映寫室の位置に就いて、大體であるが、次に此位置を決定する爲の重要なる摘要を記述する必要がある。

——映寫距離と映寫角——

映寫距離 Projection Distance 或は Throw) は映寫機のレンズの中心からスクリーンの中心迄の距離であり、映寫角 (Projection Angle) は映寫機のレンズの中心と、スクリーンの中心とを結んだ直線(映寫距離)と、スクリーンの中心に立てた諸線との爲す角を云ふのである (第二圖參照の事)





第二圖　映寫距離と映寫角

此映寫距離と映寫角とはスクリーン上に現はれる映畫其ものと直接關係するものであつて、從つて映寫室の位置が重大なる所以となるのである。映寫距離の長短は映畫の大小に關係する。映寫距離の短い場合は映畫は小さく、映寫距離の長い場合には映畫は大きくなるのが普通である、尤も映寫機に使用するレンズの種類 (焦點距離の大小) に據つては映寫距離に關係なく多少映畫の大小を調節する事が出來るが、スクリーンとの關係がある故後記に讓つて述べることにする。

映寫距離には、ある限度があつて、長短何れに過ぎても宜しくないのである。短か過ぎる時は映畫が過小になる許りでなく、此を防ぐ爲めに焦點距離の小さいレンズを使用する時は、レンズ自身の收差が出て映畫が部分的に不鮮明になるのである。

即ち映畫面全體にピントが合はなくなるのである。此れと反對に餘りに長大に過ぎるときは映畫が過大になるばかりでなく、映畫面の輝度を相當に保つためには强大なる電力を要して、却つて不經濟である。其故に普通に採用せらるる映寫距離は五十呎から百呎の間であつて、八十呎前後が最も良好である樣である。スクリーンから映寫室の距離に於いて最も有利な位置は、共に平均して水平上であつて、スクリーンの中心線に正確なる事である。映寫角に於いては、映寫角の如何に據つては直に映畫の歪みに關係して來るのである。理想としては映寫角が零になる事である。スクリーンの中心を貫く諸線上に映寫機のレンズがある事である。然し乍ら多くの場合には映寫機は映寫室の採られる位置に從つて上下する爲めに映寫角が生ずるのであるが、要は此角度に對して制限すべきである。映寫角は

制限されたのは百二十を超えざる事を提示してゐるが、實際には尚此を越して十八度乃至二十六度迄に見られる。

此角度は映寫機の傾斜と水平線に一致されたスクリーン上に於いて測定されたものである。又スクリーンの中心と映寫レンズの距離の角度を示したものである。第一圖の(5)に示されたる如きフォームの映寫室を有するところでは、映寫角は必然增大し、畫面の歪度甚だしくて頗る不愉快な結果を示して居るのである。以上は上下の映寫角に就いてであるが左右に就いても勿論映寫角は零なる事を理想とする。然し一般に映畫劇場では、映寫室は平面上オーディトリアムの中心線上に置き得るのであるから、上下の映寫角に比して左右の映寫角の問題は左程重要でない。只映寫室の中心を矢張りスクリーンの中心を貫く諸線上に平面上で一致させる事は必要である。前述の如く映寫室の位置の法定は此等映寫距離と映寫角の制限に據つてさるべきものである事と思ふ。

——映寫室の大きさ——

映寫室の大きさは室内に施設さるべき映寫機の個數其他に關する設備に據つて面積の大小があるが、映寫機は普通二臺以上備へらるべきものである。現在の一流映畫劇場では映畫の各卷の移り目を圓滑ならしめる爲にであるが、尚其内の一臺の故障を慮つて三臺を常備する。其他幕間の廣告幻燈其他演出上の必要に應ずる爲に幻燈映寫機をも一臺備へる。

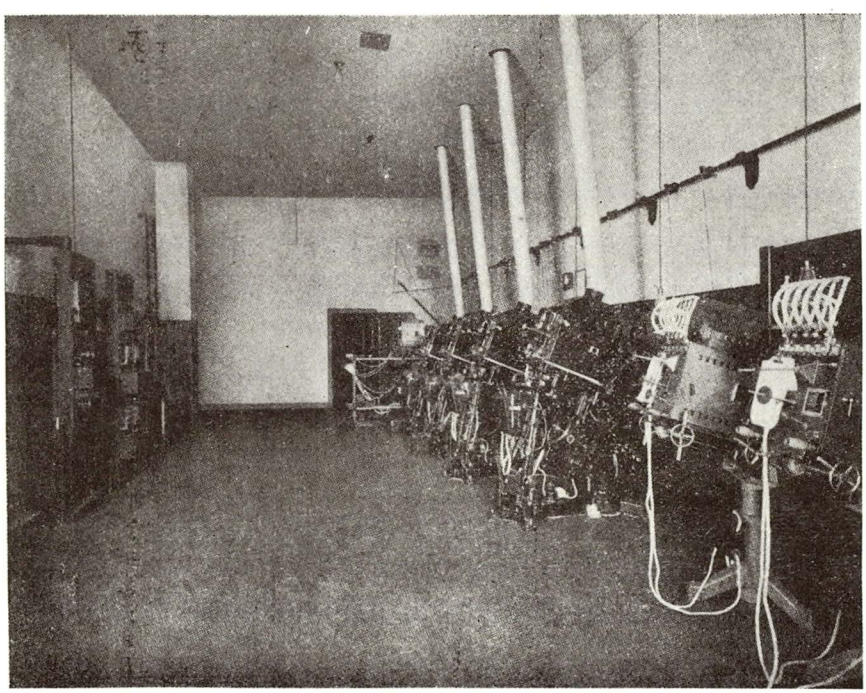
又スポツトライト機械を一、二臺備へる、此は映畫演出に利用される場合と他の演技である舞踏、歌踊、奏樂等に應用される場合に常備される。此外フヰルム貯藏棚及び卷換器、變壓器、スヰツチボード、電話及信號裝置、消火器及び消火用の砂を盛つた桶等も必備品である。尚映寫師の爲めに洗面手洗器、衣服棚等を設ける事も擧て置く。最近では此等の設備品を數室に區分して、即ち映寫室そのものを更に幾つかに區劃して、各部の運轉を一層圓滑ならしめる複雜なる平面を持つものが現はれて來た。其等は大體次の四室から組織されて居る。

(1)映寫器室、(2)電氣室、(3)フヰルム卷換室、(4)映寫師室等に分類され、各室の理想的寸法を擧げれば

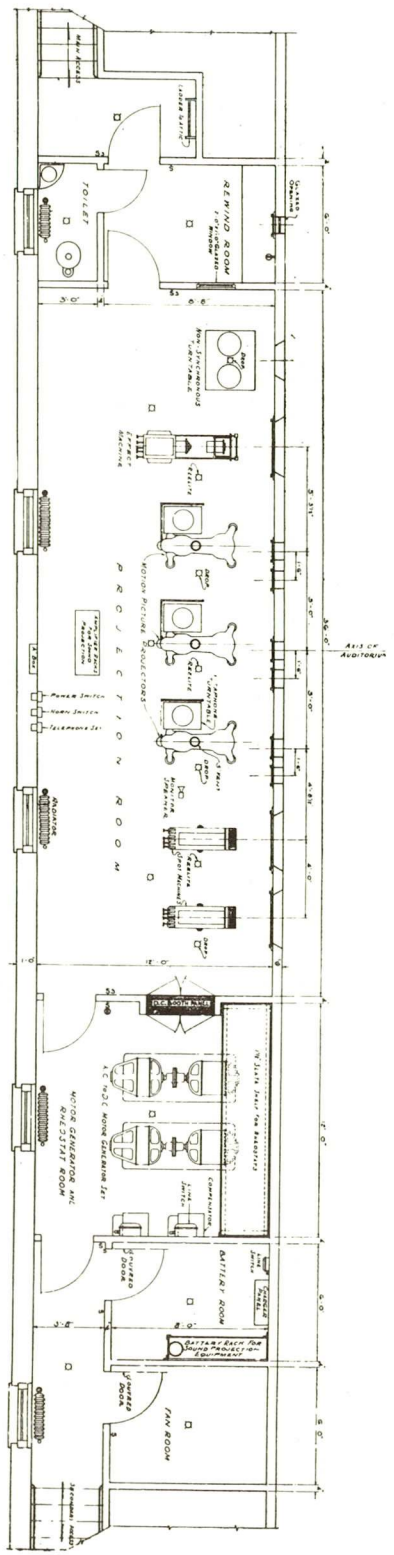
	奥行	幅	天井高
映寫機室	8′—12′	8′—36′	8′—12′
電氣室	6′—12′	10′—12′	8′—12′
フヰルム卷換室	6′—8′	6′—10′	8′—12′
映寫師室	12′	10′—12′	8′—12′

第三圖の挿畫は完備せる代表的映寫室の好例である。

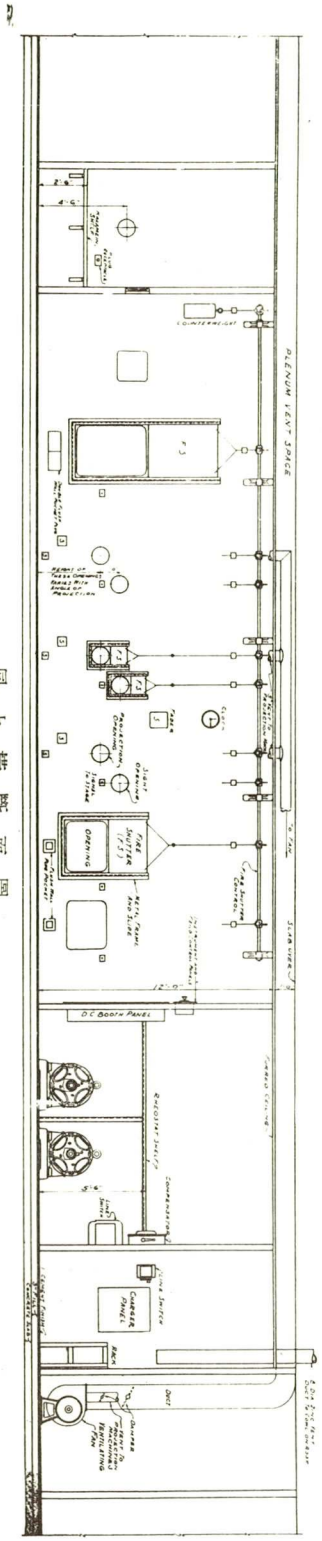
映寫機の配置は機械の種類に據つて多少の差違はあるが、大體に



第三圖　代表的映寫室内部



第四圖　映寫室代表的平面圖の好例（其一）

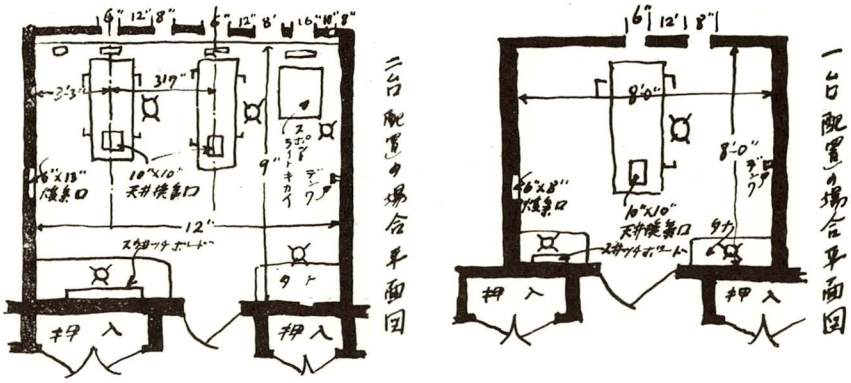


同上其斷面圖

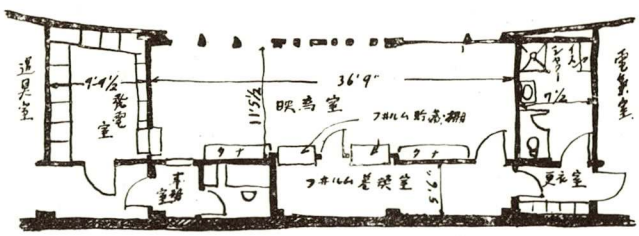
於いて三呎から五呎の間隔を置いて並べるのであるが映寫機二臺使用する場合には、映寫室には尠くとも室の幅は映寫機の左右に三呎の裕りを取つて九呎以上にしなければならない。我國の興行場及興行取締規則第三十五條の規定に從ふれば、映寫室の大きさに關して間口五尺以上、奥行九尺以上、天井高六尺以上となす事、但し映寫機二臺以上を使用さるには一臺を加へる毎に間口三尺を加ふる事と規定されて居る。

但しスポツト、ライト機械の間隔は四呎とされて居る。映寫室に關聯して、映寫孔と覗き口は映寫室前面の壁には映寫及び觀測の爲に幾つかの孔が穿たれる。此等の配置並びに大きさの設計は中々困難である。前述せる如く映寫機の種類に據つて配置、其間隔、高さ等にも多少の相違がある爲めに、豫め使用さる映寫機を精密なる寸法を見出す事が困難であるが、大體に於いて第四、五、六圖の如き寸法で設計されてあれば間違ひはない。映寫孔が二二呎角あるのは、機械の据え付け後に更に投光に對して必要であり、充分な小孔を穿つた石綿板を此れに充塡する事が出來る爲めである。尙何れの開孔も極めて良質の硝子板、此れは寫

眞種板の薬膜を剝がしたものが利用されて密閉される。室内の噪音が観客席に漏れぬ要慎も必要である。此外防火用として石綿板の防火扉が一時に閉ざされる仕組となつて居る。第七圖に示さる如き映



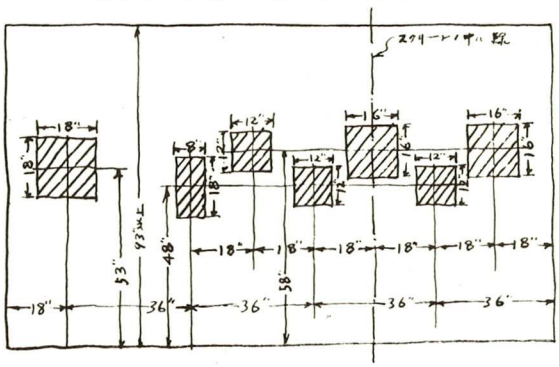
第五圖　映寫室代表的平面圖の好例（其二）

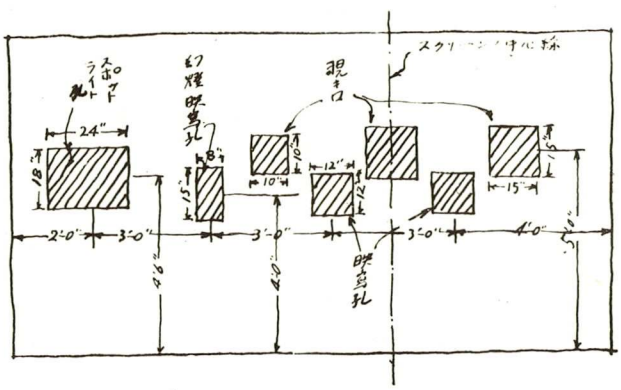


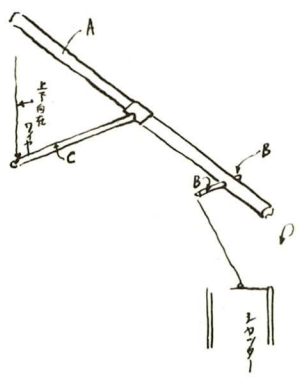
第五圖　映寫室代表的平面圖の好例（其三）

寫孔覗き口の防火扉の一例として参考に示す事にする。圖に示さる（A）は防火扉を引上げるべき主要パイプであつて、其のパイプに突出した棒（B）に防火扉を釣して、主要パイプの廻轉に據つて防火扉が閉ぢる様になつて居る。主要パイプの一方の隅に平衡せる錘りをパイプに釣して操縦挺（C）に據つて防火扉の重量に比例して主要パイプが廻轉さる。そし

第六圖　映寫室の前壁開孔の基本寸法圖







第七圖　映寫孔覗き口及防火扉の設置略圖

て一齊に非常時に閉ざされる様になつて居る。次ぎに映寫室の構造諸設備等を簡單に概述する。

——映寫室の摘要——

映寫室の位置と映寫距離と映寫角に關しては前述した故に簡單なる構造を列記する。

(1)映寫室の構造は勿論總べてが防火的でなければならない。普通鐵筋コンクリート厚さ六吋の、壁床及び天井とするが又壁と屋根トラスをステールフレームで支持する事もある。間仕切

壁はホーロータイルブロツクにセメント、モルタル塗仕上とし、内部の仕上げはモルタル塗仕上げの上にペンキ塗りが宜しく又リノリユームを敷く事もある。床の色彩は暗灰色とする。此れは普通セメント、モルタル塗仕上の場合、仕上塗として一吋の厚みに暗灰色を塗つて仕上とする事は衛生的であり使用上に最も好効果も及ぼすからである。注意すべきは前面の壁面のはみ暗灰色として映寫師の觀測を容易にする爲めである。他の二側壁と裏壁面は明灰色として天井は明クリーム色ペンキ塗仕上とする事。

(2)映寫室の出入口は一ケ所で充分であるが、必ず非常時に逸早く脱出し得る位置と各連絡すべき諸室に適當なる位置を選らばなければならない。勿論扉及び枠共に防火的のもので、スチール、メタルに完全に構造せる製品を使用して、更らにドアー、チエツクを上部に取付けて自働的に閉ぢる裝置が必要である。若し窓を外部に設けた場合には、ホローメタルサツシユの上下窓として硝子はワイヤー入りとする。各々の扉は外開きとするが、映寫室から直接觀客席に出入口があつた場合には、内開きか引戸にした方が火災の際觀客に迷惑をかけないであらう。映寫孔覗き口の防火扉は前述せる如き裝置をされる様に絶對的防火に具合よく輕く操縦さる。

(3)煖房、冷房、換氣裝置も最近の科學的設備を利用して適應せる裝置を設くる事、機械的にして調節自在の換氣裝置と共に、映寫設備と、部屋に對する分離システムを施し出來れば、第四圖右側隅に示さる如き換氣室を設けて、完全の働きを成す事も出來る。外窓に對しても適當なる溫度放熱を考究するを要す。

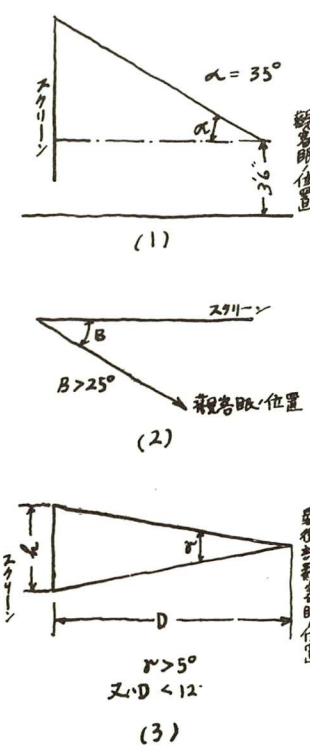
(4)便所、化粧室は映寫室に接して映寫師の使用便利なる配置に設計さるる事。

(5)電氣配線換氣其他の配管は天井壁、床下の中に隱蔽する事、映寫機に電力供給は各々の映寫機の電燈下の床下に配管されるゝモーター發電機設置は直接交流に據つて供給さる。

ヴオールト、メートル器具、速度表示器等が各々の映寫機械の前壁下に設置される。室内電話とシグナル、システムが必要であつて、支配人室、事務室、オーケストラピツト等に連絡される様に配管する事、映寫室に於ける總べての照明は室内の色彩に據つて間接照明にする事。

(6)映寫室及び事務室等に使用さる貯藏棚、椅子等も鋼鐵製とする事、特別室（發電室等）の棚はスレート製とする事もある。

(7)映畫、ヴオードヴイル等の結合に依つて最近著しく發達して來た音響映畫が、平均三、五〇〇人位の小劇場に於いても其等の要求があつて設備され、設計される様になつて來たので、電氣裝置も特に考慮して、交流を直接にモーター發電機より供給して映寫機に配電さる。速度表示器は寫眞と共に音樂との同時發生に對して、映寫室と音樂家の指揮者の間に於けるシステムの様なものである。電壓メートルが發電機の可能性を示す故音響映畫は同時發生の無い場所を使用する。此等の設備はオーデイトリアムの奥隅かバルコニイーの裏に設ける事もある。音響映畫になると電線も複雑になるので特別な設備が原因として保險業者の檢査も要求される事にもなる。專門的な注目としては此等の配線計畫に於いて必要であるべき暗渠が適當に總べての仕事を隱蔽する事である。



第八圖　英國照明學會の提出せる映寫角と觀客の位置に關する制限圖

○

大體簡單に概述して來たが最後に映寫角に關係のあるスクリーン

に就て稿を補ひ度いと存じます。申す迄も無くスクリーンは映畵劇場の生命である。此れの良否は重大な結果を招致するから、最も考慮を拂ふべきものであらねばならない。スクリーンの位置としては成る可く最前列の觀客から遠く置かれるが良く前列の觀客にとつて餘りに映畵を見る視角が擴る事は餘りに苦痛であるからである。英國照明學會では第八圖に示す様な關係を以つて、スクリーンと觀客席との位置を制限する事を提案して居る。圖示に據ると第一は最前列の觀客がスクリーンの上端を見得る仰角三五度を超えてはならない事、第二は最前列の觀客がスクリーンの兩端を見る時、スクリーンと其視線の爲す角が廿五度より小さくてはならない事、第三は最後列の觀客がスクリーンの下端を張る視角が五度より小さくてはならない。又最後列の觀客とスクリーンとを結ぶ距離はスクリーンの高さの一二倍を超えてはならない。一般に映畵劇場では舞台と觀客席との間に相當大きなオーケストラ、ピツトを採り、尙其れから幾何かの餘裕をおいて、スクリーンと最前列の客席との距離を、勘くとも廿尺乃至廿四尺位に置く事が良い様である。スクリーンの高さは觀客席の形式其他に據つて一概に決定し兼ねるが、サイド、ラインを損ねぬ範圍に於いて、及び前方の觀客の仰角を過大ならしめぬ範圍に於いて決定さるべきである。普通スクリーンの下端が舞台床面上三尺乃至五尺位を以つて適當とされて居る。

スクリーンの大きさは觀客席の大小に據つて異るべきであるが先に映寫距離の所にて述べた様に、映畵の大きさ、從つてスクリーンの大きさは映寫距離のみでなく、使用する映寫機のレンズに據つて調節され得る。次に此等の三つの關係を第九圖の如き表にしたものを揭げ、映寫距離と使用レンズの決定したる場合に於ける映畵面の大きさを求めるに役に立てる。表にはスクリーンの大きさが巾十尺以上廿尺以內の各寸法を擧げた。大體に於いて此の範圍が適當な大きさであるからである。尙フヰルム一齣の大きさは縱$\frac{11}{16}$吋橫$\frac{15}{16}$吋であるから大體に於て縱橫の比は三對四の割合である。

映寫室の位置に據つて映寫角が大きくなれば、從つて映畵に多少の歪みを生ずる故に、前記の大きさに誤差を生じて來る。此誤差は計算に據つても求め得らるゝが、實際に當つて測定し、投寫された畵面內に內接する矩形を以つてスクリーンの大きさを決定すれば良い。スクリーンの周圍は、映畵との對照上暗黑にする必要がある。故に灰黑色の天鵞絨を以つて充分幅の廣い緣を採るのである。シヤドウ、ボツクスとしてスクリーンから少し前方に更に額緣を設ける事も效果がある。尙スクリーンの四隅は一尺乃至一尺五寸位の半徑を以つて弧狀にする事もある。表に揭げた數字は實は映畵面の大きさであつて、スクリーン其のものゝ大きさは、其れよりも四周盡く二三寸位小さい事で、換言すれば映畵がスクリーンの外に一二寸宛はみ出して居る程度が實際上宜しい、此れは映畵の多少の動搖に備へる爲めである。スクリーンの種類と其性質には種々な材料が採用せられて居る。現在多く用ひられて居るものを擧げると、

(1)白布幕(2)白漆喰又は白壁(3)金屬粉面幕(4)鏡板(5)硝子玉幕(6)透明

映寫距離 / スクリーンの大きさ		50'	60'	70'	80'	90'	100'
NO·16	4'	8·44 11·25	10·14 13·52	11·94 15·78	13·54 18·05		
NO·17	4½'	7·14 10·58	9·54 12·72	11·14 14·85	12·74 16·98	14·34 19·11	
NO·18	4½'	7·50 10·10	9·01 12·01	10·52 14·03	12·03 16·04	13·54 18·05	
NO·19	4¾'		8·33 11·38	9·96 13·28	11·39 15·19	12·82 17·10	14·25 19·10
NO·20	5'		8·10 10·80	9·46 12·62	10·82 14·42	12·28 16·23	13·54 18·05
NO·21	5¼'		7·72 10·28	9·00 12·00	10·30 13·73	11·60 15·46	12·89 17·18
NO·22	5½'			8·60 11·46	9·83 13·11	11·07 14·76	12·31 16·40
NO·23	5¾'			8·22 10·96	9·40 12·53	10·56 14·11	11·79 15·69
NO·24	6'			7·87 10·50	9·00 12·00	10·14 13·52	11·27 15·03
NO·25	6¼'			7·55 10·07	8·64 11·52	9·73 12·97	10·81 14·42
NO·26	6½'				8·31 11·08	9·35 12·48	10·40 13·87
NO·27	6¾'	スクリーンの大きさ 上の數字は高さ 下の數字は巾 (單位=尺)			8·00 10·67	9·00 12·00	10·01 13·35
NO·28	7'				7·71 10·28	8·68 11·58	9·65 12·87
NO·30	7½'					8·10 10·80	9·00 12·00
NO·32	8'					7·59 10·12	8·44 11·25

第九圖　スクリーンの大きさと映寫距離並にレンズ焦點距離及レンズ番號關係表

發聲映畫館内の音響

山本和夫

はしがき

無聲映畫から發聲映畫への轉換によつて映畫界は凡ゆる方面に於て影響を受けて來たが、映畫館そのものを考へてみても、從來の無聲映畫とこの新しい發聲映畫との間には、當然音響上の取扱ひが區別されねばならない事は明かである。即前者に於ては直接辯士の音聲、若しくは音樂の音色を聞くに對し、後者に於てはラウド・スピーカーによる再生音（reproduced sound）を聽取するのである。吾人は先づ音源の相違に留意すべきである。

近代の映畫館に於ては映畫の外にレヴュー等の實演があるから、其の音響的設計に關しては發聲映畫に對する特別の考慮が拂はれると同時に、舞臺上からの音聲や音樂が滿足に觀客一般に聽取される事を必要とする。後者の問題は一般に劇場其の他のオーデイトリヤム内の音響を研究する際其の對象となるものであつて、こゝでは暫く此の問題には觸れない事とし、以下ラウド・スピーカーによる再生音に關しての記述をなす積りである。

映畫館の形

映畫館に於てはスクリーン上に映寫される像が觀客に對して變歪されてはならないから、劇場に於ける如く、あまり高所に觀客席を

幕(7)四面幕等の七種類に分類される。(1)は一般に手輕に使用され居るが、縫目無しのものが得難いことゝ度々洗濯せねばならないので一流映畫劇場には適さない。(2)は施工の容易と安價なる爲めに多く使用さる(3)はアルミニユーム粉の如き種類を硬板に塗布したもので殊に反射性が强い(4)は普通鏡の表面に更に一枚の曇り硝子を張つたものであつて(3)と同樣に反射性が强い(5)は極く小さい硝子玉を一面に貼布した幕であつて、特殊な反射性質がある。(6)白布又は曇り硝子を裏うち無し用ひるもので、映寫室が觀客と反對側に在る場合に使用せらる(7)は微かな凹面を持つたスクリーンを申すのであつて、焦點距離が小さいレンズを使用して比較的大きな畫面を得る時に、畫面の收差を防ぐ爲めに用ひられるものである。此等のスクリーンは何れもそれぞれの反射の性質を有つてゐる。其反射性に應じて選擇採用すべきであつて、一概に其の優劣を斷ずべきではないのである。即ち(1)(2)は擴散反射の性質が比較的一樣であるから、スクリーンに對する視角の如何に關係せず一樣の輝度を有つものである。之れに反し(3)(4)は其反射が比較的鏡面の正反射に近づく爲めに、スクリーンの正面に於いては非常に輝度强く、側方に向ふに從つて急に輝度を減ずる性質を有つてゐる。故に比較的幅の廣い觀客席を持つ映畫劇場に於いて前二者を、比較的幅の狹く奥深い觀客席を持つ映畫劇場にあつては寧ろ後二者を選ぶ事が合理的である。(5)は其反射の性質が前述した樣に特殊であつて、スクリーンに向つて入射する方向に向つて又反射する傾向を有してゐるのである。映寫室がバルコニィーの後方に在る場合等にはバルコニィーの觀客にとつて此性質は有利である。

○

以上大體映畫劇場に於ける映寫室並びにスクリーンに就いて概述したが、甚だ意の達し得ない諸點もあつたが、詳細なる點は後記に讓る事にする。此稿を終るに當り此等專門的研究せる諸賢の御研究に據つて此稿を補ひ得れば甚だ幸ひと思ふ。

（一九三一・十・十一）

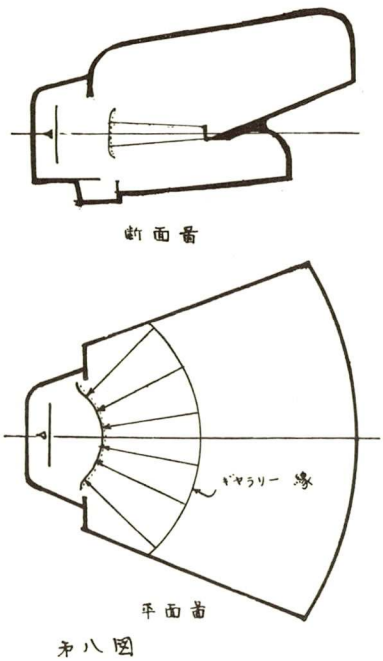
★　★　★

設置する事は避けたいものである。單一のギヤラリー或は其の外にメザニンを有するものが適當の様である　特にメーン・ギヤラリーの下は高くしないと此の部分への音の到達が妨害される。

平面は扇形になすのが好ましい。これはスクリーンから充分離れた場所に座席を多く作り得られる爲と、スクリーンを見るに際し適當なる視野を脫する部分が甚だ尠い爲である。

觀客席があまりスクリーンに近いと映畵をみるに不便であるばかりでなく、ラウドスピーカーに接近し過ぎる欠點があるから、なるべく斯様な席は廢したい。然し乍ら經營上觀客の收容數を出來得る限り增加せしめんとする爲に其の實現は至難である。これに反して後方の席はスクリーンを見るに都合よく、音を聽くには不都合になつてくるが、扇形のプランを有し、單一の大きなギヤラリーを有つ映畵館を考へてみると、此のギヤラリーの前半部は視覺、聽覺何れに於ても良好であつて最上等の席と謂ひ得られる。

發聲映畵館に於ては特にギヤラリーの緣の形に注意を拂ふべきである。第八圖はギヤラリーを除いては音響上良好と思はれる形態を表はしてゐるが、ラウドスピーカーの位置をみると斷面圖に於てはギヤラリーと同一高にあり、且平面圖に於てはギヤラリーの緣邊の曲率中心に位してゐる、これは明かにこの部分へ投射せられた音波がラウド・スピーカーの位置に集中する事を示すものであつて、反響 (echo) 或は定常波を生ずるものである。此の有害となる音波を分散させる爲には通常浮彫を附して其の面を粗ならしめる工夫がなされるが、斯様な極端な場合に於てはあまり有效とは思はれない、寧ろこの部分全體に吸音材を貼つて音の消滅を計るのが妥當の策である。最初デザインをなす際には極力斯様な形は避けて多角形となすのがよい。この事は單にギヤラリーのみに對する注意でなく、觀客席の後壁に對しても同樣である。



第八圖

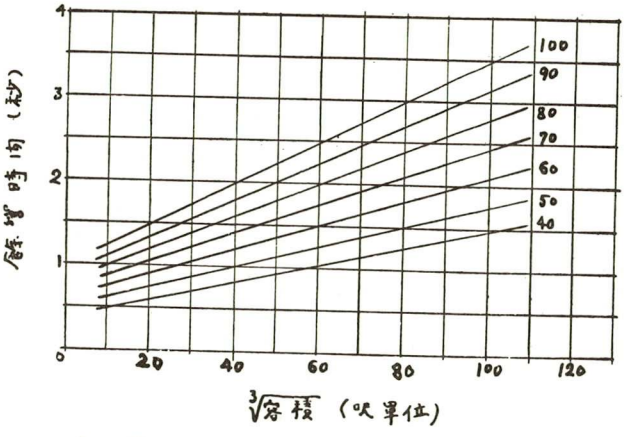
再生器

再生器として使用されるものに二種類ある。即 horn (或は directional) type と cone type とである。

horn type は指向性 (directional effect) を有し、これから發生される音束は宛然サーチ・ライトから放射される僅か發散性を有する光線に類似した短波の音である爲めに、若しオーデイトリヤム內に曲壁、穹窿の如きものが存在する時は、これによつて反射音は集中せしめられ反響を生ずる。而して其奇妙にして豫期せざる反響の數及び種類は實際著しいものである。この再生器から發生された音の大部分は直接前進するものであるから反射壁による補强は期待出來ない。又この際オーデイトリヤムの巾はある制限を受くべきであつて、若し巾が廣い時には音波は單に複雜なる反射によつてのみ舞臺近くの隅其の他直接音の到達しない場所を潤し得るのみであつて、斯様な場所に於ては良好なる聽感は望み得られない。

斯様な指向性を有する音源を使用するには數個の horn をスクリーンの後部に配置して總ての座席に音波が到達する様にすればよいが、其の配置竝びに相對的位置に就ては特に留意する必要がある。再生器の位置が不適當な爲に聽感に不滿足を與へる事は屢々見受けられる所である。理想的に云へば、音波はすべて出來る限り一點から發生される様にしたいものである。再生器を遠く離して設置する

事は一若し其等が指向性に富むと左様になり勝ちであるが――如何にしてもオーディトリヤム内に音響の局部的混亂域を生ずるものである。其の理由は直接音、反射音の行程差がある爲に音波の連續が不完全なる合成をなすに因るのである。この解決策としてはスクリーンの直背に再生器を集合せしめる事であるが、斯様な操作に對する缺點とするところは、音波がスクリーンに於て吸收、反射をなす爲にエネルギーの一部が消失すると云ふ事である。勿論其の程度はスクリーンを構成する材料、其の多孔性或は再生器のスクリーンに對する位置によつて一定しないものであるが、實驗の結果によるとエネルギー消失の程度は一乃至二デシベルから五デシベルの見當であつて、スクリーンの性質によつて其の吸音も偏りたる撰擇性のものである。

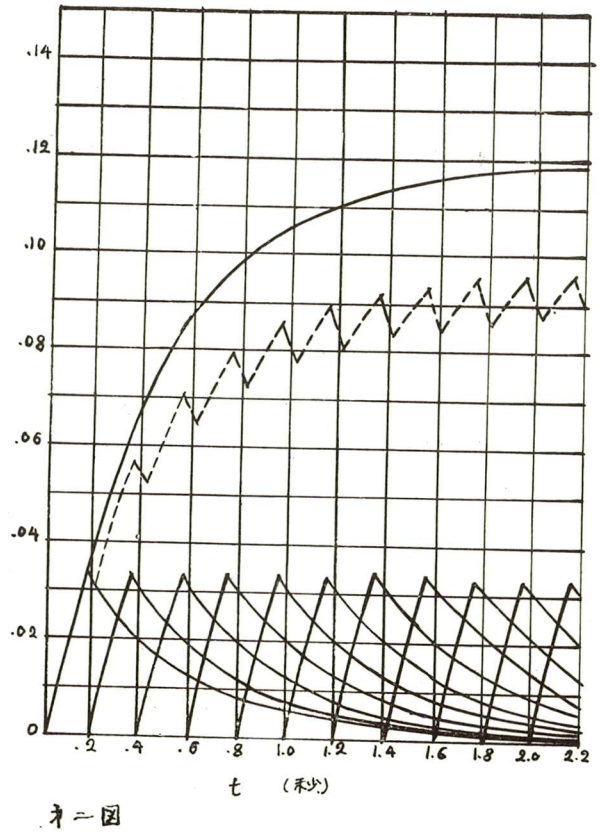


第一圖

Cone type のラウド・スピーカーによると音はよく四方に行亘り音源附近の反射壁による補強作用も可能となり、從つて音の強度も一樣に分布される利點があるが一般には horn type が使用されるといふ事である。

適度の餘響時間

W. C. Sabine 其の他の諸學者の原音(Original speech)に對する餘響の研究は再生音に對しては全く應用出來ないものである。これ等兩者が餘響時間に對して其の要求を異にせる事は既に承認せられてゐる所であつて、Sabine 等によつて得られた適度の餘響時間を有する劇場が再生音に對しては却つて良好なる音響狀態を示す事が屢々觀察される。即ち餘響時間の短小は原音に對してよりも再生音に對して、より以上に望ましい事が判明した。次に其の相違の原因を調査してみよう。



第二圖

發聲映畫の如く其の音聲がスクリーンの視覺的擴大効果と相俟つて擴大される事の必要なものにあつては、劇場内の音響の强さは通常の肉聲乃至は樂器に比して增大されるから、從つて餘響時間は增加をなす。又原音記錄に於て多少の餘響を有する音が再生せられる爲に、餘響の効果は二重に吾人の

聽感に影響するのである。故に發聲映畫に對しては通常のオーディトリヤムに於て適度とする餘響時間よりも稍小なる餘響値を適當とするのである。

音の再生に對して音の強度の增加が及ぼす影響を理論的に決定する前に、先づ餘響の問題に觸れておかう。

從來諸學者によつて求められた餘響理論式から音の强度の餘響に及ぼす影響を考へる事が出來るが、今その得られた結果を圖示してみると餘響時間と室容積とに關する一群の曲線が得られる。

第一圖は振動數五一二(C)の音源を用ひて種々なる音響强度に對する餘響時間と室容積との關係を表はしたものであつて、圖中六〇デシベルの曲線は可聽最小音の百萬倍にあたり、餘響時間測定に於ける標準のものとして Sabine 其の他の學者によつて用ひられた音の强度である。

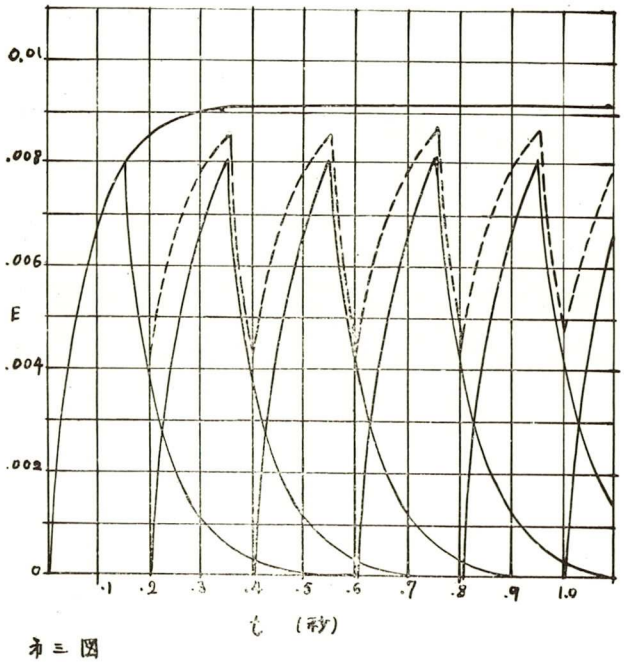
原音に與へる餘響の影響は Eckhardt 氏の研究に詳細に示されてゐる。

第二圖は吸音力の小なる室に於て、數多の音節を連續發音せる場合の音の强度の成長、衰滅の關係を表はすものである。而して室内に於ける全體の强度曲線は、各時間に於ける音節の强度の和を以て表はす事が出來る。即第二圖に於ける點線はこれを示すものでありこれに依つて音の明瞭度に對する餘響の影響を明白に知る事が出來る。

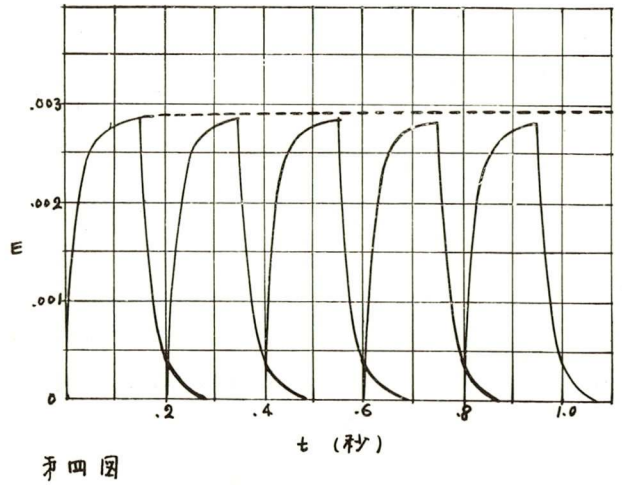
第三圖は原音に對して適度の餘響時間を與へる樣室内を充分吸音材で仕上げた場合であつて、第二圖と比較すれば音の明瞭度に對して、より滿足なる狀態にある事が判る。

第四圖は更に吸音材を增加せる場合であつて音の衰滅は著しい。此の場合各音節の强さは其れ等の音節を同一の割合で連續發音せる場合の最大値に達してゐる事が判る。尙次の音節を發音せる時は、前の音節の强度は殆んど殘存してゐない事が判る。

第五圖は再生音に對するスタヂオ及び館内の餘響の總合的影響を示す理論的曲線である。スタヂオ内の音の成長と館内の音の成長との總合的影響が、この音强成長曲線(Intensity growth curve)を生ずるとした假定は、理論的に正しいものであつて、そのスロープ

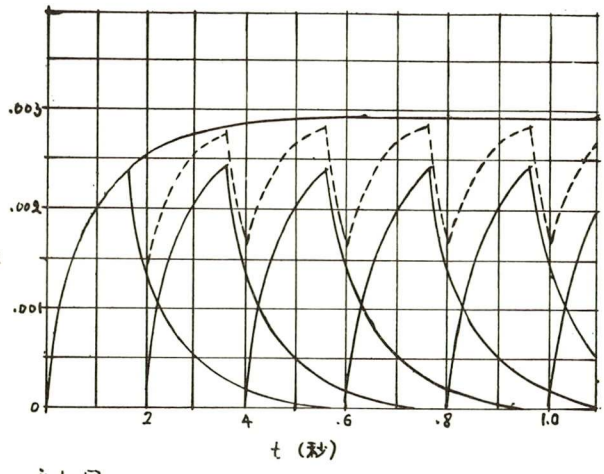


第三圖

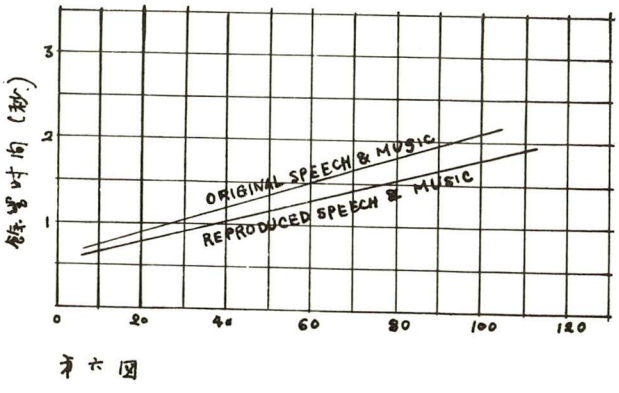


第四圖

は原音のものに比して決して大ではなく一般には小なるものである。此の假定の基礎をなすものは館内の音源が不定であり、且原音に比して不連續なる事實に因るものである。同様にしてスタヂオ及び館内の餘響の總合的影響を考慮せる衰滅曲線を考へてみると、其の衰滅の割合は原音のそれに比して決して大ではなく、一般に小なる事が想像されるのである。此等總合的の影響は、原音に對する以上に再生音の繼續時間を增加し勝ちであつて、此等現象から、再生音は原音に比して常に短い餘響時間を必要とする事が判る。然し乍ら實際に於て、普通の聽者に對しては此等の差異は理論上曲線に示される程著しいものではないが、決して等閑に附すべきものではない。特に再生音の强度の增加の爲に此等影響が次第に蓄積されるといふ事は考慮すべきである。



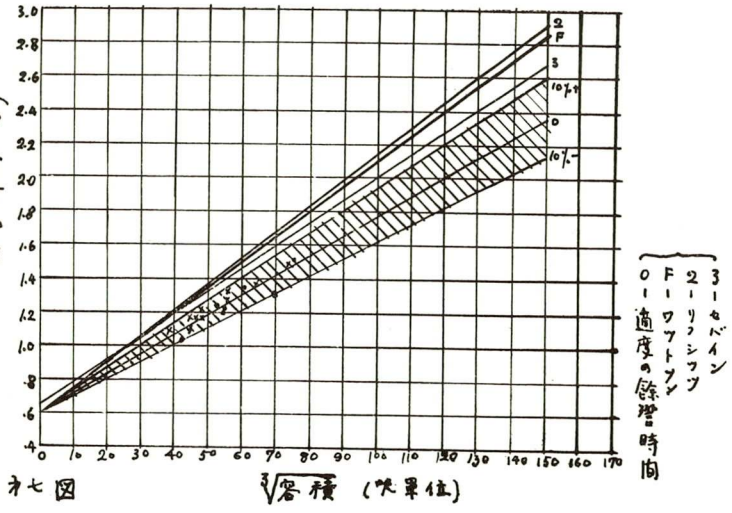
第五圖



第六圖

次に再生音の强度と原音の强度とを比較してみよう

餘響時間はデシベルで表はされた音の强度に比例して變化するから、若し再生音の平均强度が判れば、これより再生音に對する適度の餘響時間は求められる譯であるS. K. Wolf 氏によるとこの平均强度は七〇デシベルと考へて差支へないとの事である



第七圖

然る時はSabine其の他の學者の得た原音に對する曲線（六〇デシベルを基準とす）から再生音に對する適度の曲線は六〇對七〇の比で求められる。第六圖は之を示す。

以上に於て大體原音及び再生音

に對する餘響の說明を終へたのであるが、次に再生音に對する適度の餘響時間の問題を述べようと思ふ。

Wolf氏(一九三〇年)は音響上良好なりと好評を博してゐる幾多の映畫館を實地調査して、再生音に對する適度の餘響時間として第七圖を發表した。即圖中ハッチングを施せる部分が實驗上得られた適度の餘響値の散在する範圍を表はすものであつて、中央に引かれた(O)線が求める曲線である。尙比較對照の便宜の爲、Watson, Lifschitz, Sabine の與へた原音に對する適度の餘響時間(演說音樂兼用の數値を示す)も記入されてゐる。

次に再生音を取扱ふ場合に於て室内の全吸音力は原音の場合に比して如何程增加すべきかを考へてみよう。再生音に對する餘響時間は原音に對するものの七分の六であり、一方餘響時間と全吸音力とが互に逆比例する事から、この際の全吸音力は原音の場合に於ける全吸音力の六分の七とならねばならぬ。即ち全吸音力の增加は約一七パーセントに當る。

又 C. M. Swan 氏(一九二九年)の言に依れば、再生音の場合に於ては室内の全吸音力は原音の場合に比して二〇乃至二五パーセント增加すればよいとの事であるから、この說によると前記のWolf氏の場合に比して大なる吸音力を要求してゐる。

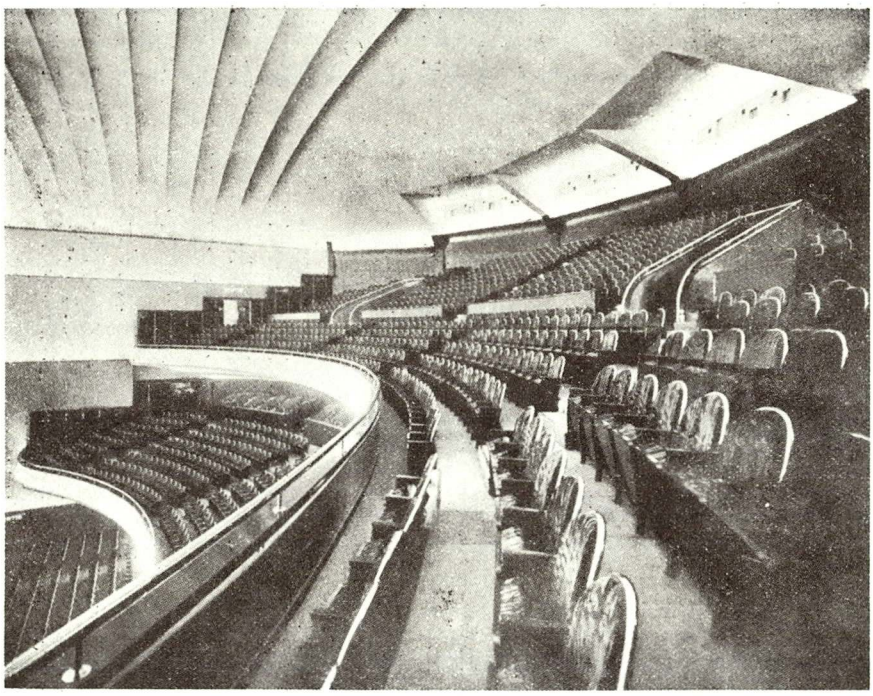
又Hope Bagenal, Alex Woof兩氏(一九三一年)によれば horn 型ラウドスピーカーに對しては餘響時間は短いのがよく、それには室の容積を一席につき一五〇立方呎以下となすと都合がよく、實際に於ては約一・四秒の餘響時間が席數一五〇〇、且觀客數が全體の三分の二なる場合に於て滿足なる結果を生ずるものであると云つてゐる。

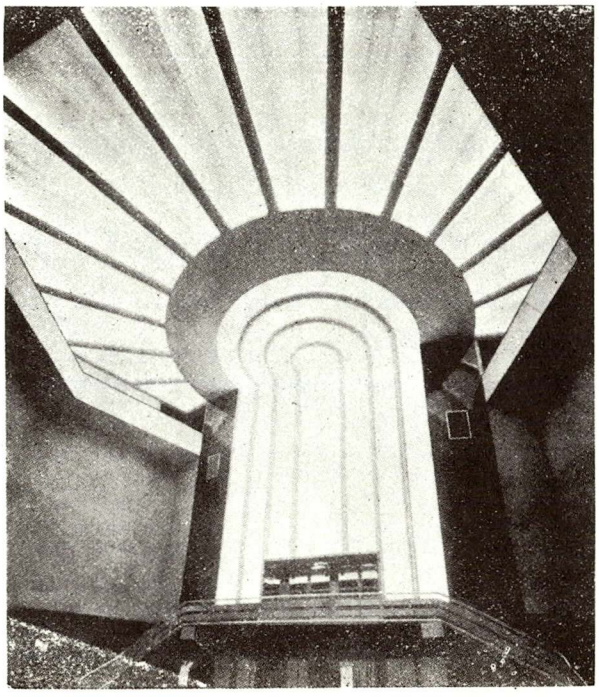
再生音に對する適度の餘響時間の研究は最近其の端緒についたばかりであるから、吾人は其の何れを是とし、其の何れを否としてよいか急に決定する事は出來ないと思ふ、こゝでは單に幾分の手懸りの意味で紹介した迄である。

(附記)筆者は極く最近から建築音響學の文獻を漁りはじめたばかりのものです。最初はWolf氏の適度の餘響時間に關する研究を紹介しようと思つて抄譯を試みたのですが、途中から思ひ直して改めて筆者の手元にある貧しい材料を整理してみたのです。締切切迫の爲蒼皇の中に執筆し、その爲意外の誤や思過ひがあるかも知れません。若し誤がありましたら御指摘下さつて筆者を正しい方へ御導き下さらん事を切に希望いたします。尙原稿を書改めた爲に挿圖を一枚附加したので、その番號が一部顚倒してゐますが御寬容下さい。

訂正

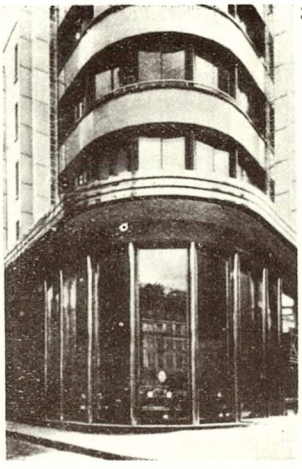
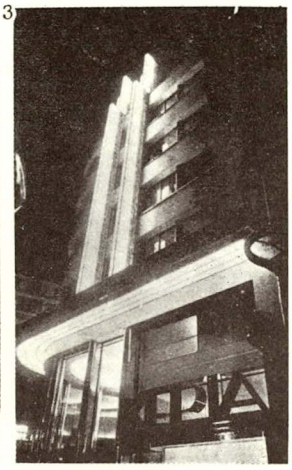
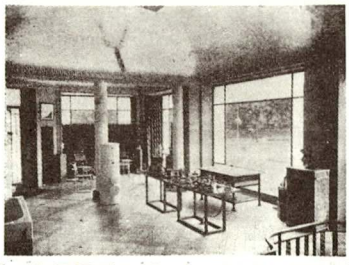
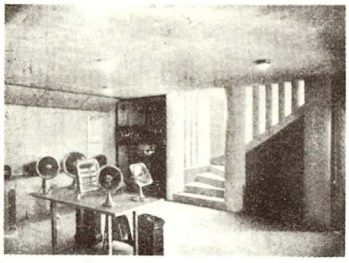
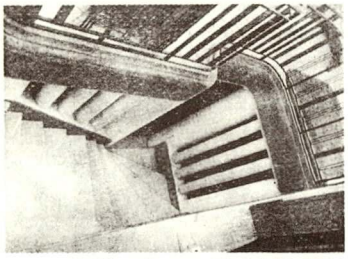
工學博士天沼俊一氏稿「吉詳山正傳寺(下)」の第四十頁中挿畫第四十五圖は第四十六圖、又同圖は上下顚倒して居ました茲に訂正致します





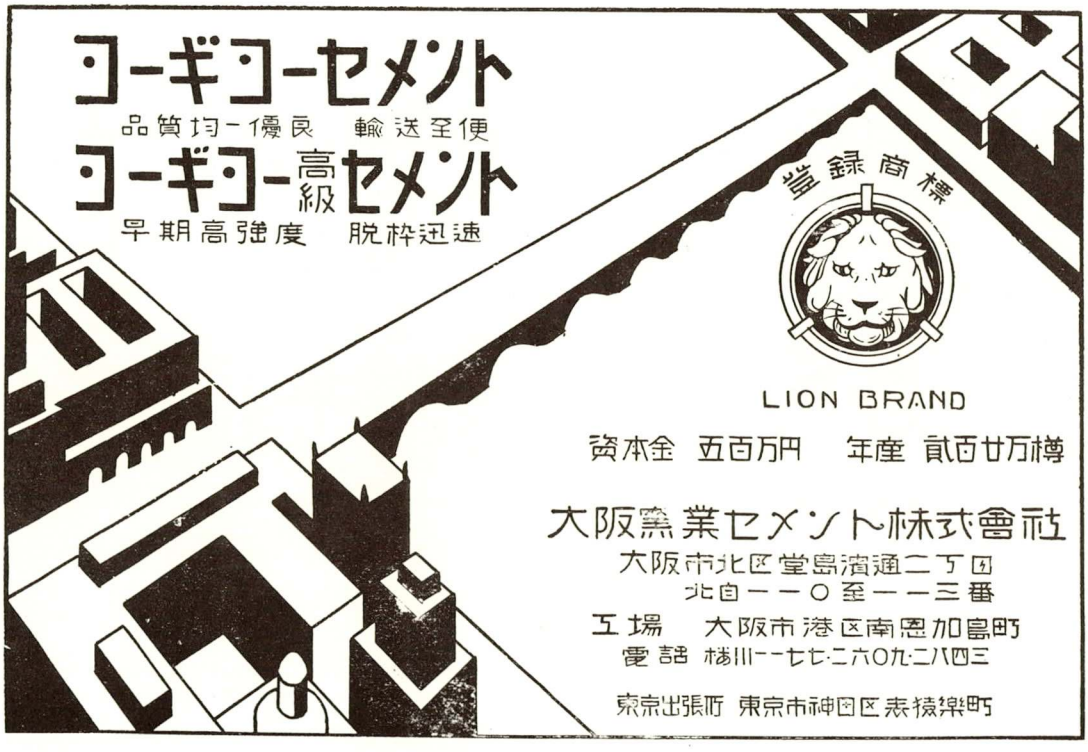
巴里 ゴーモン・パレス (映畫館)　　設計 アンリー・ベロツク氏



1—4 巴里ブルバート・デ・ジタリアン『ランマーブル・フオード』　設計 ルー・スピツツ氏
5—7 佛國シヤロン・商店 ラ・グロスン　設計 マロー＋アンドレ兩氏

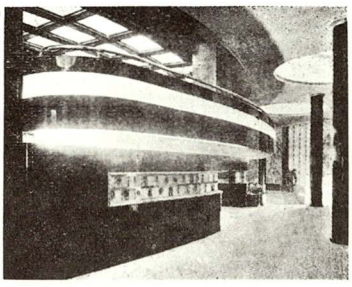
切　取　線

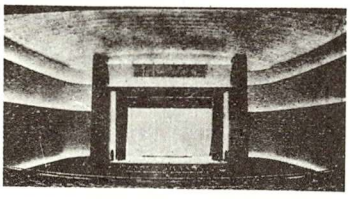




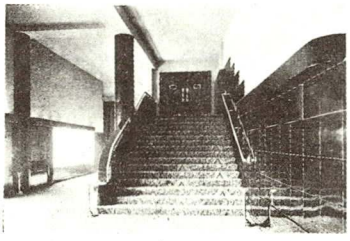
1


2

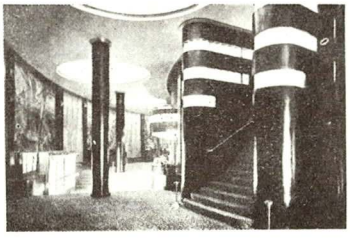

5



3



4



6



巴里　ゴーモン・パレス(映畫館)　　設計　アンリー・ベロツク氏

切　取　線

新刊　日本趣味を基調とせる　最近建築懸賞圖集　定價 70錢 稅 10錢

新刊　世界最新建築圖集　定價 50錢 稅 8錢

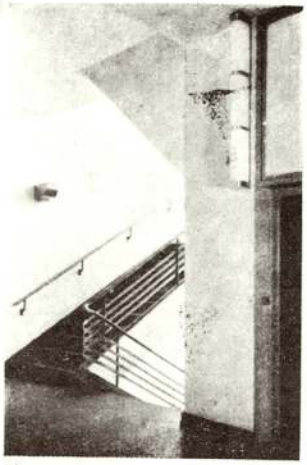
補增三版　學校建築圖集　定價 100錢 稅 18錢

婦人と住宅知識　定價 100錢 稅 12錢

社團法人　日本建築協會發行　大阪西區大同ビル720 振替口座大阪39975　賣捌　丸善本支店 柳々堂書店









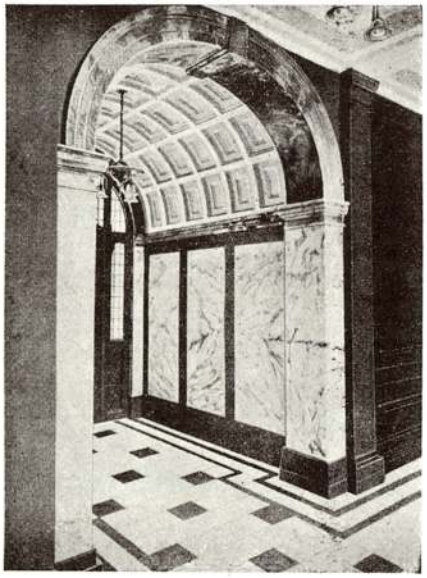




獨逸　スチユツトガルト　百貨店『ブロイニンゲル』　　設計　アイゼンロール+プヘニツヒ兩氏

切　取　線

DUNLOP RUBBER FLOORING





弊社製ゴム床敷は既に數多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御滿足御賞讃を得つゝあります。
御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御說明申上げます。

神戸市脇之濱
ダンロツプ護謨(極東)株式會社
各地出張所

ダンロツプ護謨床敷



獨逸　スチユツトガルト・商店











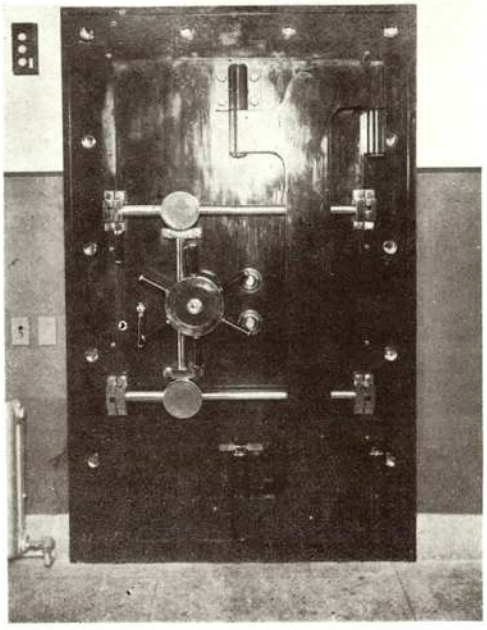


設計　フオン・リヒヤルト・ゲブハルト氏

切　取　線

純國産大谷式裝鋼金庫扉

寫眞は這般竣工せる安田ビルに御使用のクレンヒンヂ裝鋼金庫扉



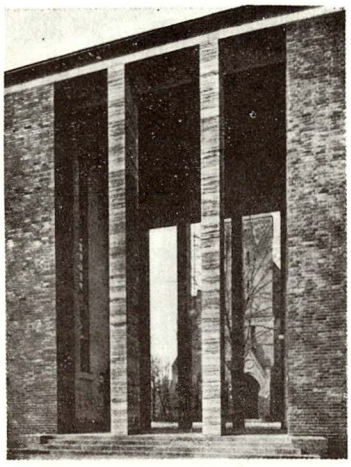
クレンヒンヂ金庫扉
セーフデポヂツトボックス
日金庫室鐵扉
課輕量金庫
業ベント式金庫
務御眞影奉安庫
鋼製保管庫
手提金庫

最近の重なる納入先

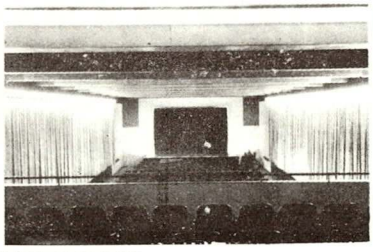
安田ビルデイング	十ケ所
朝日ビルデイング	四ケ所
第一銀行京都支店	二ケ所
大垣共立銀行長濱支店	二ケ所
姫路銀行本店	三ケ所
兵庫縣農工銀行加古川支店	二ケ所
朝鮮銀行靑島支店	二ケ所

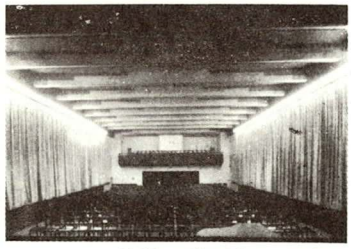
大阪市東區平野町二丁目(堺筋)
株式會社 大谷金庫店
東京 京都 神戸


1


2


5

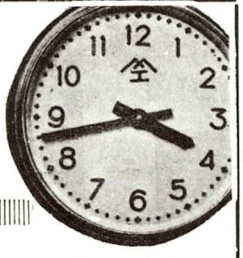

3


4

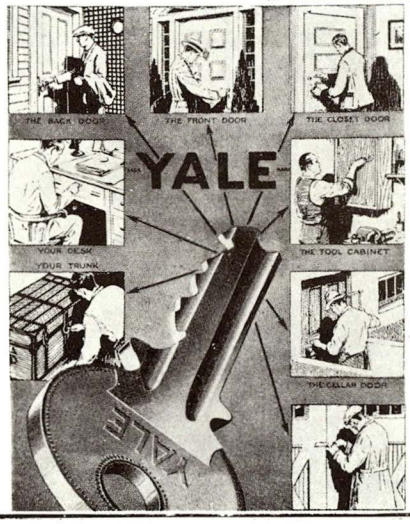
獨逸　ベルリンーステーグリッツ　新教教育院及會堂　　設計　ザルビスベルク氏

切　取　線

『國産』　大阪　合資會社　藤田工業所製
磁石式千歳型電氣時計
特徴　磁石式ニツキ電池ノ必要ナシ
運轉費用輕微
時間絶體正確



YALE & TOWNE MFG CO, U. S. A.



高級建築金具類

總代理店

御新型錄次第中越呈送

株式會社　安宅商會機械部
ホーン株式會社

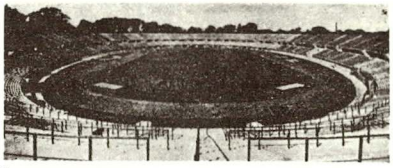
本社　大阪市東區今橋五丁目十四番地
電話本局 1509-12, 3275-76, 3912-13

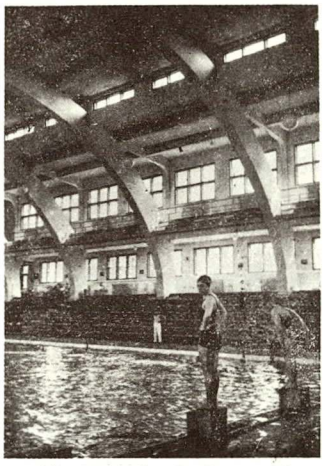
支店　東京・名古屋・大連・京城
博多・紐育・倫敦

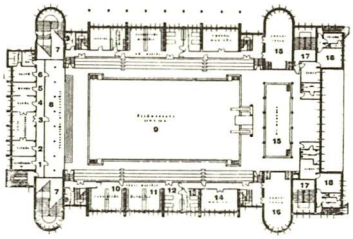

1


5


6 9

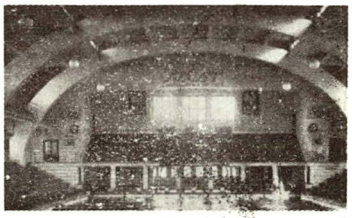

2


7


9


3


4


8

1—5 墺國ワイーン　スタヂオン　設計　シユパイツエル氏　6—9 ハンガリー・ブダペスト・水浴塲　設計　ハヨス氏

切取線

最新發明　防水工事界之革命

專賣特許

セメファルトプライマーに就て

發明者　阪口芳三郎

防水工事の施工に際し從來アスファルトをコンクリートに完全に密着せしむるにはアスファルトプライマー（アスファルトを輕油等にて稀釋したるもの）をコンクリート面に塗布しこれに依りてコンクリートとアスファルトとの密着を容易ならしむる方法を採り來りたるも該方法は某國人の有する特許權（特許第四八六三號）に抵觸するものにして識者の等しく患ひつゝある處なりしが發明者は此コンクリート面にアスファルトプライマーを塗布する事の前述の如く既特權に抵觸する事は吾が國防水工事界にとりつて由々しき問題なる事に留意し何等該特許權に觸れずして爾一層有効且つ施工簡易なるプライマーを發見する事に努力し遂に今回優秀なる理想的プライマーの本邦獨自最初の特許權を穫得するに至れり。

次に從來のアスファルトプライマーは次の如き缺陷あり。

1、コンクリートが完全に乾燥せざる場合はこれに塗布する事を得ず即ち水氣の爲浮上りてその用を爲さざればなり。（施工能率低下）

2、アスファルトプライマーは塗布後猶相當時間の經過を待たざれば防水工事を施工することを得ず。（施工能率低下）

3、アスファルトプライマー塗布後防水工事前に於て降雨等ありたる時は洗ひ流さるゝ處あり。（膠着性不足、防水能力不備）

4、コンクリートとアスファルトとの密着甚弱し。（膠着性小）

セメファルトプライマーはアスファルトと最も完全に融合する特性を有し且つ以上の缺陷を補ふべく案出せられたるものにして次の特徴を有す

1、特性　コンクリートに水氣あるもアスファルトを完全に密着せしむ。

2、施工能率の增進　塗布後一時間內外にて防水工事を施工することを得。

3、防水性　セメファルトプライマーはそのもの自身にて大なる防水能力を有するを以て塗布後降雨等の爲絕對に洗ひ流さるゝことなし。

4、膠着性　セメファルトプライマーはコンクリート內部へ迅速に浸透し、且其上に塗布したるアスファルトと强く結合する故にコンクリートと防水層とを完全に膠着するものなり。

5、施工簡易　セメファルトプライマーは淡精なる液體にして乾燥早きが故に刷毛引きにて施工最も簡易なり。

別途使用

1、本劑は防濕防蟲の特性を有するが故に建築物床下等に塗布すれば衛生上最もよし。

2、右の外（糊が非常によくつく）の特性をも有する爲リノリウム下塗用として最も推賞さるべきものなり。

發賣元

工材社

本社　大阪市西區京町堀通一丁目四〇番地　電話土佐堀五八〇九番

出張所　東京市芝區南佐久間町二丁目三番地　電話芝二五〇六番

建築工事の計劃と實施

（4）

渡部圭吾

5　原價計算（つゞき）

次に原價計算の意義を説明するに代へまして簿記との區別を述べます。即ち簿記、はある一定期間内の種々なる勘定を借方と貸方とに區別して商取引を明示するがために記錄する方法であり、原價計算は一つの建物又は一つの作業に要した材料及作業の單位數を記錄する方法であります。これらの作業及材料の單位數は賃銀又は價格によつて指示することもあるし、指示しないこともあるのでありますこれは原價計算の目的が材料や作業の無駄をなくしやうとすることにあるのだから簿記のやうに金錢の支出を記錄することを必要としないのであります。併し以上の如き區別は是を中心としてよく議論せられるところであります。何れにしても原價計算の意義は大體以上の通りでありますが實地適用の場合は外國の例を習ふなり、新たに考案するなりして、吾國では未だ完全に實行されてゐない、此制度を請負業界にも完成させたいと思ひます　この原價計算は、ある目的の下に工事に關する總てを系統的に記錄することから出發しなければならぬものであるから、材料費、勞力費、設備費および間接費等の記錄は簡單にして而も明瞭な方法によつて記錄しなければなりません。記錄に當つては多くの手數を要するものであつてはならぬのであります。例へばある工事の材料を記錄する場合は、納入期日、檢收月日、材質の程度、數量、殘高等漏れなく記入し得るものでなければなりません。尚この記錄は之れによつて使ひ過ぎ、紛失、盜難等も直ちに發見出來るものでなければなりませぬ。又現在の請負人がこの近代的な原價計算の方法を採用しても、よく失敗するので吾々の工事にこの方法は向かないといつてをる者もあるが、それはこの新しい考へ方に原因するのではなくて、これに當る能力がなく且成し遂げやうとする氣力がないからであります。

6　豫算統制

豫算統制とはa、工事に影響する色々の條件を考へに入れて計劃を立て、この計劃を實行豫算に表す。b、この計劃と實行豫算に基いて之れを實行し、c、この實行豫算と實行の結果たる實費即原價とを比較して、その成績を判斷してゆくのであります。簡單にいへば、豫定と實際との比較であります。こゝで私の豫算統制といつてゐるものは豫算の實行と照査とを意味するのであります。

豫算統制に當りまして、よく論じられますのは固定費と不定費との關係を如何に取扱ふかの問題でありますが、今日直ちに實行に移らんとするには現在行ひつゝある實行豫算の形式を踏襲し、之れに從つて原價を計算し比較照査をするより外はないのであります。たゞこの方法によりますと始めに原價を少くするために豫定の工期を遲らした場合に後に契約せられた各作業は甚しく高き原價となることがあります。此場合には正しき原價計算をなすことが出來ぬやうになるのであります。故に請負工事にては始めに定めた工程に基いて實行豫算を立て、工程に合致しなかつた爲の後の工事の實行豫算の超過分は、その程度に應じて始めの工事の原價に割りかける必要があるのであります。一般の固定費も、もし始めに決定した工程より遲れる場合には之れ等の費用もその遲れた原因たる作業に當然割りかけらるべきものであります。尚その内容の分類や方法については今後に十分研究しなければならない問題であります。

豫算の實行は其衝に當る係員と現場主任とが主となつて管理活動

の標準たるこの豫算と首引で實行に當らなければならないのであります。實行に當りまして何うしても實行不可能な事を發見した場合又は更らに減額し得ることを發見せる場合には更に研究調査の上、修正しなければならないもので、之れを押通すために無理や無駄をしてはならないのであります。これが先きに實行豫算は彈力性をもたねばならぬと申しましたところであります。尚此場合には豫算編成者にも一應協議することが必要であります。

豫算實行中又は實行後に於ては原價計算や簿記計算によつて比較照査をしなければなりませぬ。これによつて豫算全部を通じましての係員の努力の如何と豫算作製上の弱點を知り得らるゝのであります。原價計算は必らずしも全工事に渡つて調査しないこともありますが豫算統制にをきましては常に全工事について照査することが必要なのであります。

豫算實行を本店に於てなす場合には之れを照査するために報告が必要であり、この報告は定期的に作成せしめ『報告せしむることもあり、或は現場に於てこれを作成せしめ』定時に出張して照査することもあります。何れにしても凡ての內容をはつきりと見詰めつゝ仕事に從事せしめ、且實行豫算に弱點がある場合には早く發見して破綻を未然に防止しようとする所に合理性があるのであります。

7　檢　査

施工者の立場から見た檢査は、單に材料や仕事を檢査するばかりではなく、之れを監督し更らに遂行させることをも含むのであります。故に時期から見ますと工事途中の檢査と仕上つた後の檢査との二があります。殊に作業半ばにして檢査することは進行を順調ならしむるために肝要なことでありまして、此機能を完全ならしむるためには先見、大觀、洞察の力を必要とするのであります。中途の檢査をしようとする場合には、作業ならば始めに工程、標準となるべき仕上りの見本、作業方法及設備等をも協定してをかなければなりません。材料ならば納入工程、見本、檢査方法等をも協議し決定してをかなければなりません。かくして檢査の場合には、工程通りに進行してゐるが、見本通りのものが出來てゐるか、標準作業方法や設備によりつゝあるかを檢査するのであります。もし工程通りに行つてゐないならば其理由を追窮して原因を明かにし更らに工程を作らしめ、作業方法が標準通りになつてゐない場合には改めさせるのであります。其態度や方法は命令と指圖の項で述べた通りでありますが、常に心から親切でなければならないのであります。又相手によつては誠意のあるものもあり、ないものもあります、誠意や熱意があつても能力がないものもあります。故によく調査研究し更に周圍の狀況を洞察して緩急宜しきを得た對策を講じなければならないので、こゝが先見、大觀、洞察の力を働かせなければならぬところであります。そして最後には些少の缺點もない樣に努めねばなりません。次に一例としてタイル檢査の方法を述べませう。タイルの形態檢査には俗にバカ型と稱するものを作らせ、之れによつて歪みの程度や寸法を檢査いたします。色調の檢査には、許可された最高最低の二種を選び、之れを標準として檢査するのであります。硬度は許容され得べき最低限度の見本により標準槌による打音によつて檢査するのであります。工程に關しては成型より燒成釜出に至るまでの工程を作成せしめて絕えず追窮するのであります。尚運搬方法、包裝方法及運搬材料工程をも同樣にして檢査するのであります。

8　報　告

報告は報告すべき理由と目的をもたなければなりません。報告を受くる人はその報告によつて事業を統制して行く資料にするか研究の資料にするものでなければなりません。もしこれらのものが資料とならないものならば報告せしむる必要がないのであります。所が何處の會社に行つても重役宛の報告が山積してゐて、重役が會社にくると直ちに錄に目を通さずに捺印して行くのが普通であります。後で『これこれの事は報告してあるが如何とり計ひませう』かと尋ねた時には『イヤ知らん』と言ふのが普通であります。これは勿論重役に知らすべき必要がなかつたも

のでもありませうが、凡ての書類を重役が見なければならない様にしてをる仕組がいけないのであります。報告は見せる必要なところまでにて止めるやうにするのが合理的なのであります。現場から出さなければならない報告はその會社の組織によつて異ることは申すまでもありません。小さい請負人で主人それ自身が現場主任であるやうなところでは報告もなにもいらないのであります。つまり大きい會社で而も中央集權的な會社なれば他に比して餘計に報告が必要なことになるのであります。また報告は可なりに手間のかゝるもので面倒なものになると一日や二日では出來ないやうなものもあります。殊に昔風に文章に書き綴つてゐたならば大變時間を要するものであります。故に

一、あまり必要でない報告はなるべく省略すること。

二、報告は必要以外のところまでは廻さぬこと。

以上、盲目判を押させるための報告は廢止することであります。

三、報告は表または圖表式とし、單に必要な數字や文字を入るゝに止めること。

四、文字は凡て記號標識法を採用すること。

以上は手數のかゝる報告は凡て單純化することであります。かくして本社宛に報告する定期、または不定期のものも事務能率增進の爲には凡てを改廢すべきもので、尙便箋封筒の型式や書式等も今日獨逸で規定してある様に單純化し、標準化しなければなりません。また控へを殘すことも必要であるから復寫式または青寫眞式とすべきものも必要であります。又圖覽式として差支ないものもあります。現場に於て係員より主任に報告すべきものはパンチ式または青寫眞式のものが最も適當であります。然し悉くをかゝる形式とすることは六つかしいもので、どうしても文章式によつて報告しなければならない事もあります。要は現場に於けるビジネスは凡て事務的で、簡捷でなければならぬことを申上ぐるのであります。（完）

★　★　★

大阪都市計畫地域一部變更（第二回）に就いて

加藤善吉

一、變更の理由

大阪都市計畫の施設として市街地建築物法に依る地域は、大正十四年三月決定し同年五月一日より施行せられて來たが、其の後東成、西成兩郡の市域編入のことあり、又十放射線路事業と高速度軌道の計畫及び、第二次都市計畫として街路、運河、公園、墓地の決定等幾多の都市計畫施設の實現を見たので、之等に順應するために全般的に考察して既定地域の一部を變更せられたのであつた。其の變更は昭和五年四月內閣の認可を經て同年七月一日より施行せられて居る。

然るに今回更にまた局部的に變更の必要を認めたのは土地の現狀の變化と將來發展の趨勢を充分考察してのことである。其の位置は東成區野江町、蒲生町、巽町の各一部未指定地と北區東野田町、澤上江町、善源寺町の一部住居地域とである。前者は東南一體工業地域に接し、殊に南は鯰江川及寢屋川運河を控へて居り、而して鯰江川は失業救濟事業として市に於て目下改修工事中であり、寢屋川は都市計畫運河として決定以前より改修工事に着手し、護岸整理工事は殆ど竣工に近き狀態にて、之等二運河の改修成るに於ては舟運の便益々加はるを豫想せらるべく、之等の利用上よりして更に北方に工業地域を擴張するを適當と認め

られたのである。後者の住居地域は今や鐵道縱橫に通し、殊に淀川貨物驛は、設置當初は、梅田驛改築に當つて貨物の輸送に支障を來し易きがため之れを補助する目的で設けられたものであるが、今日に於て運輸の系統上將來共存置するの必要を認められるに至つた結果、併せてこの附近一帶は喧噪を極め、住居地域の特質を失ふに至つたので、之等兩者一體を包含して工業地域に變更し、工業地として發展せしむるを適當と認められたのである。之に伴つて路線的商業地域の一部をも工業地域に變更せられたのである。それは工業地域内に於ける路線的商業地域は、路線に沿ふ工業地域の同路線の活用を十分ならしめない結果を齎すがため、原則として工業地域内に路線的商業地域を指定せない方針であるから其趣旨のもとに之れを變更せられたのである、其區間は都市計畫天滿蒲生線中同蒲生生江線起點より森小路大和川線交叉點に至るところである。

二、變更前と變更後の各種地域面積の比較

前記の如く今回變更せられた各種地域の面積とその割合を舊地域に對比すれば概略左の通りである。

地域別	變更後面積（坪）	全國有二對スル百分	變更前面積（坪）	全國有二對スル百分	百分比	比較
住居地域	約三〇、〇一〇、〇〇〇	三〇・八	約三〇、一〇〇、〇〇〇	三〇・九	〇・二	減
商業地域	約九、一九〇、〇〇〇	一四・一	約九、二〇〇、〇〇〇	一四・一	—	
工業地域	約二四、三四〇、〇〇〇	三七・三	約二四、〇四〇、〇〇〇	三七・〇	〇・三	增
未指定地	約二、五八〇、〇〇〇	一七・八	約二、六八〇、〇〇〇	一八・〇	〇・二	減
計	六五、〇一〇、〇〇〇		六五、〇一〇、〇〇〇			

三、指定の經過と施行

今回の變更は種々な調査研究を遂げた後昭和六年二月十一日内務大臣に内申し、同年七月十二日都



地域變更略圖

凡例
- 住居地域及未指定地を工業地域に變更せられたる部分を示す
- 路線的商業地域を工業地域に變更せられたる部分を示す

市計畫大阪地方委員會に附議せられ、同委員會は愼重審議の結果之れを議決して答申した結果、內務大臣は之れを決定し、昭和六年十月三日內閣の認可を經て同年十一月一日より施行せらるゝことゝなつた。

其の地域を表示した地域圖は大阪府廳に備へ置き縱覽に供するのである。左に變更した部分の略圖（四六頁下段挿畫參照）を示す。

四、地域變更地町名

變更せられた範圍の町名は東成區薄生町、野江町一丁目、同二丁目、同三丁目、巽町の各一部。北區菅原寺町九丁目の一部、澤上江町六丁目、同七丁目、同八丁目、同九丁目　各一部と同十丁目の全部。東野田町六丁目、同七丁目の一部と同八丁目の全部とである。

五、變更地の面積

住居地域を工業地域に變更せられた部分の面積は　約九萬坪

未指定地を工業地域に變更せられた部分の面積は　約十萬坪

商業地域（路線的）を工業地域に變更せられた部分の面積は　約壹萬坪

其の合計面積は　約二十萬坪である。

六、今回の變更と市街地建築物法施行令第三條の二の關係

本條の關係に就いて前回變更の際既に本誌上に記述したると同樣につきこゝには省略することゝした。（昭和六、一〇、一四稿）

大阪城天守閣再建と豐公

德政金吾

自分が曾て堺筋の白木屋百貨店の建築をマネージして居た頃、其の屋上から大阪市內を見廻して、當時堺筋では三越に次ぐ大建築で可成自慢し得る建物であると思つた。

所が、大阪城の天守閣跡の高さは、丁度白木屋のパラペットの上部と殆ど同一である事を發見し、其上に五層樓を持つた當時の大阪城を想像して、自分の怜りの餘りに小さいのを笑ひ、同時に天守閣が再建せらるゝならば如何に偉大なる紀念であらうかと考へた。其後大阪府廳舍の骨格工事に關與して、近く其大阪城の結構を見て倍々其感を深くした。

吾々が汽車旅行の一顧に於てさへ彼の名古屋城と、白鷺城とは其都市に對する史的及美的目標に深いあこがれを覺ゆるのである。又船の旅で港に這入る前、水平線より空に聳ゆる背後の山とか塔とか又は天守閣とかのスカイラインを破る特異の目標が先づ吾々の注意を惹くのである。其目標が無意味でなく、又不恰好の物でなく、其處に歷史を聯想せしむる何物かゞ存するならば其れは詩であり繪畫である。

我大阪市の汽車より又船よりの第一印象に何があるか？　天王寺の五重塔か？　新世界の彼の鐵塔か？　前者は餘りに小さく後者は又餘りにも史的美的要素を欠いで居る。では彼の黑い煙りを吐く數々の煙突か？　其は工業都市としてのシンボルとして相應しいものではあるが、全大阪を過去現在に於いて代表して好き第一印象を與へるには餘りに雜風景である。

◇

我が大阪が今日迄に發達するには仁德帝の昔より幾多の歷史を持つて居る。併しながら其確固たる都市の形體を定め、偉大なる城塞を築きて今日の基礎を作つたのは豐大閤の賜である。彼の明敏なる頭腦は、戰爭に依る破壞の回復は商業を奬勵するのが捷徑である事を看破して、而して又戰略的には皇城なる京都に居る事の不利を考へ、又外征上の見地より交通便利なる此淀川のデルタを撰んだもの

であらう。而して國内の平定と共に武人の心を和くべく茶道を奨勵した事、而して茶事に托して、當事の實業大家を大阪に招致した事は實に巧妙なる政策である。

次に博多に於ける當時の海外貿易商たる神屋宗湛の日記を拔萃して見る。

天正十四年 丙戌小春二十八日宗湛は上松浦唐津村を出立して同十一月十八日着京四條の森田淨因方に宿り同十二月三日に大德寺の古溪和尚に依りて法體となつた事と其他京都にて各所で茶會に列した事を記述して更に大阪城の大茶會を記して居る。

同天正十五丁亥正月三日大阪大城御城ニテ大茶湯之事。

正月三日寅刻ヨリ御城ニ罷出候時御門外ニテ宗及（京都の人天王寺屋と稱す）御取合ニテ宗易（利休）ニ始テ懸御目候也サソフロヘハ（サ候ヘバ？）大名小名カチ乘物ニテ出頭ノ體ヲビタヽシキ樣子也同卯刻ニ堺衆五人同前ニテ罷出也先廣間ニ各同前ニ罷居也奥ヨリ石田治部少輔トノ（殿）御出有テ宗湛一人バカリヲ御内ニ被召連御茶湯ノカサリ（飾リ）ヲ一通拜見サセラレ候　其後又本ノ廣間ニ罷歸ソレヨリシバラク有テ進物ヲ上致對面也ソノ後ニ堺衆五人也則參上候テ御カザリヲ拜見仕候ヘトノ御諚ニテ關白樣御跡ヨリ各同前ニ拜見仕候處筑紫ノ坊主ドレゾト　御尋被成候ヘバ是ニテ候ト宗及御申ニ候　被仰出ニハノコリノ者ハノケテ筑紫ノ坊主一人ニ能ミセヨトノ御諚ニ候條（注此大茶會ハ朝鮮出征ノ前ニテ宗湛ハ彼地情報調査ニ關與セシニハ非サルカト思ワル）堺衆ミナ緣ニ出宗湛一人拜見仕ソノ後又エンニ罷出シバラク御銚ヲ見申也又　關白樣御諚ニハ多人數ナルホトニ四十石ノ茶バカリニテハタラマイホトニソノナデシコト松花ノ茶ヲ今ヒカセテ各ニノマセヨト被仰出候ヘハ則松花ノ御壺ヲ宗易　撫子ノ壺ヲ宗及　床ヨリ持テロシテ御茶取出ソロテ又本ノ處ニナヲシ被置候テヨリ　御膳出候時我々トモハ罷立次ノ廣間ニ罷居候ヘハ　關白樣　御諚ニツクシノ坊主ニメシテクワセヨト被仰出候ホトニ　御前ニ罷出大名衆同前ニ御食被下候也　サソロヘハ多人數ニテ御座敷ツマリテ候ホトニ座敷マン中ニナヤ宗久ト宗湛トウシロヲ合テ罷居候其外ニハ京堺ノ衆トテモ一人モ御前ニ無之又御カヨイノ衆多人數ナリ其内石田治少御カヨイニテ宗湛カ前ニ馳走被成候事也

一、御茶ノ時ニ　關白樣御立ナガラ被成　御諚ニハ多人數ナホトニ一服ヲ三人ツヽニテノメヤ、サラバクジ取テ次第ヲ定ヨト被仰出候ヘハ内ヨリ長サ三寸ヨコ一寸ホドノ板ニ名付書テ小性衆持參ニ候御前ニナゲ被出候テ座中有之大名衆コノフタヲバイ取ニシテ其後誰々ハ誰カ手前〳〵ニト　サシヨラレテ御茶キコシメサルヽ時ソノツクシノ坊主ニハ四十石ノ茶ヲ一服トツクリトノマセヨヤト被仰出候ホドニ宗易手前ニ參一服被下候也井戸茶椀ヌルクタテラレ候又新田肩衝手ニトリテミセヨト御意ニテ拜見仕事宗湛一人。

御銚之事

一、チカイ棚

右

モヽシリニスヽ色椿入
長ソロリ　柳ニ入　ウス板ニスワル
左　珪璋　盆ニスワル

一、棚ト床トノ間
柱ニ　青磁ノ筒ニ水仙花入多ナリ
關白樣御手カラ也
床ノ御銚之事　巾二間ホドニミユル

一、晩鐘　前ニ撫子覆モエキノ金襴紅緒

一、青楓　前ニ四十石覆金地ノ金襴シメ緒紅

一、鴈繪、前ニ松花覆モヘキ金地ノ金襴シメ緒紅

一、是ハ臺子トノ間ニ此タナ臺子ノヤウニ有、脇ノ棚ニ　鏑無ニ白梅入テ薄板ニスワル

一、臺子

一、似茄子數ノ盆ニ同盆ノ内ニ象牙ノ茶杓乞紹鷗所持

一、白天目數臺スワル

緣桶引掛
胡桃口引掛合子引掛小褄釜紹鷗大皺ノ筒フロ切合
蓋置

炭斗　瓢簞　井戸茶碗
ヤセクリ毛ノ天目
棗　臺天目　柄杓指　合子
風爐釜

一、中臺子蓋置、緣柿　井戸茶椀
二ツ重テ　是ミナ金ノ道具也　宗無手前
炭斗ヘウタン　筋ミナ金

松本茄子内赤ノ盆ニ同竹茶杓珠得、
セメヒモノ釜フロキリ合芋頭紹鷗尼子天目臺ナシ
一、臺子　柄杓指備前モノ水覆龜蓋置
五徳、
塗天目ニ　茶筅入テ　宗及手前
炭斗瓢簞
新田肩衝　四方盆ニ　宗易
面白肩衝　四方盆ニ　宗無
一、臺子前三分、
初花肩衝　四方盆ニ　宗及
一、桃尻ハ　フクラニカラ草ノモンアリロヨリ下ニモ同モントカネノ色少アカメニアリ
一、ゾロリハ　カネノイロヰカニモ青クヌレイロミユル内ニクロメナル心アリ紋ナシ
一、珪璋盆ハ　黒キ内ニシタイロノヤウニミユルハタニホリ有リザクロト承候ホリニアトナシ
古ク丸目メナリ外ハグリ〳〵ナリ大サ八寸ホドニミユル
一、鐘ノ繪ハ　上下モエキノ金襴中コンノ金襴　一文字風體丹色　露丹色　詩奥ニアリ　四字ノ中ノ通ニ角ニ印一ツアリ紙内立一尺一寸五分　横二尺九寸アリサウケ切軸也
一、青楓ハ　紙ノ内黒ク古シテ不見詩ハロニアリ印三ツ有ト承候ツミユル兩軸ヨリ紙ノ内セマシ上下モエキ金襴中白地金襴モンハテツセン花一文字風體紫也臺白シザウゲ切軸
一、鴈ノ繪ハ紙ノ内鐘ノ繪ヲナシ表具モ同露アサギ也ヂクハ三幅トモニ象牙ノ切軸也
一、撫子ノ壺ハ土アラク赤黒メニ腹ニコゲノ如クニムサ〳〵トシタル物アリ　藥青黒メニシテ星ノヤウナルモノ有少カタフク覆モエキノ金襴シメ緒紅ナリ。
一、四十石ノ壺ハソト下ブクラニシテ赤クアラメナル土也細クハラノヤウナルモノミユル藥青茶メニ上藥ニコキ處アリ藥ノ内ニ星ノヤウナルモノミユル三ツ内ニテハ一ノミトナル壺也覆モエキノ金襴シメ緒紅也。
一、松花ハ　下ボソニ赤細クシテ白ラケ色ニ藥キメニアリ上藥コキ所モナク　覆モエキノ金襴シメ緒紅ナリ　三ツトモニシメ緒ユイヤウ同
一、御振舞スギテ　種々　御雜談御立ソロテ也
一、關白様　御衣裳ハ上ニ唐織ノ御小袖也五ツムネニ下マテミナ上ノエリ同上ノ御道服ハ白キ紙子ボケノウラ也御帶紅ナリ　イカニモ長シテ一方長クムスビ　御ヒサノ下マテニアリ　御グシニハモヘキノシヽラノクヽリ頭巾御髪ユワセラレズニ御小袖長メ御足ミエズ
一、似茄子ハ　藥赤クアメイロニクロク其内藥ムラ〳〵也
一、松本茄子ハ　少ホソ高ニシテ上藥似ヨリハクロメナリ口ノ比ハヲナシ
一、新田ハ　肩サノミツカスムツクリト有ナタレ二ツ面ニアリウラニモアリ藥八ケ高ニ帶ミエス底ハ糸切也ホソキ石二三ツアリ土青メニ上シラケニアライ立タルヤウニアリ口付ノ筋三アリ一ツハクビノ下也クビタチアカル也
一、面白ハ新田ヨリドウハル骨高也口ノ樣子ハ二ツ田ト同ヤウニミユルクビ立ノバズ土ハ黒メニ赤キ心ニ有藥クロメ也肩モサノミツカズナデ候ヤウ也
一、初花ハ　口ハ新同シクビ少ツマリカタフク也　ソト下ホソキヤウニミユル土少クロメニ白ケタリ但新田ノヤウニハシラケズ新田ヨリクロメ也下藥ハクロク黄メニ上藥兩方ニ雲ノヤウニシテ一所ニヨリテ土ノ上ニナタレテ一ツアリ口付ノ餝アリ帶アリ
一、數ノ盆ハ　推朱也外ハカリホリ有足ノ高二三分大サ六七寸ホドニミユル
一、緣桶ハ　銅也友蓋也葉ノ樣ナルモノ打出也
一、合子ハ　宗澈所持ヨリハカサニシテ底丸入ニ見ユル口ノ樣子ヲナシ
一、胡桃口　カネノ色ゾロリヨリハ黒メ也紋ナシ下ニ高キ筋アリ口ノ樣子ナゾ八形ニ悉切置也
一、小覆ノ釜ハ　アラレホソク鬼面也煙返アリ
一、芋頭ハ　及(宗及?)所持ヨリハホソメニミユル樣子ハ同ジ土モヲナシ
一、セメヒボノ釜ハ　口四寸ホド同高五分ホト貫付四角ニヤウルモノ也貫ハ鐵
一、白天目ハ　土クロク藥黒クシテ上白キ心ニミユル

一、アマコ天目ハ　葉土クロミナ
　リナトハ同ジ
　大阪ニテ
右三日朝　御城ニテ大茶湯過テ。
書
一、宗久老　御振舞
　宗凡、道知、宗惠、宗衍、宗湛
　五人。
　以下略

◇

以上の日記は記述簡單であるが、流石茶人の記述丈けに要領を記し而も其光景は言外に躍動して居る。第一に城外の光景を述して居る。正月三日の寅の刻と言へば、午前三時である。無論提燈を付けて參つた事であらう、城門外は高張提燈警固の武者も立列んで居る。其處で定紋を目當に宗及老人の紹介で初めて利休に面會する。其處では諸國の大名、小名、無論西國の毛利、小早川、譜代では加藤、福島の猛者、東國よりは德川、蒲生、北國よりは前田利家、其他有名無名の士が城門の內に忙しく消へて行く有樣が想像さるゝ。其內、夜は白々と明けて來る、待合せる堺の五人衆も揃つたので同前で登城する。第二場は廣間の光景である。時は未だ明け切らぬ朝。高い天井、金襖は燭臺の火に耀いて居る。綺羅星の如く着座して居る大名達、其處へ下手から靜々と五人衆宗及宗湛が出て來て、下手よりに着座する。大名の目は一せいに此見做れぬ、猛々しい法體に注がれる。其處へ奥より白面の石田三成が忙しく立て來て。宗湛を呼び特に一人丈けを奥へ道具拜見に案內する、驚異の目を見張つて居る大名の前を通つて。少らくして宗湛は歸て來る。而して持參の進物其れは珍らしい唐物であらうを献上する。

やがて、其處へ唐織の小袖の上に紙子の道服裏は紅裏の着物を着、紅の丸ぐけの帶を前結びに長く垂れ、洗髮の上に紅のくゝり頭巾を被つた豐太閤が、三成を從へて立ち出で無雜作に上手に着座する、列座の大名及堺衆一同平服する。對面終つて太閤は氣輕に自ら立ちて。御道具拜見に案內する。立ながら『柴紫の坊主は何處に居るぞ』と呼び給ふ、宗及は直に宗湛を紹介する。豐公は色々宗湛に好意を示す、食事の時も大名同樣に扱ふ。豐公が主人役として三成や利休に色々指圖して居る光景は、豪腹の內に細心且つ人心を收攬する呼吸が此日誌の內に溢れて居る。茶の湯の混雜を防ぐ爲め籤引をさせる所、而して犬名が無邪氣に其籤を奪い合ふ有樣なぞ面白い光景を書いて居る。

其後の記事は茶器や掛物の模樣を細々と記し居るが、是は又當時の美術品を知る好き史實である。

◇

以上の記述に於いて、如何に豐公が當時の實業家を好遇せるかを察知する事が出來る。而して斯の如き方針はやがて大阪城下を一大商業地に導く原因を爲した事は明白なる事實である。

豐公が尾張の中村の卑賤より起つて遂に天下を統一し餘力を海外征服に及ぼしたが、天壽は其偉業の完成を助けず、德川三百年の退嬰政策は潑溂たる大和民族の發展力を抑壓して世界の進步に落伍した事は、甚だ遺憾の極みであつた。乍併維新の大業は今日吾人をして世界の第一列に伍せしむるに到り豐公の創業は今日の大大阪市の實現となつたのである。

大正十四年、自分は一時大阪を去るに當り實業興信所の記者の大阪に對する希望條件を求められたに對し、平常抱懷する所の大阪城の天主閣再建の必要を述べて其意見を同雜誌に發表した。

過る　御大典の紀念として何人かの提案か又は關市長の創意かは知らないが、天主閣再建を思ひ定めた事は、吾々大阪市民は市長に深く感謝すべきである。勿論一部には無用の企てなぞと反對する者もあるが、其れは反對の爲の反對か、或は又實利の外に美術や歷史の存在を知らない人の言である。

生産もしない、又病院にもならない天主閣は、實利的に言へば無用の長物であらう。併しながら、其れは戰亂を平定し、國家を統一して實業都市を建設する目標である事を自覺したならば、恐らくは何人も反對なく、市民と共に其再建を祝福するであらう。

因に宗湛日誌は故益田孝氏の非賣版である、宗湛茶席は福岡市平岡邸內にあり又其寫しは自分が昨年有馬に建てた湛心亭である。自分は天守閣再建を豫言して其實現を見た。將來鹿兒島縣下の奄美大嶋に日本最初の國土の紀念碑即ち子の一木が建設さるべき事を豫言して置く。

復興大阪城天主閣に就いて

大阪市建築課長 富士岡重一

復興の大阪城天主閣は曩古の昭和御大禮を紀念する事業として大阪市が計畫したるものでありまして、豊公盛時建立に係る舊觀に復する五層にして八重の大天主閣を再建せんとするものであつて、之を鐵骨にして鐵筋コンクリート造りなる最新科學構造の粋なる築造法を以つて築き上げたのであります。之を天正時代、豊公創設の舊觀に復せしむる爲めには此の時代の天守閣にして現存せるものを廣く調査いたしまして資料を集め、又一方では最も準據すべき史料たる彼の有名なる黒田侯家に秘藏せられある元和役の大阪陣の繪畫に豊公建立當時の天主閣の大觀が存せられるものがありますので之を以て最も採つて據るところといたし、現代工學の技能を以てせる前申す鐵骨造り鐵筋コンクリートの高閣を建築したるものでありまして、此度大阪市の東方に忽如として盛り上りたる一大建物として豊公時代の天主閣が再び現はれたのであります。此の閣内は之を大阪鄉土史料の展覽場に充て時に特別の展覽會を催す事もあり、開閣當初の十一月には秀吉と最も關係の深き品物を集め豊公展を開催する事となつて居ります。

ところで此大阪城の新天主閣に就いて說明いたします前に、少しく城の歷史と云つた樣なものを申し述べる事にいたします。

城郭の歷史

平安時代より室町時代にかけての中世期時代にては、社寺が唯一の堅牢な建物であり又同時に宏大なる一郭を占めて居つたために、戰時に際してはしば〳〵武士の爲めに城郭として使用せられた事がある。しかし中世期の城郭なるものは、領主の居館の附近にある天險の地に壘又は柵を設けて敵の攻撃を受けた際に之を臨時の城郭として使用し自家一族の防禦に備へたものでありまして、その規模は小さくその目的も亦對内的のもので、近世の城郭の如く政治的、經濟的意味をもつ事はない、從つて領主の居る館は之とはなれて山麓又は平地に建てられるのを普通としました。

安土、桃山時代の近世の城郭となりますと、戰國時代の彼のはげしい戰ひと新兵器なる鐵砲の出現は築城術の進歩に格段の進歩を促し、城郭は益々堅固なるものとし鹿柴は石壘にかはり、木造の高櫓は塗りごめの天主閣に變つて來たのであります。又茲に特筆すべきは壯大なる天主閣が出現したのであります。此の桃山時代なる天正から慶長にかけては諸侯の築城するもの多く、壯麗なる天主閣を中心とする大規模な城郭が續々とき そつて造營され、茲に築城術の發達はその頂點に達したと云ふ事が出來るのであります。前期に於ける城郭は戰爭のみを目的とする城塞として臨時に築かれたものであるが、近世に入るに及びては築城術の進歩すると共に築造に便利なる平地に築かれる樣になり壯麗なる天主閣を建設し、城内には領主の居館を設け政廳を置き大なる城下町をも構成して、茲に軍事的の意味以外に政治的にも又經濟的にも意義あるものに到つたのであります。

次で德川時代になつて天下平定するに及んでは戰亂もをさまり築城の必要もなくなると共に、幕府は武家諸法度なる法令を出して嚴重に諸侯の築城は勿論その城の改築をもやかましく禁止したので、德川氏以後は特別の例を除くの外は諸侯の築城を行はれなくなつたのであります。

大阪城天主閣復原の資料

大阪城は天正十一年九月秀吉命令を諸侯に傳へ、令を天下に布き、三十餘國の人民を發し巨石良材を献上せしめ、大いに工を起し城郭は大體同年十一月竣成し、其後繼續して十三年に至つて大成したるものであります、秀吉の右筆であつた大村由己の誌せるところの秀吉事記によれば十一月には天主の土臺が落成したるものゝ如くであります、又其當時本邦に駐在せる耶蘇會教師フロイスの報告には「秀吉天正十一年より日夜三萬の人夫を使役し工事の進むに從ひ之を二倍し三年以上を費して完成したり」とあり、又「城壁は頗る高大にして悉く石を以て疊めり……矢倉及城壁は其高大なると瓦に金箔を施せるとにより遠距離より望見し得べく此外城内に著名の建築物多し」といつてあり、城は本丸、二の丸、三の丸に分れて本丸の殆んど中央に天主閣があり、天主は五層と稱せられるがこれは外觀上五層に見えるものであつて、内部の層階は八重であつたものゝ樣であります、又天正十三年十二月吉川經安の消息に、小早川隆景及吉川長元が秀吉の案内にて天主に登れる狀を語り「彼大天主並御成間是又關白樣御案内にて見せ被申大天主は八重にて候不及言語事候」とあり、當時の最大の天主としては、安土、桃山と大阪との八重又は七重を以て最大のものとされたのである。又大阪城天主閣につき最も貴重なる參考とせらるゝは黑田侯家所藏の大阪陣屏風繪である、其大さ縱四尺九寸六分、横十一尺九寸五分にして、黑田長政が大阪陣後に命じて畫かしめたるものと傳へられ、此筆者につきては二說あれども、大阪陣に從軍したる人の筆である事は疑を入れざる事であつて大阪陣後間もなく畫きはじめ、長政の歿したる元和九年八月以前に出來上つたものと考へられて居るのである、圖は本丸の所で、夏の陣即ち元和元年五月七日の戰況の一部である、これに見れば天主閣は五層の建築で、二重以下は塗込となり、五重には勾欄あり、勾欄の上に鶴、下に虎の金の彫物あり瓦は總て銅にて棟には金の鯱あり、右方なる大建物は所謂千疊敷である。要するに大城は秀吉が天下に號令する根據地として大規模の築城をなせるものであるから、其天主も信長の安土城に倣ひてしかも之に勝れるとも劣る事のない壯大なる建築を興せる事は明かである。たゞ安土にあつては信長は天主内に居住して居たので室内の裝飾や繪畫等も又美麗を極めたるものであつたが、大阪城にあつては天下は已に大平の氣運に向ひたるが爲めに秀吉は此の天主を平常の居住の所となさずして、財寶等を貯藏する所に之を充て、居住に用ひたるところの他の殿舘に大に裝飾を施したのであります。即ち天主閣は必要の時に當りて登臨し遠望し、又籠城の時にのみ居住するものとされたのであるが、外觀だけは尚最上層に勾欄を廻らし、彫刻物を飾りつけ之に金色の粉飾を施したものであつた事は屏風繪式は史實によつてよく見る事が出來るのであつて、天主閣の外觀は此の大阪陣屏風が最も據るところとされるものである。

尚ほ細部の裝飾手法については幸に此時代のものが數多く近畿地方に殘有して居るので此等のものを多く參考とする事が出來たのである、即ち大德寺唐門、西本願寺飛雲閣等は聚樂第の遺構とされるもので秀吉の作つたるものであつて尚又、伏見城の遺物と稱せられるものでも御香宮表門、高臺寺表門、豐國神社唐門、本願寺四脚門があり、書院には、西本願寺書院金地院方丈、南禪寺小方丈等があります。共に皆、桃山時代の美しい藝術をうかがふ事が出來るのであります。

安土桃山時代の現存の天主閣

さて我國の天主閣は戰國時代なる桃山時代より次の江戸時代にかけて最も盛に造營せられ、又其建築技術も極度に發達したるものでありますが、今其現存せられて居るものを求むれば極めて少なくして研究の資料の少なきを嘆ずるものでありますが、それにしても桃山時代建設のまゝなる遺物としては五指を屈するものがあります、即ち左の如くであります。

桃山時代の天主閣中
現存せるもの

築城年
天正二年　丸岡城　柴田　勝家

天正十七年　廣島城　毛利　輝元
天正十八年　松本城　石川　康長
慶長元年　大垣城　伊藤　祐盛
慶長二年　岡山城　宇喜多秀家

以上のものも度々の修理を加へられて現存せるものであつて、次に江戸時代に屬するものにして現存するものは年代順に列記すれば左の如くであります。

慶長五年　犬山城　石川　光吉
同　六年　松江城　堀尾　氏
同　六年　高知城　山内　氏
同　九年　彦根城　伊井　直孝
同十三年　姫路城　池田　輝政
同十五年　名古屋城　徳川　家康
同　水戸城　徳川　氏
元和五年　福山城　水野　勝成
弘化四年　和歌山城　徳川　氏

等であります。

此等の内最も大なるものは名古屋城と姫路城であります。

大阪城新天主閣には桃山時代の藝術品を多分に採り入れた

建築史のみならず又美術史には桃山時代の藝術として一大劃期をなすものでありますが、桃山と云ふ名稱の由つて起こつたのは、秀吉が文祿三年に伏見に桃山城を築いてそこに居つたから秀吉の時代をば桃山時代といひ、信長の時代と合せて安土桃山時代と云はれたものである。

豪快な性質を持つて居る秀吉の事であるから此の時代の藝術といひ、繪畫といひ、工藝品といひ、風俗といひ、自から豪放で濶達なものがあつた。建築で申すならば今の西本願寺の唐門、書院、同構内の飛雲閣、大德寺唐門、豊國神社の唐門などは聚樂第や桃山城の遺物であるが、前時代の室町時代のやうな地味な所がなく積極的に思ふ存分やつて見るといふ時代精神がよく現はれて居る。又繪畫や彫刻が盛んに建築物に應用せられた。特に天主閣内にも華麗な此等のものが極度に施されたものである。繪畫には狩野派に永德や山樂が出て桃山城や聚樂第の障子や屏風にその勇健なる筆を揮つたものである。此れ等の構圖の雄大、彩色の豊艶な點に其特長が見えて時代精神がよくひらめいて居るのである。彫刻などには左甚五郎などの名人が出た。左利きであつた事は有名な事で、色々な不思議の傳說が澤山に殘つて居るのを見てもその名工であつた事が判る、此れも多くの建物に其技をふるつたものである。

茶の湯は前時代に引きつゞきて益々盛に行はれ、千利久などの名人が出た。從つて茶器にも種々の名品が出て、漆器や陶器は頗る發達したものである。蒔繪も大に進歩した。秀吉の夫人の淺野氏の閑居した京都の高臺寺には、其模範的の名品が多く殘つて居る。松、薄、紅葉などを巧みに寫生的に現はしてある、世に此のたぐひのものを高臺寺蒔繪といつて居る。

大阪城天主閣にも最上層の勾欄のある廻廊の壁面には一大蒔繪を施し、八面の壁に八姿の舞鶴の漆蒔繪を施し、此圖案は京都の澤部清五郎氏を煩はし、漆工の名工なる遊部石齋氏が施工したるものである。廻廊下の壁面には黒地に金の虎の薄肉彫刻を表はし、此は銅板の打出し彫刻であつて、其一尾の大きさは長十一尺高さ五尺と云ふ極めて尨大なるもので我國打出彫刻の最大のものと云はれる、大阪の大國壽郎氏の原型圖案に依るものである。（完）

附記、本稿は別項京阪神新建築集の大阪城天主閣の寫眞を參照して下さい。

『建築と社會』昭和六年度特輯計畫

新年號（一月發行賣切殘本なし）
震火災と建築（二月發行賣切殘本なし）
保健と建築（三月發行賣切殘本なし）
小住宅（四月發行濟殘本あり）
鄉土建築（五月發行賣切殘本なし）
建築事務（六月發行濟殘本あり）
新興建築（七月發行濟殘本なし）
建築と都市問題（八月發行濟殘本あり）
住宅（九月發行濟殘本あり）
小賣店・百貨店（十月發行濟殘本なし）
映畫館（十一月發行濟殘本あり）
劇場建築（十二月發行豫定）

右特輯計畫は漸くあと一ケ月で了りになりました、十二月號は都合で「劇場建築」を發行することに更めました。

本誌の表紙圖案（昭和七年度用）を募集して居ります、ご應募を歡迎致します、詳細は會告を覽て下さい。

『建築と社會』編輯部

本誌定價表

冊數	定價郵稅
一冊	五拾錢 貳錢
十二冊	六圓 貳拾四錢

廣告揭載料金

普通紙	一頁	一回	二五・〇〇円	普通紙半頁	一回 八・〇〇円
普通紙（前附第一頁）	一頁	一回	四五・〇〇	普通紙（前附第二頁）	一頁 一回 四〇・〇〇
普通紙（後附第一及最終頁）	一頁	一回	二五・〇〇	アート紙（中揷）	半頁 一回 二〇・〇〇
表紙二	一頁	一回	六〇・〇〇	表紙三	一頁 一回 四五・〇〇
表紙三	一頁	一回	八〇・〇〇		

昭和六年十月廿七日印刷
昭和六年十一月一日發行（毎月壹回一日發行）

兵庫縣武庫郡今津町浦風五六番地
發行兼編輯人 鷹取陽

大阪市東區內淡路町一丁目七番地
印刷所 大阪活版所

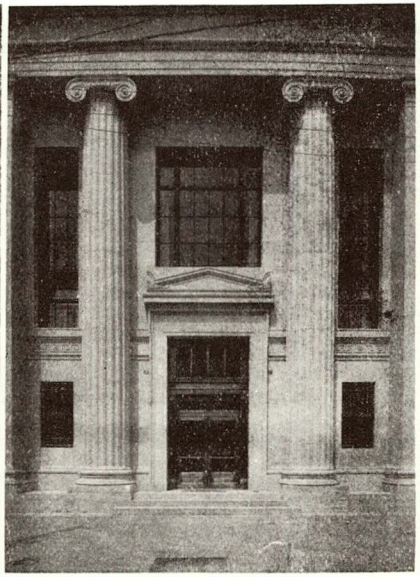
大阪市西區土佐堀通一ノ一大同ビル
發行所 社團法人 日本建築協會
電話土佐堀四二六五番 振替口座大阪三九、九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店 柳々堂書店
電話土佐堀二四四〇番 振替口座大阪二二〇八四番

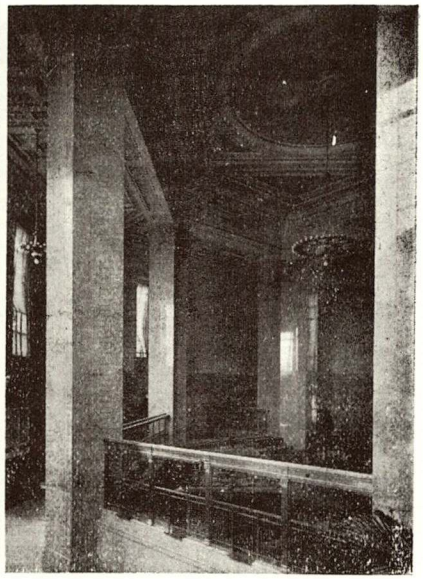
御購讀の向は本會直接又は特約店へ振替又は爲替で前金御拂込を願ひます。



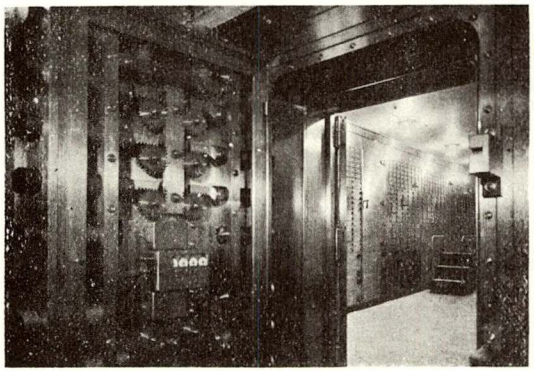
外　　觀



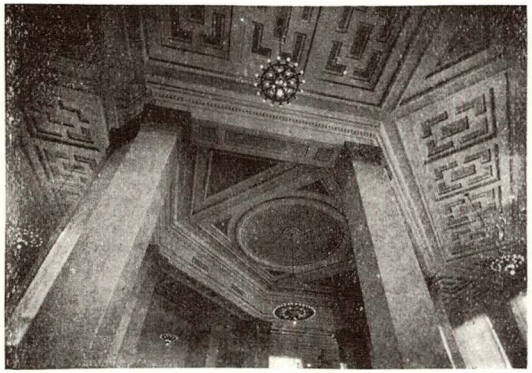
正面玄關



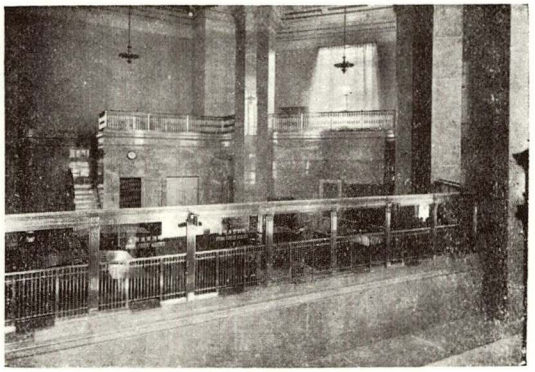
營業室



金庫室



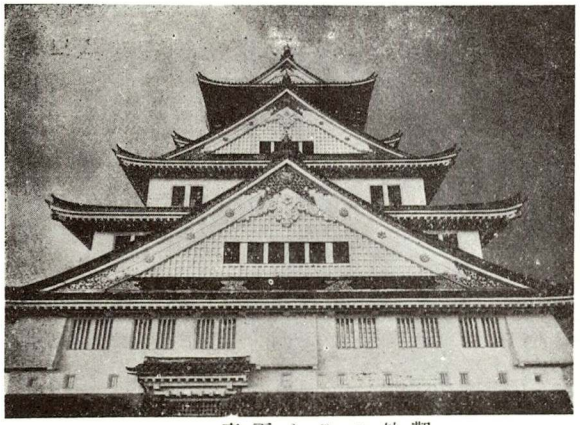
營業室天井



營業室

大阪(西區本田二番町)株式會社三井銀行大阪川口支店

設計　トローブリッヂ・エンド・リビングストン事務所　施工　大林組



南面よりの外觀



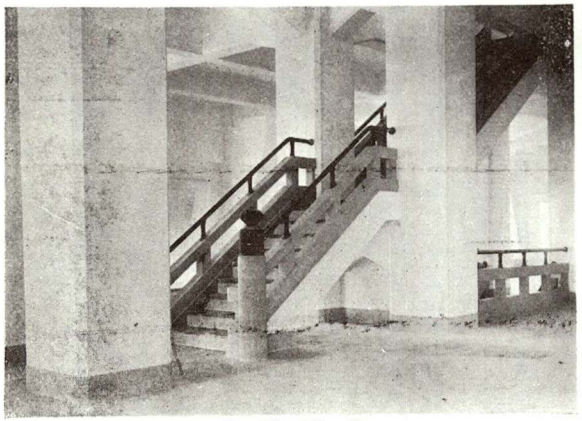
北西面よりの外觀



東南面よりの外觀



正面入口



内部階段

敷地

(一) 天王閣は標高四十六米突を有する巨石を以て築き上げたる石垣上に建設せらる

建築面積

階名	面積(坪)	南北寸法(尺)	東西寸法(尺)
第一階	362.77	121.6	107.4
第二階	365.94	222.1	107.9
第三階	294.64	105.9	91.7
第四階	201.43	83.7	74.5
第五階	139.75	88.7	55.5
第六階(廻廊)	38.29	55.5(幅5.7)	55.5
第七階	67.11	48.0	48.0
第八階	67.24	49.2	49.2
計	1534.24		

高さ　地盤より石垣上端まで四十四尺にして石垣上端より棟迄百三十尺なり

構造の大要

構造の主體は鐵骨鐵筋コンクリート周壁、床及屋根地は凡て鐵筋コンクリート造にして現存の地盤中央部を總堀りし鐵骨鐵筋コンクリートの一枚基礎の基盤を構成し之に二十四本の主要鐵柱を建つ、周壁の下部は單に石垣と接するのみにして荷重を負荷せしめざるものとす。

柱、梁、壁梁、中間梁、持出梁及斜柱、支柱等の大荷重を負ふものには梯子組又は襷組構造とし凡て鐵筋「コンクリート」を以て被覆す、屋根際の雨負前包、裏甲、破風廻等は鐵筋コンクリート打とし、化粧軒裏茅負共「ラス」張りモルタル塗とし屋根軒出の部分は鐵骨構造に「ハイリツブ」張りモルタル塗りとなしコンクリート打とす、椎形及木連格子は溝形コンクリートを屋根裏にボールト締めに取付く

仕上げの大要

1、外部仕上げ最上層は漆黒人造石、洗出し又は鏝磨き仕上とし四層以下及上層妻は白「モルタル」塗り仕上げ第二階外部窓ハ塗込格子とす。

内部周壁及天井「ドロマイトプラスター」白仕上とし、階段室及手摺等は人造石研出し、各階床は最上層木造ブロック張り廻り椽は人造石研出し廻廊は木造にして其他は床凡て「タービアモルタル」塗とす。

1、屋根瓦は黒銅を以て本瓦葺とし軒先、巴及唐草瓦は金箔張りとし各棟、降り棟、隅棟等は鐵筋コンクリート打出し凡て銅板包みとす、大棟鯱、鬼板、鳥衾及棟飾等は青銅鑄造並銅板打出し金箔張りとし破風其他外部錺は銅板打出し金箔張りとす。

1、上層廻椽勾欄並各階段手摺は鋼鐵製黒塗りとし各階窓は鋼製にして窓外部鐵格子建込み、各扉は鋼製とし「ラッカー」又はペンキ塗とす。

最上層外部壁間に舞鶴のコンクリート地漆蒔繪八姿を廻椽下に伏虎の銅板打出し彫刻金箔張りを嵌入す。

1、階段は總て鐵筋コンクリート造五階迄は四個所五階より八階迄は二個所とし此他に客用昇降機二基を置き第一階には水洗便所及手洗所を設く。

大阪城天王閣(東區大手前)

設計　大阪市建築課　　施工　大林組

建築と社會第十四輯第十一號

廣告目次

ア
有山組……一三
安藤組大阪支店……一三
旭硝子株式會社……五一
淺野スレート株式會社……二九
淺海商店……三六
阿部鐵工所……五八

イ
池田建築事務所……一〇
池田谷建築事務所……一〇
池田組……一三
伊藤建築事務所……一〇
岩波書店……一九
石川商會建材部……五三

エ
榮進社……二七

オ
オリエンタルメタル製造所……四七
オキナ商店……四六
大阪ピトロライト工事合資會社……三〇
大阪製鎖所エレベーター部……一四
大阪窯業セメント株式會社……三
大阪伊丹商店……二四
大阪橋本組……一四
大林組……一四
大倉土木株式會社大阪出張所……一三
大野製作所……一
小笠原建築事務所……一〇
奥村重兵衛商店……三八
岡部建築事務所……一〇
岡本工務店……一四
置鹽建築事務所……一〇

カ
葛野建築事務所……一〇
龜谷開作商店……一五

キ
木下謹三商店……二四
桐田商會……四五

ク
國枝工務所……一〇
熊取谷熊次郎商店……一五
久保田組……一八
黒川化學工業所……三〇
クロースルーフキング製作所……六三

コ
鴻池組……一五
駒井喜鐵工所……一五
工材社(阪口芳三郎)……八

サ
佐伯組……一六
佐久間建材工業所……二二
三共株式會社……二五
笹岡家具裝飾店……三二
阪本商會大阪出張所……三六
三稜社……四三
佐渡島西店建材部……四八

シ
清水榮二建築事務所……一〇
清水組大阪支店……一六
城口研究所大阪支店……五四
設樂建築事務所……一一
島貿易株式會社建材部……六四

ス
須賀商會……四一

セ
清光社……六五

ゼ
錢高組……一六

ソ
宗建築事務所……一一

タ
竹中工務店……一六
田村商會……五七
田中昌司商店……三二
田島工業株式會社……四四

ダ
ダンロップ護謨株式會社……五
大元塗料店……五九
大和工業株式會社……六七

ト
朝永建築事務所……一一
東洋陶器株式會社大阪出張所……六二

ナ
ナンコク商事株式會社……三一
中村建築事務所……一一
中川辰藏店……一七
內外土木建築材料合資會社……五二
南滿鑛業株式會社……四〇

ニ
日本セメント防水劑製造所……四四
日本ペイント株式會社……三七
日本木材工藝株式會社……六六
日本建築紙工株式會社大阪出張所……四三
日本石綿盤製造株式會社……三五
西原衛生工業所大阪支店……三三
西孫南店建築金物部……三五
日本ドアーチェック製作所……六〇
日本鋼製建具株式會社……六一
新田ベニヤ製造所……六八

ノ
野村建築事務所……一一
野澤幸三郎商店……四二

ハ
橋本建築事務所……一二
原科建築事務所……一一

フ
古塚建築事務所……一一
藤木工務店……一七
藤田商會……二八

ホ
ホーン商會……七

マ
マルエス工業株式會社……二三
眞水三橋建築事務所……一二
松村組……一七

ミ
三木商店……五五
ミナト製作所……四〇
三井物產株式會社……二六
宮島康夫商店……六三

ム
村上建築事務所……一二

モ
森本建築社……一七

ヤ
安井建築事務所……一二
山中商會……四九
矢橋大理石商店……二八
山本東作商店……五九

ヨ
横河工務所……一二
横河橋梁製作所……三九
米本商店……五〇
米野商店……六五

レ
玲光社(木內眞太郎)……五〇

建 築 事 務 所 錄

（五 十 音 順）

オ-カ-ク-シ　　イ—オ

オ

設 計 監 督

岡部建築事務所

建築士 岡 部 顯 則

大阪市西區靱下通一丁目
二 十 二 番 地
電 話 土佐堀五三二三番

出張所　大阪市南區心齋橋大丸建築場

イ

設 計 監 督

池田建築事務所

工學士 池 田 實

大阪市南區難波驛前鴻池ビル
電 話 戎 一 一 二 三 番

イ

設 計 監 督

池田谷建築事務所

建築士 池田谷 久 吉

大阪市西區京町堀上通一彌生ビル
電 話 一五八一・二九五五
土佐堀 三四〇八・四八六七

カ

設 計 監 督

葛野建築事務所

工學士 葛 野 壯 一 郎

大阪市北區絹笠町大江ビル
電 話 北 二 四 九 二 番

イ

設 計 監 督

伊藤幸太郎建築事務所

伊 藤 幸 太 郎

大阪市北區相生町三五
電 話 東 五 七 〇 三 番
分室—大阪市港區夕凪橋畔佐伯ビル
電 話 西 一 〇 九 〇 番

ク

設 計 監 督

國 枝 工 務 所

工學士 國 枝 博

大阪市北區玉江町二丁目四ノ一三菱ビル
電話土佐堀四三三三番
東京市京橋區銀座西五丁目日動ビル
電話銀座二九四五番

オ

設 計 監 督

小笠原建築事務所

建築士 小笠原 鉊（スミ）

大阪市北區曾根崎中二丁目
第一曾根崎ビル第四十一號室
電話北二一五五・二一五六番

シ

設 計 監 督

清水榮二建築事務所

工學士 清 水 榮 二

神戸市灘區八幡友田三三
電話御影五六一五番

オ

設 計 監 督

置鹽建築事務所

工學士 置 鹽 章

神戸市榮町二丁目山口ビル四階
電話三宮(3)三四七〇番